

第3章 岐阜城跡の調査

第1節 城郭の調査

岐阜城跡ではこれまでに発掘調査や文献調査などを継続して実施している。平成 23 年度には『史跡岐阜城跡保存管理計画書』において自然や信仰、景観、岐阜公園など様々な観点から調査を実施し、平成 20 年度から 25 年度にかけて岐阜城跡も含めた文化的景観の調査が行われた。そして、令和 2 年度にはこれまでの調査研究の整理を行うとともに、多角的な総合調査を行い、『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』を刊行した。本章ではこれまで実施した調査を各節にまとめた。

1. 発掘調査

岐阜城跡における山麓部の発掘調査は、昭和 59 年（1984）の 1 次調査を皮切りに、発掘調査が 4 回、試掘調査が 4 回、立会調査が 12 回行われた。平成 29 年度に 4 次調査が完了し、山麓部の発掘調査は一旦の区切りを迎える。平成 30 年度からは山上部・山林部の発掘調査に着手し、現在も継続中である。発掘調査の概要は以下のとおり。

(1) 山麓部

山麓部は金華山西麓の槻谷に位置し、谷川によって形成された扇状地を削平・盛土して造られたひな壇状の平坦地で構成される。これまでの 4 次にわたる調査で永禄 10 年（1567）～慶長 5 年（1600）と永禄 10 年以前の大きく 2 時期に分かれる戦国期の層が確認されている。

・1次調査(1984～1987)

1 次調査は市制 100 周年記念事業に伴い、千畳敷下（下段・中段）と千畳敷（上段）の 3 つの平坦地で実施された。調査の結果、下段・中段では戦国時代の遺構面が上層面・中層面・下層面の 3 面確認されている。中層面と上層面の直上には炭層がみられ、火災後に廃絶した状況が見られる。出土遺物や文献記録から、中層面は永禄 10 年（1567）に信長が稲葉山城を攻略した際の火災、上層面は慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城が落城した際の火災により廃絶したものである可能性が高い。上層面では巨石石垣で区画された大規模な通路や石垣、建物の礎石などが見つかっている。また中層面から後斎藤期と考えられる石垣が見つかっている。

・2次調査(1988～1989)

2 次調査はロープウェー山麓駅の北側に計画された美術館建設に伴い行われた。戦国時代の遺構のほか、中世の地鎮遺構や古代の土坑、6～7 世紀の横穴式石室（千畳敷古墳）が検出され、懸仏や連珠文軒平瓦などの宗教施設と関わる遺物が出土している。また 2 次調査の再検討により、この場所に神社が存在した可能性が指摘されている（内堀 2021）。1 次調査上層面に対応する遺構では石敷き遺構や竈跡が見つかっており、庭園とそれに伴う湯殿の可能性が指摘されている（恩田 2021a）。

・3次調査(1997～1999)

3次調査は岐阜公園の庭園整備に伴い行われた。調査の結果、戦国時代では少なくとも3時期の遺構が重複しており、その下に中世、古代の遺構面が見つかるなど、多くの遺構面の重複が確認された。戦国時代の遺構では石組井戸や石垣、意図的に埋められた打刀などが見つかっている。その他、中世の遺構・遺物として鑄造関連の遺構や梵鐘の鑄型、五輪塔、「大寺」と書かれた墨書土器などが見つかっており、中世には宗教施設があった可能性が高いことが判明した。

・4次調査(2007～2017)

平成19年度から開始した山麓部庭園の第4次調査は調査区をA地区・B地区・C地区・D地区・E地区・F地区の6箇所に分け実施した。I層からV層までの5面確認されており、IV層が1次調査の上層面、V層が中層面にそれぞれ対応する。

A地区は谷川の北側にある平坦地で平成25年度に全面的に調査が行われた。西・南・北側は石垣で区画されており、東側にそびえる巨大な岩盤を背景とした池泉遺構が見つかっている。平坦地の中央に巨大な池があり、東側の岩盤の上から流れる2本の滝を背景にしている。岩盤から流れ落ちる2本の滝によって水を取り入れていたと考えられる。池の北側と南側からは建物の礎石が見つかっており、宴遊のための建物の存在が想定される。西側の石垣を埋めていた崩落礫層からは食器類を中心とした陶磁器、かわらけや貝殻が多量に出土しており、宴会などの痕跡と考えられる。南側では階段、石垣、虎口状遺構が弧を描くように連続して配置されており、虎口状遺構は後述するC地区を結んでいた橋の基礎である可能性が高い。

B地区は山麓部の東奥に位置し、谷川と石垣で区画された3つの段差のある空間からなる。一番低い平坦地では、建物の壁土や礎石が見つかり、壁の推定厚さから蔵状建物が建っていたことが想定される。二段目の平坦地では礎石や水路が、三段目の平坦地では池泉遺構が見つかっており、当該地がルイス・フロイスの記述にある「茶の座敷」であったことが想定される。二段目と三段目を区画する石垣は途切れることなく構築されていることや、三段目の極めて狭い平坦部分で礎石が出土していることから二段目と三段目を跨ぐ一体の建物が建てられていた可能性がある。また、見つかった石垣や壁土は被熱により変色しており、廃絶時に火災が起こったものと考えられる。

C地区は谷川の南側にある平坦地で、公園造成に伴う削平が大部分に及んでおり、遺構はほとんど確認されていないが、縁辺部では北側斜面上で上段へ上がる通路を確認した他、巨石石垣を背景とした池泉遺構など、4箇所庭園に関する遺構が確認されている。特に、南西部では瓦が集中して出土しており、その中には屋根の棟に用いられた金箔飾り瓦が見つかっている。南西部では瓦の他に鉄釘も多く出土しており、建物の存在を示していると考えられる。一方、北部中央では瓦の出土は少ないが、鉄釘が多量に出土しており、瓦を使用しない建物の存在が想定される(恩田2021a)。

C地区の南西側に位置するD地区では、石垣などが確認されている。中央部のトレンチでは整地された面が確認されたが、明確な遺構は見つかっていない。遺構が確認されなかったトレンチについては掘り下げを行い、その結果一部のトレンチから永禄10年(1567)の信長による美濃攻めによるものと思われる炭・焼土層が確認された。

E地区はA地区下段に位置する平坦地である。限られた範囲での調査であるが、東端で礎石や排水施設と考えられる集石遺構などが確認されている。

F地区は居館の西側最下段に位置する平坦地である。4次調査では北側の広場と南側階段付近の2ヶ所で調査を行った。近代以降の公園整備工事により大部分で攪乱を受けているが、炭を含む整地土や戦国時代の遺物が散見されていることから、本来は何らかの遺構が周辺に存在していたと考えられる。

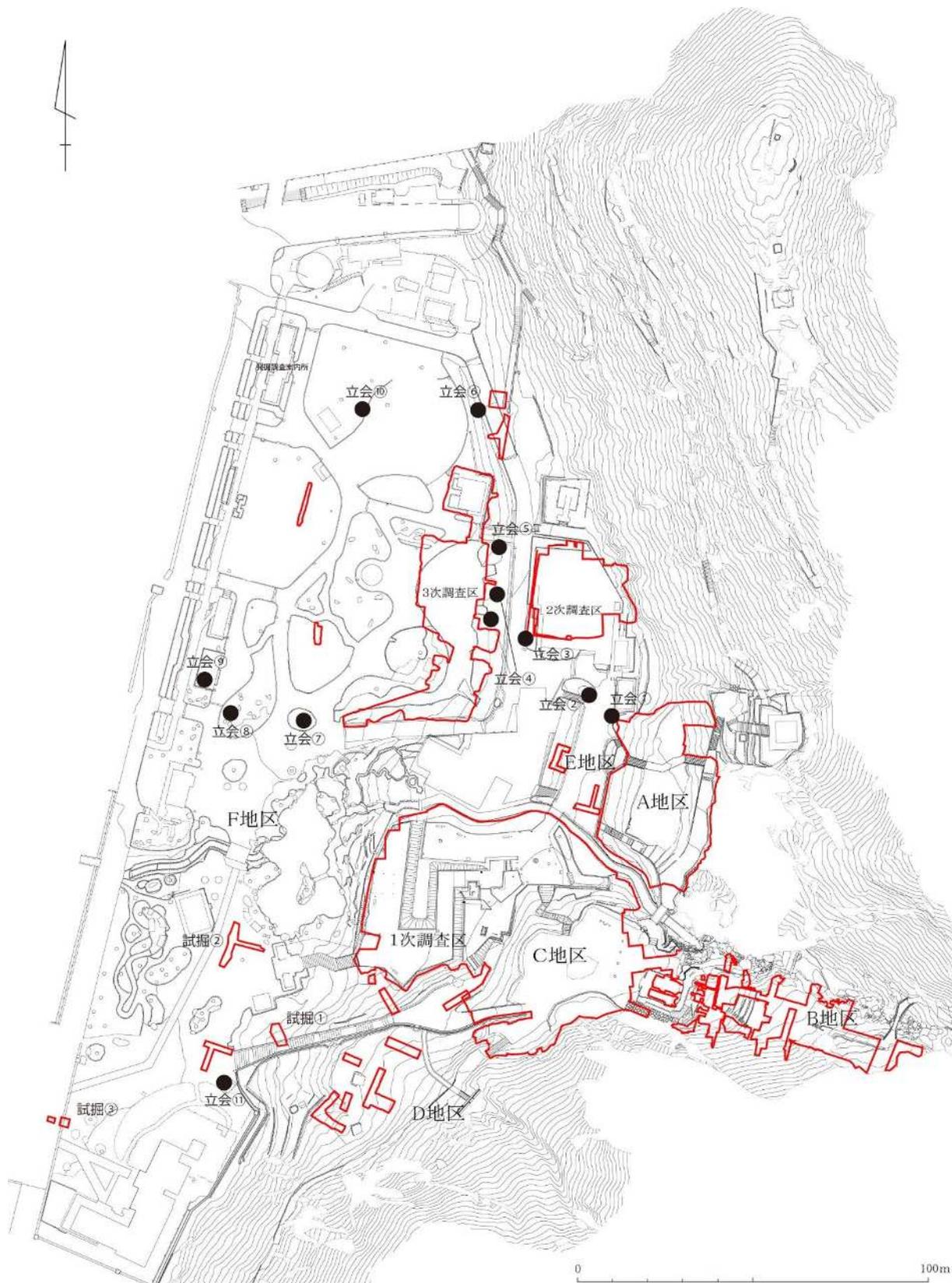


図 3-1 山麓部 既往の調査位置図

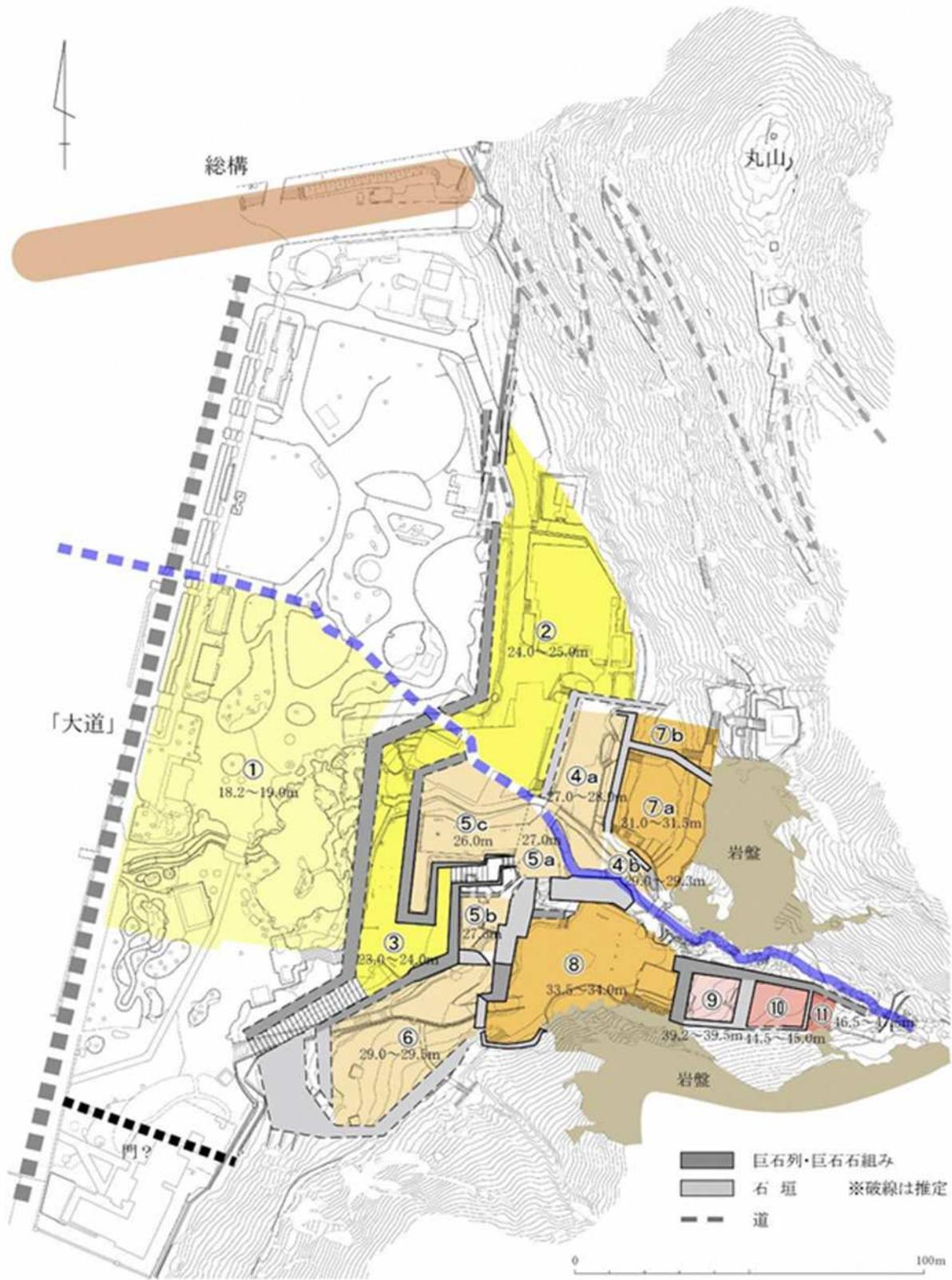


図 3-2 山麓居館地形復元平面図

(恩田 2021a から引用)

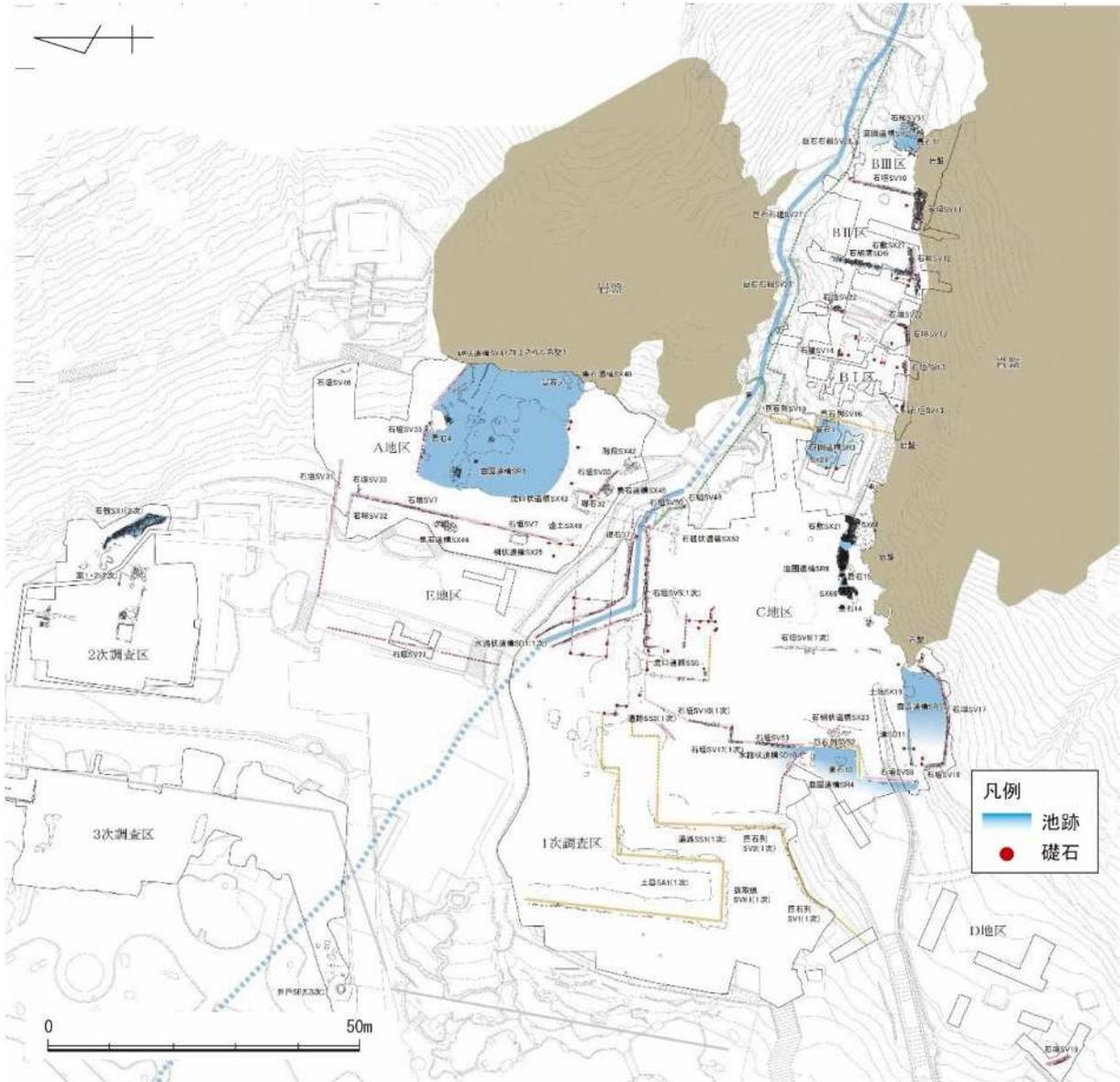


図 3-3 山麓居館遺構平面図

(恩田 2021a から引用)



写真 3-1 山麓部全景



写真 3-2 出入口通路と巨石石垣



写真 3-3 石敷遺構



写真 3-4 A地区池泉遺構と岩盤



写真 3-5 B地区池泉遺構



写真 3-6 C地区池泉遺構

(2) 山上・山林部

山上・山林部では平成12年度に小規模な試掘調査が行われているが、本格的な確認調査は平成30年度からである。令和2年度までに1区から7区までの調査区を設定してトレンチによる確認調査を実施し、石垣等の遺構や遺物を確認している。石垣の分類については恩田裕之氏の論考(恩田2021b)を参照した。

・平成12年度の試掘調査

観光施設整備に伴い、「上台所」曲輪直下の通路の試掘調査を実施した。通路に直交する方向で2か所にトレンチを設定した(以下Aトレンチ、Bトレンチ)。結果、両トレンチで厚さ約0.1～0.4mの表土の下に遺物を多く包含する土層が確認された。この土層は調査区南に位置する「上台所」曲輪からの流れ込みと思われる。また、Aトレンチでは戦国時代に作られた通路の整地層と考えられる土層が確認された。遺物は大窯の天目茶碗、かわらけ、飾り瓦等が出土しており、飾り瓦には被熱の跡が見られる。

・1区(二ノ門周辺)

1区は、二ノ門直下の斜面に設定した調査区である。確認された石垣は地山を階段状に削った上に構築されており、残存高は約1.5m、長さ約4.8mを測る。石垣東側は崩落しており、裏込め石が露出している。大きな石材を、緩やかに傾斜をつけて積み、間詰石を多用している特徴から信長入城後の石垣に分類される。石垣西側の裏込め石の範囲が、北に長く延びることから、西端で北側に曲がるL字状の石垣であることが判明した。

・2区(二ノ門周辺)

2区は1区の登山道を挟んだ西側に設定した調査区である。平成30年度に設定したトレンチで石垣前面部分とみられる平坦地を確認したため、令和元年度にトレンチを北東へ延長した結果、最大3段、残存高約0.5mの石垣を確認した。石材の形状や積み方から信長入城後の石垣に分類される。遺物は瓦のほか、岐阜城の発掘調査では初めてとなる鉄製の矢じりが出土した。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの前哨戦で使用された可能性がある。

・3区(天守台周辺)

3区は復興天守の北西角部分に設定した調査区である。最大3段残存し、長さ約1.8m、高さ約0.8mを測る。また、斜面に設定したトレンチでは2段目の石垣を確認した。2段目の石垣の裏込め石は、天守台石垣基底石の下方まで伸びて基礎を兼ねていることから、天守台石垣と2段目の石垣が一連の工事により、同時期に造られたことが判明した。石垣は信長入城後に分類されるが、その中でも古い様相を示し、出土遺物で信長期に位置づけられる軒丸瓦と軒平瓦が見つかることから、信長期に築かれた可能性が高い。

・4区(岐阜城資料館南側)

4区では石垣の可能性のある石材の周辺にトレンチを設定した。その結果、石の背後に裏込め石と考えられる礫層を検出し、平坦地又は通路を護岸するような石垣の一部であることが確認された。

・5区(中腹部)

平成29年度から令和元年度に行った分布調査で初めて確認された曲輪群である。3段ある曲輪群のうち、虎口と推定される部分にトレンチを設定して調査を行った結果、通路の可能性のある硬く締まった整地層や、かわらけが確認された。

・6区(上台所跡)

6区では、上台所に存在する建物の四方にトレンチを設定した。南・北トレンチは自然堆積層まで近現代の攪乱が達する状況を確認し、西トレンチでは表土下で岩盤を検出、表土層からは土師器皿が出土した。東トレンチでは石垣の裏込め石の可能性のある礫層を確認した。礫層の直上にはしまりのある暗褐色土が堆積しており、戦国期の整地層の可能性が高い。

・7区(一ノ門)

一ノ門の構造確認のため、トレンチを3ヶ所設定し調査を行った。調査の結果、一ノ門は岩盤の高まりの周りに石垣と巨石石垣を組み合わせ築かれており、その構造と平面形が山県市大桑城の「岩門」と非常に類似することから、大桑城と同時期の後斎藤期に築かれた可能性が高いことが明らかになってきた。また、岩盤上面を平坦に加工した跡が3ヶ所見つかっているが、これは門の柱を立てた跡の可能性が高い。岩盤は火を受け赤く変色しており、焼けた瓦や壁土が見つかることも踏まえると、信長入城後に瓦葺の門に改修され、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の前哨戦で火災が起こり焼け崩れたと考えられる。



図 3-4 山林部発掘調査位置図



図 3-5 山上部縄張図 (中井均氏作成)

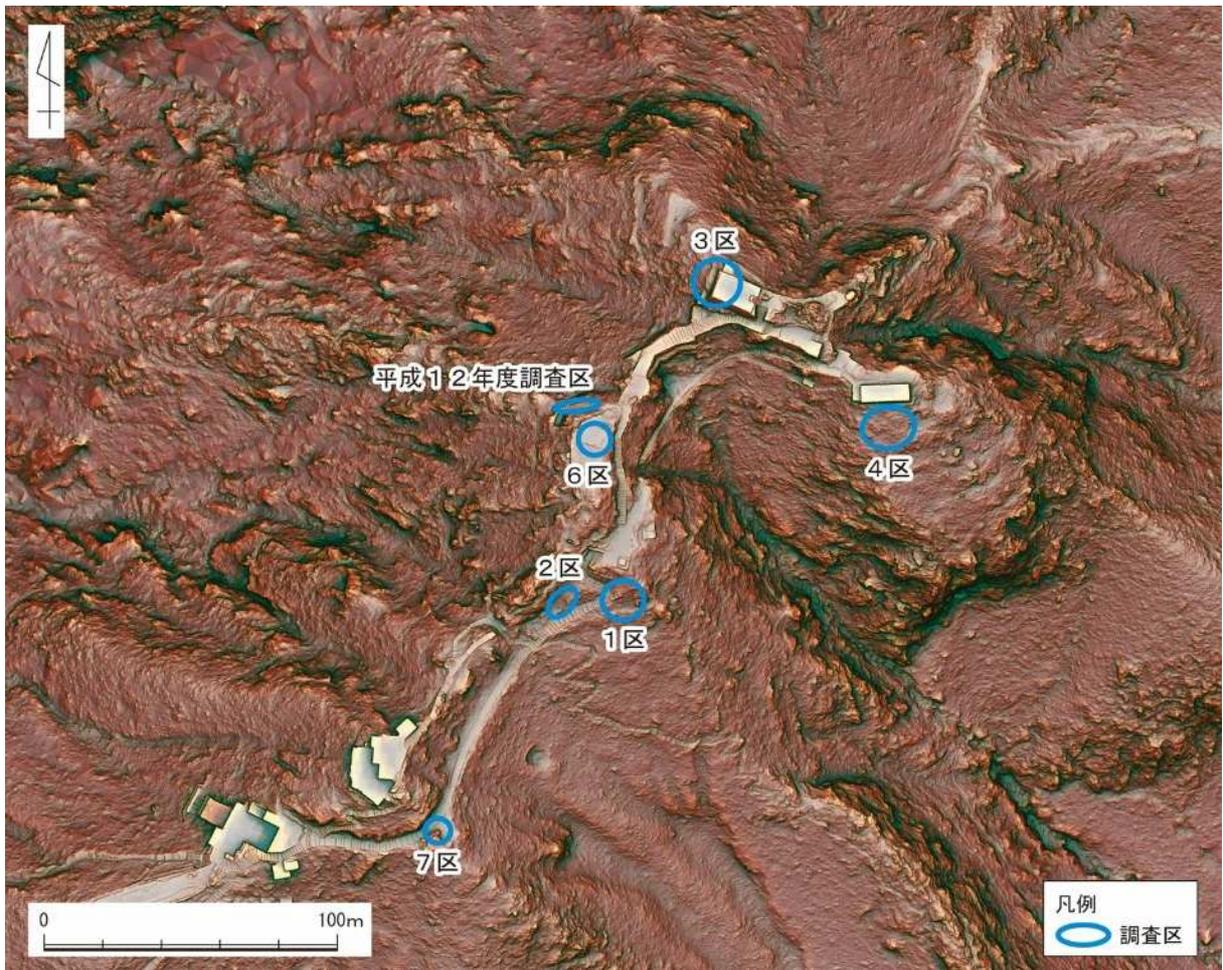


図 3-6 山上部発掘調査位置図



写真 3-7 平成 12 年度 A トレンチ



写真 3-8 平成 12 年度 B トレンチ



写真 3-9 1 区石垣



写真 3-10 2 区石垣



写真 3-11 3区石垣 (天守台)



写真 3-12 3区石垣 (天守台 2段目)



写真 3-13 4区石垣



写真 3-14 5区トレンチ



写真 3-15 6区東トレンチ



写真 3-16 7区全景



写真 3-17 2区出土鉄製矢じり



写真 3-18 3区出土軒丸瓦



写真 3-19 3区出土軒平瓦



写真 3-20 3区瓦出土状況

(3) 成果のまとめ

山麓部については、信長期以降の遺構について広い面積の発掘調査が行われ、全貌が明らかになりつつある。『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』において、恩田裕之氏は調査成果をまとめ、遺構と遺物から各平坦地の性格や動線、建物の存在を推定している（恩田 2021a）。また、恩田氏と光成希望氏による出土瓦の検討により、信長期における金箔瓦の使用、豊臣秀勝期における広範囲の瓦葺改修、織田秀信期における部分改修等が判明した（恩田 2021a・光成 2021）。

山麓部の庭園については、4次調査までに様々な場所から池泉遺構や人工的に修景された谷川や岩盤が確認された。これら個々の遺構は井川祥子氏の分析により、谷川や岩盤を介して繋がり、高さや奥行きのある大きな庭園空間を作り出していることが明らかになってきた（井川 2021）。

山上部の発掘調査では、各所で戦国期の遺構や遺物が残存していることが確認された。天守周辺では天守台石垣と信長期に位置づけられる軒丸瓦と軒平瓦が見つかり、信長在城時に天守台とその上に乗る瓦葺建物が築かれた可能性が高いことが判明した。また、一ノ門は信長以前の後斎藤期に築かれ、信長入城後、瓦葺の門に改修されたとみられることから、後斎藤氏の稲葉山城を利用しながら、信長やその後の城主たちによって改修されたことが明らかになってきた。

これまでに山麓部と山上部の調査を実施したことで岐阜城全体での検討が出来るようになってきた。ただし、山麓部、山上部ともに未調査箇所が残っているため、今後も継続して調査を行うことが必要である。

【参考文献】

- 井川祥子 2021 「岐阜城跡山麓居館の庭園群の様相」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
- 内堀信雄 2021 「岐阜城山麓居館の前史—十三世紀～十五世紀の千疊敷遺跡」『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 恩田裕之 2021a 「山麓部における発掘調査の成果」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
- 恩田裕之 2021b 「岐阜城の石垣の分類と様相」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
- 恩田裕之 2021c 「分布調査」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
- 岐阜市教育委員会 1990 『千疊敷—織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備—』
- 岐阜市教育委員会 1991 『千疊敷Ⅱ—財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録—』
- 岐阜市教育委員会 2002 『平成 12・13 年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2009 『岐阜城跡—織田信長居館伝承地の確認調査および岐阜城跡の遺構分布調査—』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2013 『岐阜城跡 2—織田信長居館伝承地の確認調査—』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2015 『岐阜城跡 3—史跡整備に伴う発掘調査—』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2016 『岐阜城跡 4—織田信長居館伝承地の確認調査—』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2019 『岐阜城跡 5—史跡整備に伴う発掘調査—』
- (財)岐阜市教育文化振興事業団 2000 『千疊敷Ⅲ—岐阜公園再整備事業に伴う岐阜城千疊敷遺跡の緊急発掘調査—』
- 光成希望 2021 「岐阜城跡出土瓦の分類と変遷」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
- 森村知幸 2021 「試掘調査」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

表 3-1 既往の山麓部発掘調査（1）

調査回数	年月日	調査主体	目的	内容
1次調査	昭和59年 11月12日 ～ 昭和62年 7月9日	岐阜市教育 委員会	史跡整備に 伴う調査	戦国時代の遺構面が3面確認された。2層上面を上層面、3層上面を中層面、4層上面を下層面としている。上層面では、巨石石垣に区画された大規模な通路や石垣、水路、礎石建物などが検出されている。下層調査はトレンチもしくは攪乱部分で行われており、中層面では水路や石垣などが、下層面でも石垣が検出されている。調査後は遺構の復元整備が行われ、現在公開されている。
2次調査	昭和63年 6月23日～ 平成元年 8月31日	岐阜市教育 委員会	美術館建設 に伴う調査	戦国時代の竈や竈作業場、帯状石列遺構のほか、中世の地鎮遺構や石垣等、古代の土坑、最下部では6～7世紀の横穴式石室(千畳敷古墳)が検出された。竈は現在、美術館内に移築復元されて展示公開されている。
3次調査	平成9年 9月1日 ～ 平成11年 6月30日	(財)岐阜市 教育文化振 興事業団	山麓の庭園 整備に伴う 調査	戦国時代では少なくとも3時期の遺構が重複しており、その下に中世、古代の遺構面が多数見つかるなど、多くの遺構面の重複が確認された。このうち戦国時代の石組井戸は調査後、現地に復元されている。
4次調査 (内容確認)	平成19年 7月18日 ～ 平成27年 1月30日	岐阜市教育 委員会 (財)岐阜市 教育文化振 興事業団	遺跡の内容 確認	岐阜城千畳敷遺跡のA～F地区にトレンチを設定。A～C地区では複数の庭園遺構や礎石建物を検出。また通路や水路等も確認した。史跡指定地外のD～F地区では近代以降の公園整備工事により大部分で攪乱を受けているが、礎石や排水施設と考えられる集石遺構、炭を含む整地土や戦国時代の遺物が散見されている。平成19・20年度、平成21～23年度、平成24・26年度の成果に分けて報告書を刊行している。
4次調査 (史跡整備)	平成25年 6月19日 ～ 平成29年 12月28日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	史跡整備に 伴う調査	谷川の南北平坦地を面的に調査。北側の平坦地(A地区)では、平坦地中央に池泉遺構があり、岩盤とそこから流れ落ちる滝を背景にした庭園であることが明らかになった。南側の平坦地では、戦国時代の池泉遺構や金箔瓦を含む瓦集積遺構等を検出した(C地区)。東側の平坦地では戦国時代の池泉遺構のほか、円礫による石積みの穴蔵状遺構などが見つかった(B地区)。平成25年度、平成27～29年度の成果に分けて報告書を刊行している。

表 3-2 既往の山麓部発掘調査（2）

調査回数	年月日	調査主体	目的	内容
試掘調査①地点	平成17年 7月19日 ～ 8月1日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	戦国時代の平坦面が2つ、約3mの高低差で確認されている。平坦地間の斜面下で巨石の抜き取り痕と考えられる土坑が検出された。堆積状況からこの抜き取りは1600年の廃城直後である可能性が考えられている。
試掘調査②地点	平成18年 7月4日 ～ 8月4日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	絵図に描かれている「昔御殿跡」の確認のため、千畳敷遺跡の最下段平坦地の南側で行われた。中世～戦国時代の整地層上に溝、土坑2基、石積みが検出している。
試掘調査③地点	平成19年 12月5日 ～ 12月7日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	絵図に描かれている南北の道である「大道」の確認のため実施された。検出した土坑からは被熱した瓦が出土しており、門などの施設が近隣に存在した可能性が指摘されている。
立会調査 ①～⑤地点	平成元年	岐阜市教育 委員会	工事立会	2次調査期間中及び終了後に行われた工事に伴い、立会調査を行った。
立会調査 ⑥～⑨地点	平成9年 ～ 平成11年	岐阜市教育 委員会 (財)岐阜市 教育文化振 興事業団	工事立会	3次調査期間中に行われた公園再整備工事に伴い、立会調査を行った。
立会調査 ⑩地点	平成22年	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	工事立会	公園遊具撤去に伴い、立会調査を行った。遊具を引き抜く工法が取られたため、新たな掘削は行われなかった。
立会調査 ⑪地点	平成31年	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	工事立会	案内標識設置に伴い、立会調査を行った。確認された3層は全て公園整備に伴う造成土であった。

表 3-3 既往の山上部発掘調査

調査回数	年月日	調査主体	目的	内容
試掘調査	平成13年 3月2日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	山上部の「軍用井戸」に至る通路の試掘調査。
試掘調査	平成30年 10月24日 ～ 12月1日	岐阜市教育 委員会 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	馬場から二ノ門の間における登山道周辺の2か所を調査(1区・2区)。検出された石垣は、石材が比較的大きく、間詰石を入念に入れて構築されており、山麓部で検出された石垣と共通する特徴を持つ。
試掘調査	令和元年 5月22日 ～23日、 10月31日 ～ 令和2年 3月16日	岐阜市 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	二ノ門周辺(2区)、天守台周辺(3区)、資料館南側(4区)、中腹部(5区)、上台所(6区)で調査を実施。信長期の天守台石垣などを確認した。
試掘調査	令和2年 10月28日 ～ 令和3年 3月19日	岐阜市 (公財)岐阜 市教育文化 振興事業団	遺跡の内容 確認	天守台周辺(3区)、一ノ門(7区)で調査を実施。一ノ門の構造が山県市大桑城岩門と酷似していることから同時期の斎藤道三によって築かれたことが確認された。また、天守台石垣の2段目を初めて確認した。

2. 分布調査

遺構確認の分布調査は平成 20 年度と平成 29 年度～令和元年度の 2 回行われている。

(1)平成 20 年度の調査

平成 20 年度の調査では、金華山及び周辺の山の登山道沿いを中心に行われ、広範囲で人工的な地形改変を受けた平坦地が確認された。また、山上主要部や、長良川や岐阜町に面した登山道沿いなどでは平坦地と石垣や石材の散布が組み合わさった遺構が確認された。

(2)平成 29 年度～令和元年度の調査

平成 29 年度からの調査は史跡範囲全域を対象として行われた。江戸時代の絵図『稲葉城趾之図』（写真 3-22）に「赤川洞」と記載された谷の下流で曲輪群と谷川を護岸していた可能性のある巨石石垣が確認され、恩田裕之氏は「槻谷」と同様に山麓居館が築かれた可能性を指摘している（恩田 2021）。また、標高 150m 前後の中腹部でも曲輪群が新たに確認された。巨石を使用した石垣を有し、発掘調査ではかわらけなどの遺物が見つかったことから何かしらの施設が存在したことが判明した。内堀信雄氏や中井均氏は信長の山麓居館と山上部の居城に対して、赤川洞と中腹部に息子である信忠の山麓居館と居城があった可能性を指摘している（内堀 2019・中井 2021）。

山上部の遺構は『稲葉城趾之図』に描かれたものと対応することが確認され、絵図の信憑性が再認識された。また、恩田氏は山上部の遺構は 3 時期にわたるものが混在している可能性を指摘している（恩田 2021）。（赤ヶ洞及び中腹部の位置については第 5 章図 5-7、5-8 を参照）



写真 3-21 赤ヶ洞巨石石垣



写真 3-22 中腹部石垣

(3)分布調査のまとめ

平成 29 年度より史跡範囲全域を対象として実施したことで、赤ヶ洞や中腹部等において新たな遺構群を確認できたほか、発掘調査成果と合わせることで岐阜城の石垣は大きく 3 種に分類できることが明らかになった（恩田 2021b・2021c）。

発掘調査や分布調査は現在も継続中であるため、今後の新たな成果も踏まえて岐阜城の構造や変遷を明らかにしていく必要がある。

【参考文献】

内堀信雄 2009 「分布調査」『岐阜城跡－織田信長居館伝承地の確認調査および岐阜城跡の遺構分布調査－』
岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団

第3章 岐阜城跡の調査

内堀信雄 2019 「岐阜城」『東海の名城を歩く 岐阜編』吉川弘文館

恩田裕之 2021b 「岐阜城の石垣の分類と様相」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

恩田裕之 2021c 「分布調査」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

中井均 2020 『信長と家臣団の城』KADOKAWA

3. 文献調査

戦国時代の岐阜城跡の様子を記した文献史料は、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスや京都の公家山科言継の記録が著名である。

『エヴォラ版日本書簡集』に掲載されている「1569年7月12日付、都発信、ルイス・フロイス師の、ベルショール・デ・フィゲイレド師宛の書簡」及び『日本史』第38章（第1部89章）には、ルイス・フロイスが初めて岐阜を訪れた際の様子が記されている。また、フロイスが2回目に岐阜を訪れた際の記録は『日本史』のほか、同行した日本布教長フランシスコ・カブラルの書簡にも記録されている。フロイスの記録には山麓居館の庭園や山上部の様子などが記述されており、当時の岐阜城の姿を伺うことが出来る。

フロイスの記録は遺跡との対比が行われ、景観・構造・機能などについて検討が行われている。近年では、アルカラ版1569年7月12日付書簡が高木洋氏により全訳され（高木2005）、高橋方紀氏は、フロイスの各種記録の原文を用いて発掘調査の遺構と比較検討を行い、山麓居館や山上部城郭の構造・機能についての解釈を試みている（高橋2015）。

フロイスと同時期の来訪者の記録として、山科言継の日記『言継卿記』がある。合計3度の岐阜を訪れた記録が残っており、大下永氏は『言継卿記』の分析から、岐阜城と城下町の構造復元を行っている（大下2015）。

その他近年の岐阜城跡に関する文献調査として、三宅唯美氏は16・17世紀の史料に見られる「外山」の分析を通じて、岐阜城外郭線周辺をめぐる権利関係の変遷を明らかにした（三宅2009）。石川美咲氏は後斎藤氏の発給文書や同時代史料から、斎藤道三・義龍の時代に稲葉山城は軍事要塞としての機能だけでなく、当主や一族の生活の場でもあり、公的な政治拠点としての機能を兼ね備えていたことを明らかにした（石川2019・2021）。内堀信雄氏は「岐阜城の戦い」と直前に行われた「米野の戦い」「竹ヶ鼻城攻略」を対象として、一次史料及び二次史料から地名などの地理情報を抽出・比較検討を行い、合戦の実像と合戦の記憶がどのように変化したのかを明らかにした（内堀2021）。総合調査報告書Ⅰでは三宅氏により土岐氏から長井氏までの政治史、木下聡氏により後斎藤期の政治史の概略が述べられている（三宅2021、木下2021）。

今後は、岐阜城に関する文献史料の集成などの基礎作業が課題である。岐阜城に関する文献史料を網羅し、調査を行うことで政治上の岐阜城の位置付けも明らかになると思われる。

【参考文献】

石川美咲 2019 「お城アラカルト 訴訟のために登城する人々」中井均・内堀信雄編『東海の名城を歩く 岐阜編』吉川弘文館

石川美咲 2021 「後斎藤氏の本城・稲葉山城の機能—文献資料による考察—」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

内堀信雄 2021 「岐阜城の戦いに関する地理情報について」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

- 大下永 2015 『言継卿記』に見る岐阜城と城下町』『研究紀要 22』岐阜市歴史博物館
- 木下聡 2021 「後斎藤氏と稲葉山城をめぐる政治動向」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
岐阜市教育委員会 1990 『千畳敷－織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備－』
- 高木洋 2005 「ルイス・フロイスの岐阜来訪－1569年7月12日付書簡（アルカラ版）全訳－」『岐阜市歴史博物館
研究紀要 第17号』岐阜市歴史博物館
- 高橋方紀 2015 「ルイス・フロイス「4種の記録」からみた岐阜城の構造」『研究紀要 22』岐阜市歴史博物館
- 三宅唯美 2009 「文献の検討－「外山」について－」『岐阜城跡』岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- 三宅唯美 2021 「土岐氏から長井氏の時代における政治史」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市

4. 建築物調査

岐阜城跡の建築物に関する調査としては、昭和12年（1937）に城戸久氏が天守復原の検討を行っており、これが二代目復興天守設計のベースになっている。

山麓部の発掘調査開始後は平井聖氏に1次調査の成果とルイス・フロイスの記録から、山麓部の建築物や構造の検討が行われている（平井1990）。

近年では『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』において、恩田裕之氏により山麓部の発掘調査で確認された礎石や蔵状建物などについての成果が整理されている。さらに恩田氏は鉄くぎなどの鉄製品の分布状況から建物の存在を推定し、瓦の分布状況を加味することで、瓦を伴う建物と伴わない建物が存在する可能性を指摘している（恩田2021a）。また、高屋麻里子氏は、山麓部の発掘調査成果と懸造・望楼・蔵などの絵画史料を基に山麓居館の建築物の検証を行っている（高屋2021）。

以上のように、発掘調査成果などを基に山麓部に建てられた建築物の実態について明らかになりつつある。今後は近年の発掘調査により山上部の発掘調査成果も得られていることから、山上部も含めた建築物の実態について検討をする必要がある。

【参考文献】

- 恩田裕之 2021a 「山麓部における発掘調査の成果」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 城戸久 1937 「美濃岐阜城建築論」『学術報告第3号』名古屋高等工業学校
- 高屋麻里子 2021 「岐阜城内における建築物の検証」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 平井聖 1990 「千畳敷の建築」『千畳敷』岐阜市教育委員会

5. 庭園調査

岐阜城山麓部の発掘調査では、ルイス・フロイスの記述のとおり複数個所で庭園遺構が確認されている。1次調査では山麓居館の出入口通路に立て並べた巨石列が見つかっており、北垣聰一郎氏は作庭に必要な石組技法によって完成させた事例だと述べている（北垣1990）。2次調査では庭園遺構と考えられる石敷遺構が確認され、4次調査では複数の庭園遺構が見つかった。



写真 3-23 山麓部中心を流れる谷川

山麓居館の庭園について、仲隆裕氏は豊臣秀吉によって築かれた大坂城や肥前名護屋城の山里丸の原形となった可能性を指摘し（仲 2008）、井川祥子氏は複数の庭園について、個々の庭園として捉えるのではなく、館の中心を流れる谷川や滝を中心とした自然地形を活かした庭園とし、全体が大きな一つの庭園と特徴づけている（井川 2015）。

その後、井川氏は『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』において、考古学的方法と庭園空間の視座から山麓庭園を分析し、後斎藤期の旧地形を継承しつつも信長期に大規模な拡張・改修を行い、空間が形成されたとした。また、庭園の視点から7つのエリアを設定し、中心を流れる谷川を庭と捉え、人工的に加工された岩盤も庭の一部とし、新たな庭園空間認識が提示された。この結果、山麓居館の庭園群は個々の庭園ごとに意匠を凝らすだけでなく、高低差のある平坦地の護岸や谷川護岸で使用した巨石列や石垣も庭園の背景とし、谷川や岩盤も人工的に修景し、庭空間を作り上げていることや、それぞれの空間が谷川や岩盤を介して繋がり、高さや奥行きのある大きな庭園空間を作り出していることが明らかになってきた。

【参考文献】

- 井川祥子 2015 「岐阜城跡 織田信長居館跡」『戦国時代の城館の庭園』奈良文化財研究所
井川祥子 2021 「岐阜城跡山麓居館の庭園群の様相」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
内堀信雄 2021 「総括—岐阜城の機能・構造について—」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市
北垣聰一郎 1990 「千畳敷石垣とその変遷」『千畳敷』岐阜市教育委員会
仲隆裕 2008 「初期茶における手水施設に関する一考察」『茶の湯研究和比』第5号

6. 絵図の調査

岐阜城や城下町に関する絵図については複数の近世絵図が残されている。『岐阜城跡-織田信長居館伝承地の確認調査および岐阜城跡の遺構分布調査-』では近世絵図を用いて当時金華山の景観認知についての検討や、伊奈波神社が所蔵する「稲葉城趾之図」に描かれた石垣と分布調査で確認された石垣の対比が行われている（内堀 2009）。

「稲葉城趾之図」に描かれた石垣については、その後の分布調査や山上部の発掘調査でも確認されており、絵図の信憑性の高さが明らかとなった。また、笈真理子氏は『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』で「稲葉城趾之図」について検討を行い、作成年代が元禄8年（1695）から正徳元年（1711）の間、作成者を岐阜奉行所と推定しており、絵図の詳細が明らかになりつつある。また最も年代が古い「濃州厚見郡岐阜図」には、山麓居館の部分に岩盤が意図的に描かれていることが最近明らかになってきている。



写真 3-24 稲葉城趾之図（伊奈波神社蔵）

【参考文献】

内堀信雄 2009 「絵図類の検討」『岐阜城跡-織田信長居館伝承地の確認調査および岐阜城跡の遺構分布調査-』岐阜

7. 城下町の調査

岐阜城下町については、地理学・歴史学・考古学など様々な学問から研究が行われている。『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』では、仁木宏氏により都市史の中での岐阜城と城下町の位置づけが論じられ(仁木 2021)、山村亜希氏により古地図や地形情報などから岐阜城下町の変遷が検討されている(山村 2021)。本節では、これまでの調査成果を基に各時期の城下町についてまとめる。

(1) 後斎藤期

城下町の建設は、天文8年(1539)頃の斎藤道三の稲葉山城入城後に建設、整備が進んだとされるが、それ以前の大永5年(1525)の乱で長井氏が稲葉山城に籠っており、周辺も影響下にあった可能性がある。江戸時代の記録である『中島両以記文』には、道三は山麓の丸山にあった伊奈波神社を現在地に移し、旧来からの東西道であった七曲通には井口村の百姓が町屋を造ったとされる。また新たな登城路として百曲通を建設し、大桑の町人を移住させて新たに町を設けたとされている。

岐阜市歴史博物館西側の道路では、平成22年度から24年度に、拡幅工事に伴い発掘調査が行われており、区画溝や井戸などの遺構や、かわらけなどの遺物が出土している。また、永禄10年(1567)の織田信長による美濃攻めの際に形成されたと考えられる焼土層が見つかっており、遺構や遺物の多くが焼土層以前のものであることや、遺物の時期などからほとんどが斎藤段階のものであると考えられる。

(2) 信長入城以降

永禄10年(1567)、織田信長は斎藤龍興を追放し美濃に入ると、町の名を井口から岐阜に改めた。この時期の城下町の大きな変化として方形街区の創出が指摘されている(山村 2021)。新町や鞆屋町の設定の他、材木の取引において独占営業権を与えられた経済特区として材木町に方形街区が設けられた。また、矢島町周辺では寺院の集中配置がされるようになり、寺町の様相が見られるようになる。

(3) 近世

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の前哨戦後、岐阜城は廃城となる。岐阜城下町は元和5年(1619)以降尾張藩領の岐阜町となり、商業都市として機能を存続させ、材木・和紙・糸などを扱う問屋業や提灯・団扇などの伝統産業が発達した。金華山は尾張藩の「御山」として入山が規制された。

(4) 近代以降

近代に至り金華山は入山規制が解かれ、麓には岐阜公園が造られる。また、明治末期には岐阜城山上部に初代復興天守が建設され、岐阜町の家屋は金華山もしくは復興天守が見える位置に本座敷や茶室を置くなどの改築が行われた(清水 2015)。総構は撤去され、堀は水路化されたが、戦国時代の城下町の町割りは継承され、現在まで受け継がれている。

【参考文献】

岐阜市教育委員会・株式会社イビスク 2013『岐阜城下町遺跡—都市計画道路岐阜駅高富線道路改良工事に伴う緊急発掘調査』

岐阜市教育委員会 2015『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書』

清水重敦 2015「伝統的家屋から見た岐阜町の文化的景観」『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書』岐阜市教育委員会

仁木 宏 2021「都市史における岐阜城・城下町」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

山村亜希 2021「岐阜における城下町の変遷とその特徴」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市

8. 天守台石垣の調査

(1) はじめに

岐阜城の天守台石垣については、発掘調査により信長期の天守台石垣が確認されるなど、徐々に実態が明らかになりつつある。しかし、現在の天守台石垣に至るまでにどのような変遷をたどって来たのかはまだ断片的にしか明らかになっていない。そこで本節では、近代以降に撮影された古写真の検討を中心に、これまでの発掘調査成果も踏まえ天守台石垣の変遷やその意義について検討する。

(2) 各時期の天守台石垣

・後斎藤期(1539頃～1567)

後斎藤期の天守台石垣は現在のところ発掘調査では確認されていない。しかし、山上部では後斎藤期の石垣等の遺構が確認されており、整備が行われたことは確実である。また、石川美咲氏は、当時稲葉山城の山上は訴訟等を扱う「政庁」の場として機能していたことを指摘している(石川 2021)。これらを踏まえると、山上部の中心となる建物が造られた可能性も十分に考えられる。

・信長期(1567～1576)

令和元年度と令和2年度に天守台周辺で発掘調査を行い、天守北西隅において戦国期の天守台石垣が確認された(写真 3-25)。また、令和2年度の調査では2段目の石垣も確認されている。2段目の石垣の裏込めは天守台石垣の下方に伸び基礎を兼ねていることから、一連の工事で同時に築かれた可能性が高い(写真 3-26)。

これらの石垣は使用されている石材や積み方の特徴と、信長期に位置づけられる軒丸瓦・軒平瓦が出土していることから(恩田 2021b・光成 2021)、信長期に築かれた可能性が高く、信長在城時には天守に相当する建物が存在したと考えられる。さらに、現在の天守台石垣西側の基底石の一部も当時の原位置を保っていることが確認されている。

・池田期(1585～1590)

江戸時代の地誌である『美濃明細記』によると、池田輝政により天守が造られたとの伝承が残る。令和2年度の発掘調査では天守台周辺から池田期に位置づけられる軒平瓦が見つかっており、実際に改修が行われた可能性が高い。

・近世

慶長5年(1600)、当時の城主織田秀信は関ヶ原の戦いにおいて西軍に属したため、合戦の前哨戦となる岐阜城の戦いにおいて東軍の攻撃を受け、岐阜城は落城する。合戦に勝利した徳川家康は、岐阜城を廃し、南方約4kmの平地に加納城を築いた。岐阜城の櫓や石垣などは取り壊され、新城建設のために使用されたといわれる。

江戸時代を通して金華山は尾張藩主の「御山」として一般の立ち入りが禁止され、奉行所に山廻り同心が置かれ管理された。また、江戸時代の絵図「稲葉城趾之図」には測量された山上部の石垣が描かれており、天守台石垣などの遺構が残されていたと考えられる。

・近代以降(明治～現在)

近代以降の天守台石垣については、昭和11年(1936)に刊行された『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』において初代復興天守建設に伴い、「舊石垣を改築し規模を小にして現形に改む」とあり、天守台石垣の改変が行われたとの記録が残るが、詳細については不明である。しかし、当時の絵葉書に岐阜城天守を写した複数の古写真が残されており、これらを分析することで変遷を追うことが出来る。

まず、初代復興天守の天守台石垣と、現在の二代目復興天守の天守台石垣を比較する。初代復興天守と天守台石垣が写った写真3-27と、二代目復興天守と天守台石垣が写った写真3-28を比較すると、積み方が一致することが確認できる(写真3-29・3-30のそれぞれ同色で囲われた箇所は同じ位置であることを示す)。このことから初代復興天守建設時に積み直された石垣が現在まで踏襲されていると考えられる。

しかし、初代復興天守建設時に天守台石垣の全てを積み直したわけでは無さそうである。ここで写真3-31と写真3-32を検討する。写真3-31に写る石垣は、後述する写真3-34の天守東側平坦地を造る石垣の後方に位置することから、天守台石垣の南東隅の部分であると考えられる。写真3-32も天守の向きから天守台石垣の南東隅を写したものであることが分かる。写真3-31と写真3-32を比較するとそれぞれ積み方が異なることから、南東隅の部分については初代復興天守建設時には戦国期の石垣が改修されておらず、建設後に積み直しが行われたと考えられる。これらの古写真の明確な撮影年月日は明らかではないが、『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和岐阜』に掲載されている昭和30年に撮影された写真に写真3-30と同じ天守台石垣が写っていることから、写真3-31から写真3-32へ変遷したことは明らかである。また、『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』には「現在に於いては舊石垣は西南の一隅、天守臺入口の両側等に僅に原形を止む。」とあることから写真3-31に写る石垣は戦国期のものである可能性が高く、報告書が刊行された昭和11年(1936)頃までは残っていたと考えられる。すなわち、南東隅の石垣の積み直しは昭和11年(1936)頃から、初代復興天守が焼失する昭和18年(1943)までの間に行われたことが分かる。

次に写真3-32と現在の天守台石垣南東部(写真3-33)を比較すると、積み方が異なることが確認できる。これについては、岐阜市が昭和54年(1979)に石垣南面の一部を改修した記録が残っており(注)、その際に積み直されたと考えられる。また、天守周辺の発掘調査では西面の石垣にも近代以降の積み直しと考えられる箇所が確認されている。以上のことから現在の天守台石垣は、初代復興天守建設時に大きく改修されており、その後も何度か部分的な改修が行われて現在に至っていると考えられる。

(3) 写真 3-31 の検討

前節の検討から、写真 3-31 に写る天守台石垣は戦国期に築かれた石垣である可能性が高い。そこで古写真の限られた情報のみであるが、積み方の特徴から築かれた時期について検討を試みたい。

恩田裕之氏は、天守台の東側にはかつて平坦地が存在し、写真 3-34 の天守手前に写る石垣は東側平坦地を造っていた石垣であると指摘している（恩田 2021c）。写真 3-34 の石垣は初代復興天守建設後に取り壊され、写真 3-31 の状態に変遷したと考えられる。また、平坦地を造っていた石垣の一部は現在も残っており（写真 3-35）、恩田氏はかなり算木積みに近い出角で、天守台石垣と平坦地を造っていた石垣の構築には時期差がある可能性が高いとしている。

ここで写真 3-31 の石垣を見ると、算木積みに近い特徴が見られることから、平坦地を構成していた石垣と同時期に位置づけられる可能性が高い。また、発掘調査で見つかった北西隅の信長期の石垣には改修の跡が見られないことから、信長期以降の時期に天守台石垣の一部が改修されたものと考えられる。時期については、前述のとおり池田期に位置づけられる軒平瓦が天守周辺の発掘調査で出土していることから、池田輝政により天守と天守台の一部が改修された可能性が高い。

(4) おわりに

以上の検討を踏まえ、天守台石垣の変遷を整理すると表 3-5 のとおりとなる。また、本稿で検討した以外の古写真も含め、南西隅石垣の改修時期を基に古写真の変遷を表に整理したのでこちらも参照されたい（表 3-6）。これまで、具体的な変遷過程が明らかでなかった天守台石垣において、その一端を整理することが出来た。今日まで複数回に渡り改修が行われながらも、岐阜城の中心として受け継がれてきたことは重要であると思われる。しかし、後斎藤期に遡る時期や、現在の天守台石垣に見られる部分的な改修の時期など不明確な部分も残されているため、今後も調査を継続して明らかにしていく必要がある。

【参考文献】

- 石川美咲 2021 「後斎藤氏の本城・稲葉山城の機能—文献資料による考察—」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 恩田裕之 2021b 「岐阜城の石垣の分類と様相」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 恩田裕之 2021c 「分布調査」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 岐阜県 1936 『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』
- 岐阜市・岐阜市教育委員会 2012 『史跡岐阜城跡保存管理計画書』
- 丸山幸太郎・道下淳共編 1983 『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 岐阜』国書刊行会
- 光成希望 2021 「岐阜城跡出土瓦の分類と変遷」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市
- 森村知幸 2021 「試掘調査」『史跡岐阜城跡総合調査報告書 I』岐阜市

（注）昭和 54 年の改修については当時の岐阜市経済部観光課が行った天守台石垣調査や計画図面、それらに関するメモなどが残っている。

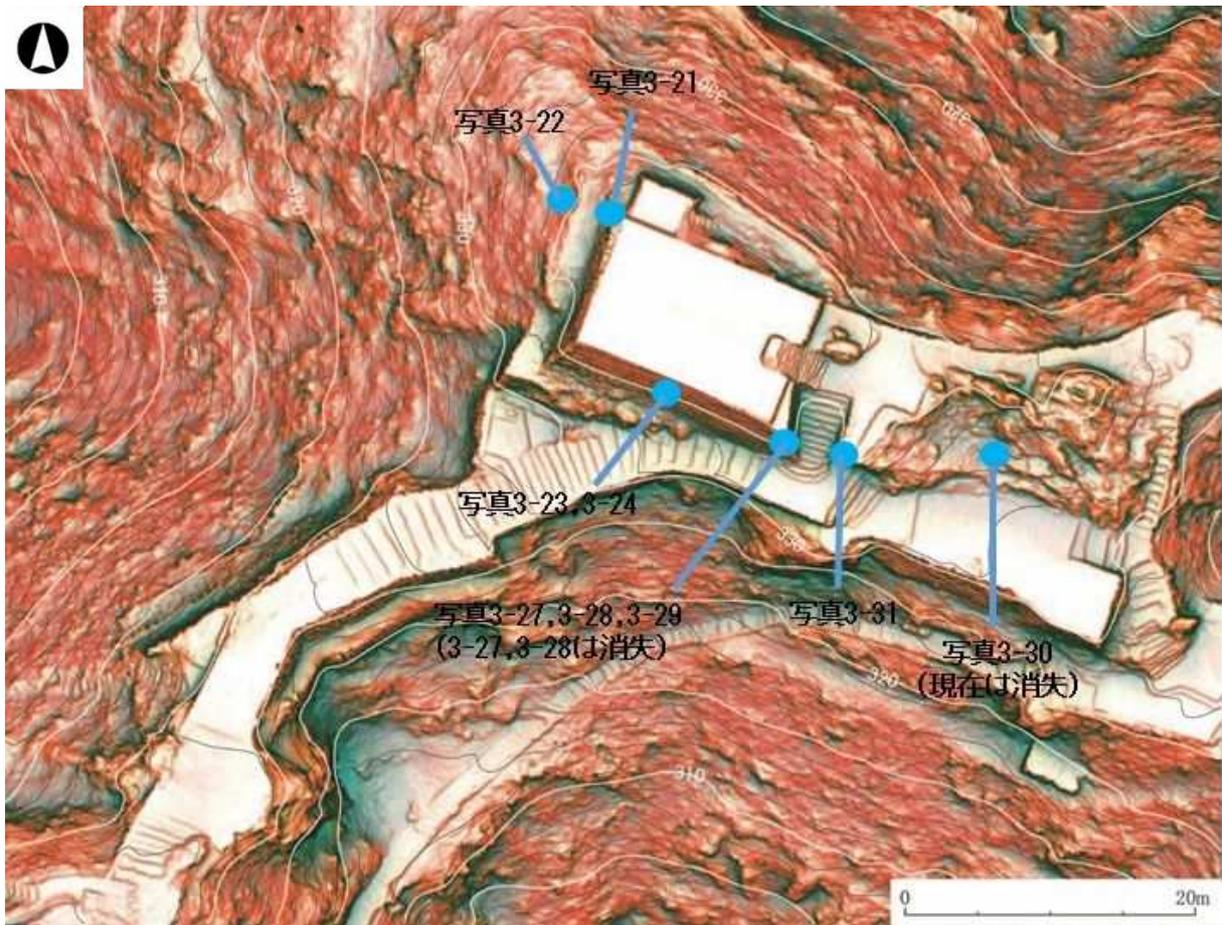


図 3-7 各写真位置図



写真 3-25 信長期の天守台石垣



写真 3-26 信長期の天守台石垣と2段目の石垣



城 阜 岐 (勝名阜岐)

写真 3-27 初代復興天守と天守台石垣 (絵葉書『岐阜名勝 岐阜城』個人蔵)



写真 3-28 二代目復興天守と天守台石垣



写真 3-29 初代復興天守石垣部分拡大



写真 3-30 二代目復興天守石垣部分拡大

(写真 3-29、3-30 の同色で囲われた箇所は同じ位置であることを示す)

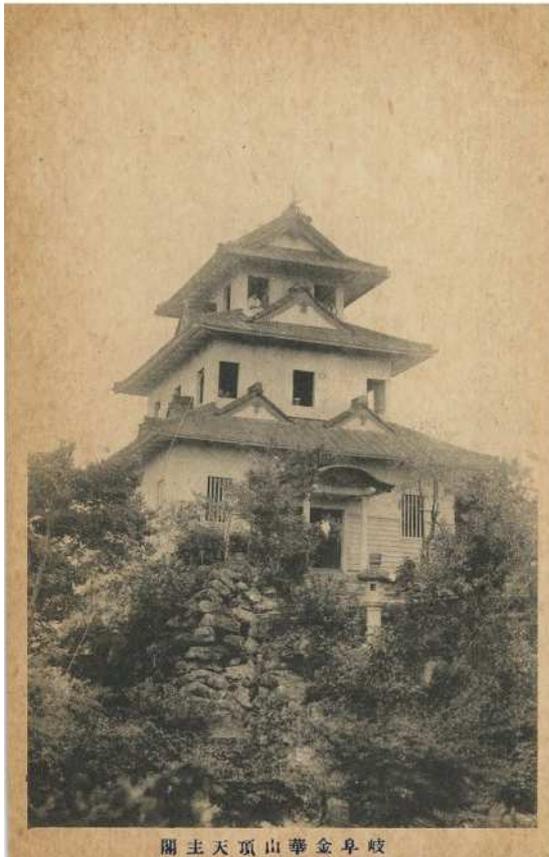


写真 3-31 天守台石垣南東隅①
(絵葉書『岐阜金華山頂天主閣』個人蔵)

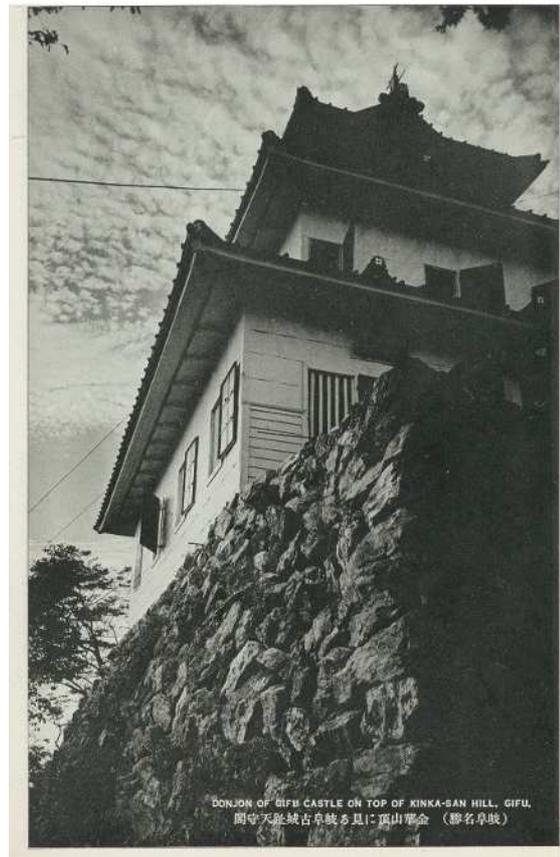


写真 3-32 天守台石垣南東隅②
(絵葉書『岐阜名勝金華山頂に見る岐阜古城趾天守閣』個人蔵)



写真 3-33 天守台石垣南東隅③

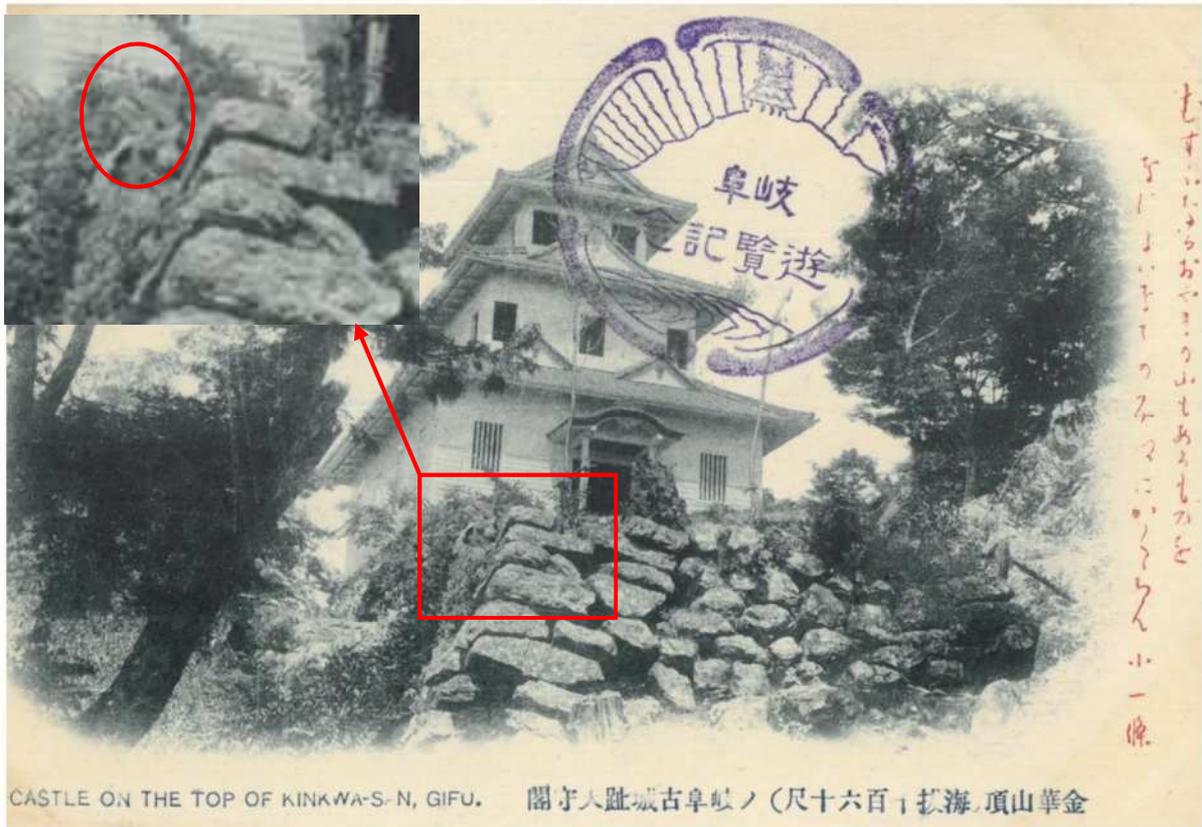


写真 3-34 天守東側平坦地の石垣（1）
（丸で囲った部分に写真 3-29 の天守台石垣南東隅の一部が写る）
（絵葉書『金華山頂（海拔千百六十尺）ノ岐阜古城趾天守閣』個人蔵）



写真 3-35 天守東側平坦地の石垣（2）

表 3-4 絵葉書一覧表

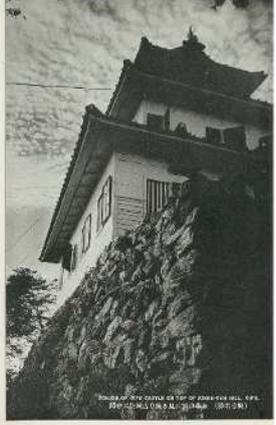
	タイトル
①	金華山頂（海拔千百六十尺）ノ岐阜古城趾天守閣（写真 3-30）
②	岐阜金華山頂天主閣（写真 3-23）
③	岐阜名勝 金華山頂に見る岐阜古城趾天守閣（写真 3-28）
④	岐阜名勝 往古の偉業を偲ぶ金華山頂の古城趾
⑤	岐阜名勝 岐阜城（写真 3-23）
⑥	岐阜名勝 岐阜城
⑦	金華山頂（海拔千百六十尺）ノ岐阜古城趾天守閣

注) 番号①～⑦は表 3-6 と対応

表 3-5 天守台石垣の変遷（1）

時期	出来事	関連写真
永禄 10 年（1567）～ 天正 4 年（1576）	織田信長により天守台石垣と天守に相当する建物が築かれる。	3-25, 3-26
天正 13 年（1585）～ 天正 18 年（1590）	池田輝政により天守と天守台石垣の一部が改修される。	
慶長 5 年（1600）	関ヶ原の前哨戦により岐阜城廃城。天守などの施設が失われ、天守台石垣のみが残る。	
明治 43 年（1910）	初代復興天守建設。天守台石垣の大部分が改修される。	3-27
明治 43 年（1910）～ 昭和 11 年頃（1936）	この間、天守東側の石垣が取り壊される。	3-31, 3-34
昭和 11 年頃（1936） ～昭和 18 年（1943）	この間、天守台南東隅の石垣が改修される。	3-31, 3-32
昭和 18 年（1943）	初代復興天守焼失。天守台石垣のみが残る。	
昭和 31 年（1956）	2 代目復興天守建設。初代復興天守の天守台石垣が踏襲される。	3-27, 3-28
昭和 54 年（1979）	天守台南東隅の石垣が改修される。	3-33

表 3-6 天守台石垣の変遷 (2)

<p>明治 43 年 (1910)</p> <p>↳ 昭和 11 年頃 (1936)</p>	<p>①</p>  <p>↓</p> <p>②</p> 	<p>撮影時期不明</p>	<p>⑤</p>  <p>⑥</p> 
<p>昭和 11 年頃 (1936)</p> <p>↳ 昭和 18 年 (1943)</p>	<p>③</p>  <p>④</p> 		<p>⑦</p> 

注) 番号①～⑦は表 3-4 と対応

第2節 自然の調査

本節では『史跡岐阜城跡保存管理計画書』第3章第1節「自然的調査」を抜粋し掲載する。

1. 地形・地質

岐阜県は「飛山濃水」の言葉で象徴されるように、海拔 3000m級の飛驒の山岳から、水に囲まれた日本で最も低湿な輪中を中心とする美濃のゼロメートル地帯まで起伏と変化に富んだ地形を持つ。しかし、北部及び東部を中心に大部分は山地からなっており、南西部に見られる平野の面積は全面積の 12%にすぎない。

岐阜市は、木曾川、長良川、揖斐川が形成する濃尾平野の北端に位置する。中部山岳地域から濃尾平野～伊勢湾へかけて西に傾き下がる傾動地塊を形成し、隆起する山地と沈降する低地の境目に当たっている。このため、市域は美濃山地と南縁に当たる孤立化が進んだ低起伏山地と、濃尾平野北縁部に当たる平野（台地＋低地）よりなる。山地形成のうち、主なものは西北西～東南東に延びる岐阜～各務原山地で、その最高峰は百々ヶ峰の 417.9mであり、その他はそれより低い。また、これらより小規模な残丘状独立山体が市の東南部に点在している。一方、美濃山地を浸食して南西へ流下する長良川・木曾川などが、砂礫を運搬（第四紀以降）・沈降して低地を埋積してつくったのが濃尾平野である。ここに典型的な平野の微地形が発達している。それらを上流側から列挙すると、まず長良川により、金華山北麓を頂点として西に開いた、海拔 10mから 20mの緩やかな扇状地が広がっている。金華山は、その扇状地東南側岐阜市街地を限る断崖として、海拔 329mの高さでそびえ立っている。長良川下流側には氾濫原が広がっているが、ここも決して平坦でない。この範囲は旧河道が残した高まりである自然堤防と、後背湿地とに分かれる。

地質については、市内域の山地はすべて美濃帯を構成する中・古生代の地層で構成されている。そして、そのほとんどは砂岩主体の地層とチャート主体の地層の互層からなり、それらが西へ傾き下がる大規模な向斜を形成している。このような地質構造の違いに加えて、硬いチャート（金華山）と比較的軟らかい砂岩（山間の低地）といった岩質の違いにより、険しい低山地がつくられた。一方、平野部の台地や低地は第四紀の砂礫層よりなり、一部に更新世後期の砂礫層を含み大部分は沖積層である。

金華山の登山道やドライブウェイ及び麓の道路沿いで見られるチャート層は、激しく褶曲している。このチャート層は、褶曲だけでなく、砂岩、泥岩がチャートと接する部分に当時できた断層があり、実際には 100mほど厚さの層が断層で切られて繰り返し重なっているため何倍もの厚さがあるように見えることである。

チャートという岩石は微化石の塊であり、地表の岩石の主成分である SiO₂（珪酸）からなる。その主体は、電子顕微鏡写真で見ると単細胞動物（放散虫）の殻や海綿の骨針など、珪酸分のできた動物の遺体がぎっしりと集まって固まったものである。もちろん、この変化は 1 億年以上の長い間続いた結果で、堆積する早さは 100 年で数ミリメートルと計算される。

一方、含まれている放散虫は地質時代ごとにその種類が変わってきたことが判明しているので、放散虫のグループの特徴から地質時代を決めることができる。中・古生層の堆積した時代はこうして決められた。

2. 動物相

現在、国有林の範囲は、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」によって「県指定金華山特別保護地区」に指定されており、鳥獣の保護を図るとともに、鳥獣による生活環境や農林業、生態系への被害の防止に努めている。

金華山では、全国各地の山林同様、外来生物の進出による在来生物への圧力、減少の問題が挙げられる。特に、20世紀以降、金華山に生息していた「日本固有種」であるニホンリスが、外来生物であるクリハラリスの進出により、生息が認められなくなっている。

元来台湾・中国南東部・インドシナなどに生息する生物で、昭和5年（1930）頃から日本に生息するようになった。いつ金華山での生息が始まったか確証はないが、昭和11年（1936）に開催された「躍進日本博覧会」の台湾館より脱檻したと推定されている。金華山の暖帯性樹林が彼等の生息に適しているらしく、繁殖している。体格がニホンリスより優位にあることから金華山のニホンリスの大部分を駆逐したと推定され、金華山の生態系は大きく変化した。

その他に、ペットとして輸入されたアライグマが脱柵し、野生化している。アライグマは北アメリカ大陸原産の動物で、生息分布範囲が急速に拡大しており、金華山周辺、長良川左岸、金華山東側地域など広範囲に生息している。アライグマは、環境順応性、繁殖率が高く、周辺の農産物・畜産物への被害増加も懸念される。その他に、シベリアイタチが金華山、長良川河川敷を始め、広範囲で確認されている。また、ハクビシンも外来生物であるが、金華山では多く生息しており、野鳥への被害は甚大になっている。

鳥類では、環境省が絶滅危惧種をまとめたレッドリスト掲載種のうち、岐阜市内で観察記録があるものは35種であるが、そのうち確実に繁殖が確認されているものはオオタカ、コアジサシ、ハクマ等の7種程度である。金華山はオオタカの繁殖が確認されているが、以前はアカマツに営巣することが多かったようである。しかし、近年は松枯れによるアカマツの減少により、他の樹種で営巣しているのが確認されている。オオタカは、レッドリストにおいて準絶滅危惧種にあげられている。また、サンコウチョウが数羽見られる。

岐阜城の歴史資料から、尾張藩主の御成の際に鹿狩りが行われたことが確認されているが、現在ではまれに長良川を渡って移動してくる個体があるが、鹿は生息していない。

イノシシは百ヶヶ峰で増加したイノシシが長良川を渡り繁殖し、1997年に達目洞で初めて確認された。その後増加したイノシシが登山道の掘り返しや山麓の民家への被害を与えるなどの事象が起きている。金華、日野、長森西、長森北、梅林校区で実施された捕獲実施回数に対する捕獲頭数も年々増加しており、市民や観光客への被害も懸念されている。

3. 植生

金華山の植生については、昭和44年（1969）以来、保健休養資源調査、県自然環境保全地域候補地調査、防災に関する基礎調査等でいくつか現存植生図が作成されているが、いずれも縮尺2万分の1以下であり、相観を主体とするものであった。

今回の植生のまとめは、昭和55年（1980）、名古屋営林局によって調査が実施された『岐阜・金華山国有林の森林植生』、及び平成8年～11年にかけて岐阜市によって植生調査が実施され、その成果としてまとめられた『岐阜市自然環境実態調査報告』（平成12年）の資料を基本とし、平成23年（2011）の植生を概観し、その後変遷をまとめた。

具体的には、植生を昭和 55 年、平成 12 年植生図を参考に大きく 5 区分し、平成 22 年の空中写真から各群落の分布領域を判読し、さらに現地にて目視観察した植生分布を照合して作成した。

(1) 岐阜市の現存植生

岐阜市は、植物社会学的には暖温帯のヤブツバキクラス域に属し、ヤブコウジースダジイ群集が潜在的な植生と推測される。現存植生としては、金華山一帯に、ヒノキ群落およびサカキコジイ群落が代償植生となっており、コナラークリ群落、アカマツ群落、スギーヒノキ植林に大別される。また、平野部は、主に水田雑草群落が広がる。

(2) 金華山の植生概況

金華山の植生は、ヤブツバキクラス域の植物群落のうち、やや内陸部の乾燥土壌に対応して成立するツブラジイ林が主体をなし、長良川および岐阜市街に面する急斜面や岩崖尾根には天然のヒノキ林が生じている。また、湿度の高い北側斜面の谷頭部や北側山麓の崖錐部分には適潤富養土壌に対応するカゴノキ群落が成立している。達目洞付近は、いわゆる里山的景観を呈し、コナラ林およびアカマツ林が分布している。一方、東側へひらけた日野集落の谷底平地に面する斜面は、南向きの乾燥地であり、また人為の影響が強かったのでアカマツ二次林に変化しているところが多い。

以下に各群落の概要と、昭和 55 年（1980）と平成 23 年（2011）の植生の比較をまとめた。（図 3-5、3-6）

・ヒノキ群落（ブナクラス域自然植生）

ヒノキは本州の福島県以西の太平洋側山地、四国、九州に分布し、特に飛騨南部、木曾谷、裏木曾地方には「木曾ヒノキ」が群落として分布している。そのため、岐阜市のような都市近郊に見られるのは珍しい。

岐阜県のヒノキ群落は殆どがブナ林帯上部の亜高山針葉樹帯に接する環境に多く、急峻な尾根筋によく発達する。相観的にはヒノキを主とする針葉樹林で、高木層にはヒノキ、ネズコが優占しヒメコマツを混じ、亜高山性のコメツガも僅かに認められている。多くは低木層の発達がよく、植被率は 80%を超えている。代表種としてホンシヤクナゲ、アカミノイヌツゲ、コミネカエデ、タムシバ、トウゴクミツバツツジが挙げられる。

金華山では、やや湿り気の多い北向きまたは北西斜面の急斜面に多く見られ、樹齢は 200 年程度である。30 年前と現況で群落の範囲に大きな変化はないが、長良川に面した北斜面で立枯れしたヒノキが多く見られる。

・ツブラジイ群落（ヤブツバキクラス域自然植生）

ツブラジイは、スダジイの亜種で、堅果が小さく球形を呈し、樹幹が通直で樹皮は壮令まで裂目が少ない。スダジイが海岸沿いに分布するのに対して、ツブラジイはやや内陸性であり、東海地方の山地では大体海拔 500m 付近を高度限界とする。ツブラジイは、「岐阜市の木」として指定されており、金華山国有林の約 60%を占める常緑広葉樹の約 20%を占め、金華山全山で確認できる。金華山のツブラジイ群落の高さは

16～25mで、小さな葉をたくさん付けると同時に、樹高が高く、ドーム状に森林の上部を覆っている。よって、地表に日光があまり届かなくなり、日当たりの良い立地を好むアカマツの生長を阻んでいる。さらに、ツブラジイは日陰でも生長が良いため、分布を広げ、極相林となっている。

昭和 55 年植生図においても、谷筋や面下部を中心に分布の拡大が見られるが、現況では、かつて大落洞や釜石洞の尾根筋に見られたアカマツ林がシイ林に変化している。また、達目陰之山の北向きの斜面でも、ヒノキ植林地に混ざりシイ林が拡大している。

・コナラ、アラカシ群落

コナラ、クリ、ミズナラからなる落葉広葉樹二次林は、アカマツ林とともに代表的な代償植生である。かつては薪炭の供給林として育成されていたが、燃料革命によって、当時の落葉広葉樹二次林とは各種成種の占める植被率にかなりの隔たりができていくことがわかる。アカマツ林がマツクイムシなどの被害により、その群落が落葉広葉樹林に移行しつつあることが山腹や尾根筋の凹地、谷筋に見られるようになった。金華山では、落葉広葉樹林は下層植生により、ヒトツバ亜群集、アラカシ亜群集が確認できる。

ヒトツバ亜群集は最も乾燥した環境に成立する群落で、第1層の高木層はコナラ、アベマキの優先度が高く、特に尾根筋の岩石地に多く見られ、下層には識別種のヒトツバが岩上や樹木の根元に着生し、植被率がいたって高い。低木層には、アカマツ林床に見られる常緑性のアセビ、ヒサカキ、ソヨゴ、サカキ等の植被率が高いのに比べ、落葉性のモチツツジ、ネジキ、ウスノキ、ヤマウルシ、コバノガマズミ、リョウブ、コシアブラ等が多い。

アラカシ亜群集は、コナラ、アベマキの落葉広葉樹が少なく、アラカシ、ツブラジイ等の常緑広葉樹が多いのが特徴である。したがって、高木層、亜高木層にはアラカシ、ツブラジイ、ヤブツバキ、サカキ、カナメモチ、コバノトネリコ、ヒサカキが多く、山腹から山麓部に広く認められる。

昭和 55 年の植生図においては、山頂部の尾根筋を中心にコナラ等の落葉広葉樹林が分布しているが、現況では、昭和 55 年には赤ヶ洞、杉ヶ洞、北唐戸洞の尾根筋の岩石地に分布していたアカマツ林がコナラ等の落葉広葉樹林に変化している。七曲り登山道では、コナラの他にアベマキも多く混在している。

・アカマツ群落

アカマツ林は乾燥地に適応して成立する森林であり、岩石地、尾根などの自然植生として重要な単位である。このアカマツ林にはコナラ、コシアブラ、マンサク、ソヨゴ、アセビ等が混成する。より乾燥した立地に成立するアカマツ林の林床はコシダ、ヒトツバ等のシダ植物が密生する。

しかし、岐阜市に分布するアカマツ林はほとんどがカシ、シイの自然植生に対する代償植生として成立した二次林である。金華山の場合、大部分が暖帯における立地植生のシイ林であるが、「稲葉城趾之図」（17世紀後半～18世紀前半）などにみる金華山

は全山アカマツ林であり、江戸時代に入り禁伐制度が行われる以前は、生活燃料であるアカマツ林が代償植生としてかなり古くから優先していたと考えられる。

昭和55年の植生図では、尾根や尾根筋の岩石地を中心に、比較的乾燥した環境に分布しているが、現況ではコナラやアラカシ等の落葉広葉樹に代わっている。特に、赤ヶ洞、杉ヶ洞、北唐戸洞、大落洞、水風呂谷の尾根筋や岩石地に見られたアカマツ林は、シイ林やコナラ等の落葉広葉樹林に代わり、分布状況はほとんど見られなくなっている。

・ヒノキ・スギ植林群落

植林地の林内は薄暗く、下層の植生は貧弱である。ヒノキ・スギ植林群落は、台風などで倒れた自然林部分に植林されたものである。中には、江戸時代に植えられた古い植林地も見られる。

日当たりの悪い達目陰山の北斜面では、斜面下部を中心にヒノキの植林地にシイ林が入り込み、シイが主体の植生に変わりつつある。

スギは、瞑想の小径の沢筋に古いスギの大木が見られる。大きなもので幹周2m、樹高30m程度で、樹齢は200年以上である。

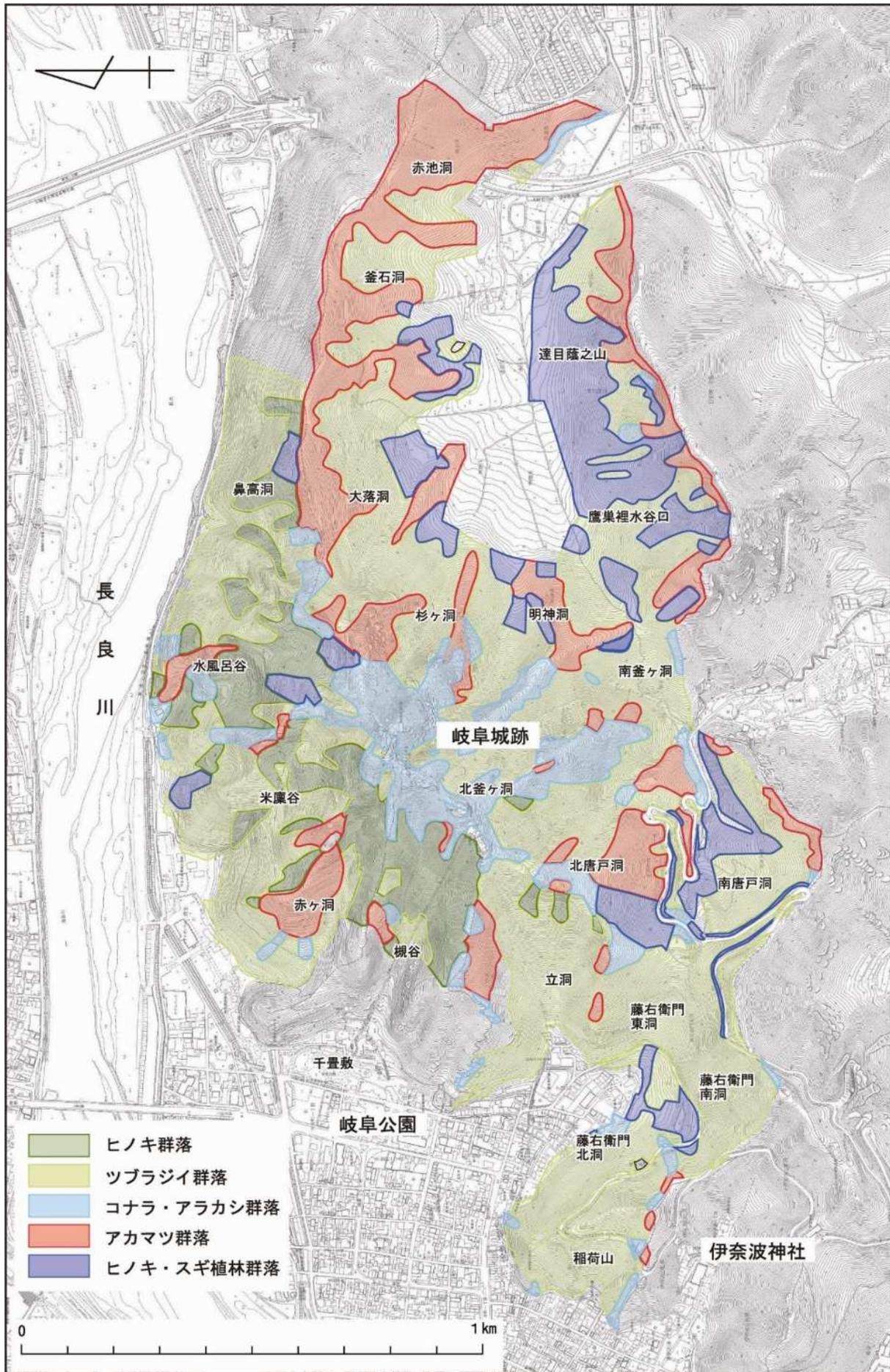


図 3-8 昭和 55 年 (1980) 植生図

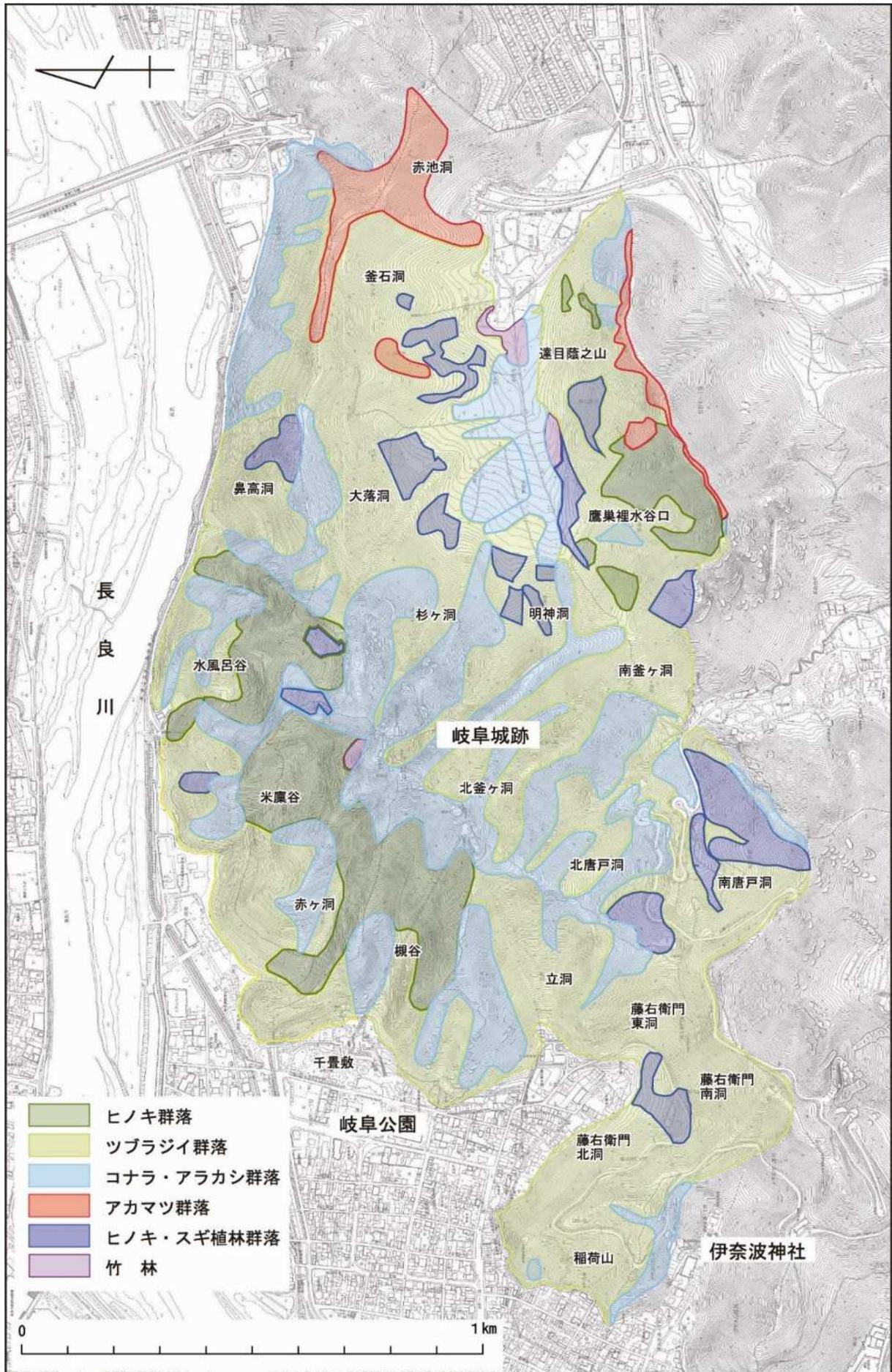


図 3-9 平成 23 年 (2011) 植生図

4. 森林利用と植生の変遷

(1) 目的

現在の金華山はツブラジイやアラカシを中心とした植生となっている。これは御留山となった江戸時代以降、保全を重視した森林施業が行われてきた結果であり、自然植生の遷移が最終的に安定した極相林の状態とされているが、江戸時代以前の金華山はアカマツの山として歌や絵画などに表現されてきた。

アカマツは岩地や山頂付近などの荒れ地にも先駆植物として生える樹種で、陽当たり・風通し・水はけが良好で土が痩せている条件を好む。放置してその土地が肥えてくれば他の植物が育ち、アカマツは枯れてしまう。逆にアカマツ林が継続して存在することは定期的な樹木伐採等により植生遷移を止めていた、つまり人による森林利用が行われていた傍証となりうると考えられる。そこでまず科学分析や和歌、絵画等により金華山の植生分析を試み、その上で江戸時代の森林管理を概観し、現在に至るまでの金華山の森林利用について検討を行う。

(2) 科学分析による検討

・古墳時代の植生分析

岐阜市北東部に位置する北山に所在した6世紀中頃～後半の古墳（北山3号墳）の調査では、古墳構築時に周囲の木々を焼いた痕跡と推定される炭化材が出土している。この炭化材の樹種同定分析の結果、松属複維管束亜属が大半を占めることが判明した（図3-10）。現在、遺跡周辺はアカマツを主としてナラ類・ネズ・ツツジ類・ヒサカキなどからなる典型的な里山林（二次林）に囲まれているが、この分析結果は6世紀にはすでにアカマツが優占する林が成立していたことを示しているとともに、当時から人々による森林利用が行われていた結果とみることができるだろう。

この段階での金華山周辺の植生は明らかではないが、上記の例が濃尾平野縁辺部における森林利用の一形態を示している可能性も考えられる。

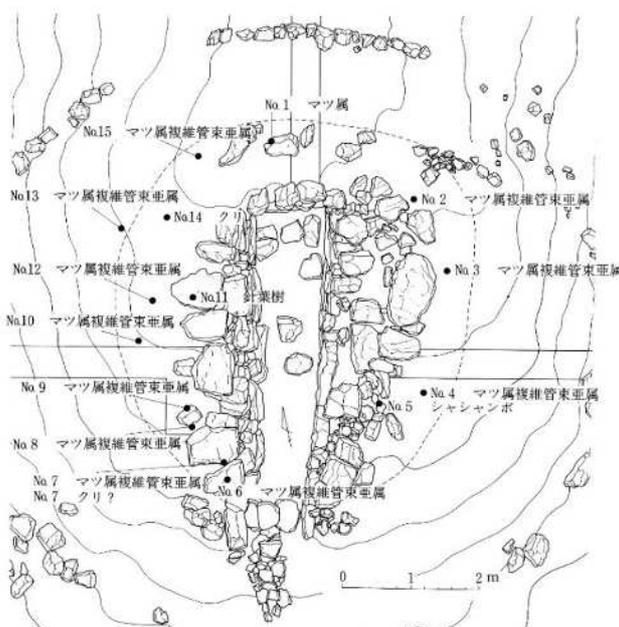


図 3-10 北山3号墳樹種同定分析図

表 3-7 岐阜城山麓・城主居館跡における樹種分類群一覧

分類群	計
モミ属	1
マツ属複維管束亜属	7
コウヤマキ	9
ヒノキ	9
クリ	1
コナラ属コナラ節	1
クスノキ	9
カエデ属	1
マダケ-ハチク	1
計	39

・岐阜城・城主居館跡の植生分析

16世紀になると稲葉山は城郭として利用される。当該期には防御のことも考えて見通しが利くようある程度樹木が伐採され、また建築部材にも利用していたとみられるが、調査が行われたことはなく判然としない。

山麓の城主居館跡の発掘調査（B地区）では、建築部材とみられる炭化材が検出されて分析が実施されている。平成20・22年度をあわせると合計39点となり、その内訳は表3-7のとおりである。マツ属のほか、ヒノキ、コウヤマキ、クスノキが多く確認されている。いずれも大径に生長する木本であり、材質も優良なため、建築材としても有用である。針葉樹は割裂性が大きく、木理が直通で加工容易なものが多いほか、一般に水湿にも強い。広葉樹で多く産出したクスノキも、比較的切削加工が容易であり、耐水・耐朽に優れるほか、耐虫性も高い。数種類の分類群が混在して産出していることから、部材によって異なる樹種を使用していた可能性も考えられる。

また近隣の鷺山蟬・鷺山仙道遺跡において花粉分析が行なわれており、戦国時代の植物相として針葉樹のマツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、アカメガシワ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シイノキ属などが確認されている。この花粉分析の結果には、城主居館跡の樹種同定で産出した分類群も多く含まれている。したがって、当地域には針葉樹と常緑および落葉広葉樹の混交林が存在していたと考えられ、用途に応じて樹種を選択利用していたと推測される。

(3) 和歌にみる稲葉山の植生

古代から中世にかけて、稲葉山は多くの和歌に詠まれるなど名勝地として知られてきた（表3-9）。現在のところ31首を確認しているが、稲葉（去なば）と松（待つ）が掛詞として頻出する。1は在原行平が因幡守であったことから因幡国の説が有力であるが、その他は美濃の稲葉山が有力で、23～30は美濃と特定できる。29の山科言継の歌では稲葉山が他国にまで名が知れ渡っている山だと詠まれている。このように中世において稲葉山が名勝地として著名な山であるとともに、アカマツの山であると認知されていたといえる。

江戸時代になると、俳句にも詠まれるようになる（表3-8）。稲葉山そのものを詠んだ句は少ないが、29・32には稲葉山に松の組み合わせが登場する。なお金華山という名称は明応6年（1497）頃の土岐成頼画像賛にある「金華降神、岐阜鐘秀」が初見であるが、江戸時代までは稲葉山という名称が一般的であった。明治時代になると金華山という名称が広く用いられるようになる。

(4) 絵図・絵画に描かれた稲葉山の植生

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後廃城、幕府直轄領を経て城域全体が尾張藩領となる。江戸時代に岐阜城、城下町を描いた絵図・絵画には金華山の植生をうかがわせる表現がある。

絵図資料のうち、山に植物の表現がある絵図は表3-10の1・2・3・4・5である。このうち1・2・3・4については山全体に松が描かれている。5の「稲葉城趾之図」は半分強が松であるが、伊奈波神社周辺や山頂から北西部にかけて別の樹木の表現がみられる。なお、1・2・3に描かれる城域の南の山塊には「此芝山瑞龍寺引得」の表記があり、葉の茂る樹木が描かれていない。立入り禁止となった城域部分と柴刈りに利用された山で植生に差が生じている様子が読み取れる。

また絵画資料にも絵図同様に松が描かれている。江戸時代の資料で樹種が判別可能であるのは、1・2・4・6・7・9でありそのすべては松が描かれる。一方、明治時代以降の資料には表現方

第3章 岐阜城跡の調査

法の変化もあり、樹木を描いているものが少ない。明治時代前半の表 3-10 の 10、表 3-11 の 19 には松が描かれているようであるが、他の樹種も見受けられる点が江戸時代のものとは異なる。また河合玉堂の描いた金華山も松を主体に描かれていることが知られている。

なお、明治 20 年（1887）の新聞には「秋晴に乘じ金華山へきのご狩りに行く者多くして松茸の数よりも採手の数が多い程なり」とあり、明治時代前半までは松茸狩りができる山であったことがうかがえる。

(5) 岐阜奉行所による金華山管理（笈真理子「岐阜奉行所の構成員と職掌」より転載）

金華山は藩主の岐阜御成に猟場となる場所であり、一般町人は自由に出入りすることはできなかった。19 世紀作成といわれる「岐阜御山付近図」には、山裾に柵がめぐらされている様子を描いている。この柵は竹垣であり、庶民の入山と山の猪鹿が町に下りるのを阻むためであった。ただし、時期によって、あるいは許可を得れば入ることはできたらしく、『柴田日記』には多くの人が千畳敷の山桜を見物することや、家人が千畳敷に蕨（わらび）つみに出かけたことが記され、嘉永 3 年（1850）に江戸の歌舞伎役者の中村仲蔵は「他国の者には一切見物させぬといふ掟なれば」と尾張日置村百姓の家内の者として奉行所と山廻り案内人 2 人に酒を贈って入山している。

同心には御山懸りがおり、山内を見回って倒木を改め、炭焼きや猪鹿の打ち留めも行った。後者は猪鹿を間引くためかと思われ、それに対して褒美銀を下賜されている。毎年正月 2 日には御山懸りの同心 4 人は金華山上に残る天守跡に鏡餅を供え、達目の柚人とともに豆腐汁で酒宴を張った。金華山の落葉や枯枝は承応元年（1652）以降、1 日に 9 荷と定めて札を渡して山に出入りさせ、その代米 20 石が岐阜町の役負担となっていた。岐阜奉行所創設後はこれが奉行所に納められたらしく、手代の借宅代が「御山落葉御払い代金」から支出されている。文政元年には西材木町の理藤太らが、御為銀 25 両を納めて落葉・枯枝を年に両 3 度集めることを奉行所に願い出た。こうした山の保全や祭祀も、奉行所の職域の内であった。

(6) まとめ

以上、各種資料からみた金華山の植生を概観した。江戸時代までは一貫してアカマツが主体の山であったこと、その景観は少なくとも戦国時代以前には成立しており、古墳時代までさかのぼる可能性があること、また「アカマツ林の稲葉山」という景観は多くの歌や絵画等に描かれ、古くから景勝地として広く知られていたことが確認できた。

近世になると岐阜奉行所の管轄となるが、その管理をみると立入禁止といっても許可があれば入山できたこと、規制の一方で落葉や枯枝採集の許可を出しその利益に対し課税がされるなど、限定的ではあるが森林利用がなされていたことが分かる。

近代になると官林、御料林、戦後には国有林となる。国の管理となった金華山は鶴匠篝火用松のための枯損木払い下げなど小規模な利用は行われたが、基本的には江戸時代同様の保全を重視した森林施策が現代まで続いている。その結果、ツブラジイやアラカシに代表される常緑広葉樹の高齢林に植生が遷移した。昭和 55 年（1980）と平成 23 年（2011）の植生図を比較しても、アカマツ群落がツブラジイ群落やコナラ・アラカシ群落に変化しており、アカマツ群落は東側に一部残るのみになってきている。

一方、城域以外の周囲の山地は伐採や柴刈り等で継続的に伐採され、その利用は戦前まで続いたとみられる。結果として金華山は周辺の森林と異なる植生となり「ツブラジイの金華山」、「都市

の中の極相林」という新たな価値を有することとなった。

このように金華山は一貫して人々との関わりの中で成り立ってきた山であり、江戸時代以来の森林保護によりその姿を変えながらも現在に至るまで名勝地として人々に認知されてきた山といえる。

【参考文献】

続群書類従完成会 1924『続群書類従 第18輯』

続群書類従完成会 1928『群書類従 第18輯』

岐阜市役所 1928『岐阜市史』

大衆書房 1949『濃飛の文学』

名古屋営林局 1980『岐阜・金華山国有林の森林植生』

植田弥生 1998「北山3号墳出土炭化材の樹種同定」『岐阜市北山3号墳』（財）岐阜市教育文化振興事業団

岐阜市 2000『岐阜市自然環境実態調査報告』

岐阜市 2004『平成15年度 金華山ルネッサンス事業調査報告書』

笈真理子 2009「岐阜奉行所の構成員と職掌」『研究紀要19』岐阜市歴史博物館

内堀信雄 2009「絵図類の検討」『岐阜城跡』岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団

岐阜市教育委員会 2010『ふるさと読本 金華山』

表 3-8 金華山関係俳句一覧

番号	時代	出典	俳句	作者
1	江戸時代 前期	笈日記	城址や古井の清水先づとはん	松尾芭蕉
2		笈日記	撞く鐘も響くやうなり蟬の声	
3		笈日記	落梧何かしのまねきに 応じていなばの山の松の下涼して 長途の愁をなくさむほとに 山かげや身を養はん瓜畠	
4		芭蕉句集	花と実と一度に瓜の盛りかな	
5			夏きてもたゞひとつばの一葉哉	
6	江戸時代 前期	七車	まつとならば稲葉又来ん秋もやがて	上島鬼貫
7	江戸時代 中期	全集	守るなどは案山子も知るや稲葉山	横井也有
8	明治～ 昭和前期		鶉かぐりや闇美しき金華山	大野万木
9			天そそる金華の城や風光る	

表 3-9 金華山関係和歌一覧

番号	時代	出典	和歌	作者
1	平安時代 初期	古今和歌集	立別れいなはの山の嶺におふる松とし聞かは今かへりこむ	在原行平
2	鎌倉時代 初期	新古今和歌集	忘れなん松となつけそ中々にいなはの山の峯のまつ風	藤原定家
3	建保4年 (1216)	拾遺愚草 上	きのふかも秋の田の面に露置し稲葉の山も松のしら雪	藤原定家
4	弘安元年 (1278)	續拾遺和歌集	かひなしや稲葉の山のまつとてもまたかえりこん昔ならねと	藤原爲氏
5			待とせし風のつてたにたへはてゝ稲葉の山につもる白雪	藤原隆輔
6	正安3年 (1301)	新後選和歌集	鳴捨て稲葉の山のほとゝきす猶たちかへりまつとしらなん	権中納言經平
7			いなは山松の嵐や寒からんふもとの里に衣うつなり	後鳥羽院
8	正和2年 (1313)	玉葉和歌集	雪の中に冬ハ稲葉の峯の松つみにもみちぬ色たにもなし	順徳院
9	文和2年 (1353)	小島のくちすさ み	おもひきや思もよらぬ假寐して稲葉の月を庭に見んとは	二条良基
10	正平14年 (1359)	新千載和歌集	都人まつとしきかはことつてよひとり稲葉の峯のあらしに	伏見院
11	永享11年 (1439)	新續古今和歌集	今はとて稲葉の山の時鳥わすれかたみのひと声もかな	法眼顕昭
12			いなは山峯立ち別れ行雲の帰らんほとハまつとたのめよ	権中納言雅縁
13			紅葉せし秋ハ稲葉の秋風に松のみ残る冬来りけり	源家長朝臣
14			峯に生ふる松にも今や通ふらん稲葉の山のたくれの色	多々良持世朝臣
15			今はとて春も稲葉の峯の松ねにあらハれて鶯そ鳴	光明峯寺入道
16			旅寝する花の下風立わかれいなはの山の松そかたなき	後京極摂政
17			立帰り今はいなはの山風にまつ音するはつ雁のこゑ	藤原爲家
18			人はこそ秋は稲葉の山風にけふはくれぬと鹿そ鳴くなる	源通具
19			峯の松すそのゝ萩もうちなひきいなはの山はたゝ秋の風	慈鎮
20			しはしともなどかとゝめぬ不破の関稲葉の山のいなはいねとや	津守国量
21		建保歌合	秋の田のなひきし音は枯はてゝあらぬ稲葉の峯の松風	行基
22			麓よりつゝく田つらのいなは山みどり涼しき峯の松風	遊行上人
23	室町時代		美濃国稲葉山に社ありとて人の法樂の歌すゝめ侍りける中に 言の葉を手向の神の恵みやいなはの山のまつことにせん	徹書記 (正徹)
24			此山中に一石山という所あり 鳥が鳴く東の方になひくなり一の石の山はこの山	
25	文明5年 (1473)	ふち河の記	みねにおふる松とはしるやいなは山こかね花さく御代のさかへを	一条兼良
26			さ苗とるふもとの小田にいそくなりそよくいなはのみねのまつ風	
27	元龜2年 (1571)	言継卿記	都路にいなばの山のうれしさをいろに出でてもいざ帰来む	山科言継
28			あふぎ見よ一つの石の山高く生のぼる松にかかるしら雪	
29			よそにさへ名高き山の嶺に生る松たぐひなき雪の明けぼの	
30	天正元年 (1573)	美濃路紀行	千里までなびきにけりなそよぎたついなばの山の風のまにまに	兔庵老人
31	江戸時代 中期	太神宮法樂千首	歸りこんと云ひし契りを頼りにていなはの峰に松そひさしき	鷲尾隆長

表 3-10 絵図資料一覧

N o	資 料 名	所 蔵	備考（年代等）
1	濃州厚見郡岐阜図	名古屋市蓬左文庫	承応3年（1654）
2	濃州厚見郡岐阜図	西尾市岩瀬文庫	承応3年（1654）
3	岐阜御山并惣山 今泉沖早田沖絵図	徳川林政史研究所	元文元年（1736）中秋
4	濃州厚見郡岐阜古城之図	名古屋市蓬左文庫	
5	稲葉城趾之図	伊奈波神社	17世紀後半～18世紀前半
6	岐阜惣絵図	徳川林政史研究所	
7	岐阜御山町絵図	徳川林政史研究所	
8	岐阜町絵図	西尾市岩瀬文庫	
9	岐阜町絵図	岐阜市歴史博物館	寛政6年（1794）絵図の写し
10	金華山之図	個人	明治初頭ごろ

表 3-11 絵画資料一覧

N o	資 料 名	備考（年代等）
1	鶺鴒遊楽図（左隻）	江戸中期
2	鶺鴒遊楽図（右隻）	江戸中期
3	長良川上覧鶺鴒図 狩野晴真筆2幅	江戸後期
4	尾張名所 岐阜鶺鴒図	江戸後期
5	濃州長良川鶺鴒ノ図	江戸時代
6	濃州長良川鶺鴒図	江戸時代
7	岐阻路ノ駅 河渡 長柄川鶺鴒船	江戸後期
8	木曾路名所図会 卷之二のうち「長柄川鶺鴒船」	文化11年（1814）
9	岐阜市全景図	明治7年（1874）
10	長良川眺望の図（三浦千春著『美濃奇観』）	明治13年（1880）
11	美濃国長良川烏鬼行之図	明治15年（1882）
12	長良川鶺鴒之図	明治21年（1888）
13	岐阜長良川鶺鴒之図	明治22年（1889）
14	岐阜みやげ	明治23年（1890）
15	美濃国長良川烏鬼行之図	明治34年（1901）
16	長良川鶺鴒図	江戸後期～明治
17	美濃飛騨両国魚漁之図（岐阜県管内漁業之図）	明治時代
18	長良川鶺鴒真景図	明治時代
19	長良川鮎鱒図	明治時代
20	岐阜名所絵図	大正元年（1912）8月

第3節 信仰の調査

本節では『史跡岐阜城跡保存管理計画書』第3章第2節「信仰の調査」を抜粋して掲載する。

1. 調査結果より分かる原始～中世にかけての稲葉山(金華山)の信仰

稲葉山周辺^(注)を、南に続き美濃平野に面する瑞龍寺山まで含めて考えた場合、最も年代の遡る遺跡は、破碎された舶載内行花文鏡等が出土した瑞龍寺山頂遺跡である。この遺跡は弥生時代後期の墳墓であることが分かっている。南部の荒田川流域を見渡せる立地であり、中国鏡を副葬品として埋葬するような首長がいたことが推測される。続く古墳時代には、この山域では尾根筋や山麓部に多数の古墳が築かれる。周知されている古墳群だけでも、北洞古墳群、権現山古墳群、瑞龍寺山古墳群、日野古墳群、上加納山古墳群、岩戸古墳群と数多くの古墳が分布していることが分かる。また、岐阜公園内においても第2次発掘調査において千疊敷古墳が発見された他、登山道沿いでも近年の分布調査によって新たな古墳が見つかっている。中世の遺跡としては、稲葉山の北東山腹において、多数の古瀬戸四耳壺・瓶子を出土した中世墓群、日野不動洞遺跡がある。これらより、稲葉山周辺は古くからこの地域の人々にとって重要な墓域であったことが分かる。

また、周辺の古代寺院に眼を向けると、厚見郡には厚見寺・鍵屋廃寺・大宝廃寺といった古代寺院が存在し、長良川を挟んだ対岸には長良廃寺がある。これらは創建が7世紀末～8世紀ごろと考えられる。その他に長良の雄総には、奈良時代に建立された護国之寺がある。古代寺院が多数みられるのは、この地域の豪族の中央との結びつきが強かったことと、仏教の普及が進んでいたことのあらわれと考えられる。

岐阜公園内の千疊敷の発掘調査から分かるものとしては、古代については第3次調査で一定量の須恵器片が採集された他、第2次調査で、灰釉陶器・ロクロ土師器を廃棄したと思われる土坑や地鎮遺構が検出されている。地鎮遺構は、土師器皿が置かれ、その内側と北接部に銅銭5枚が置かれ、土中には炭化した穀粒が集中して認められた。土師器皿に銅銭と穀粒を納めていたと推測される。

さらに中世に入ると、第3次調査における「大寺」墨書小皿や梵鐘鋳型、石積み、五輪塔、古瀬戸といった遺物・遺構から、寺院らしき宗教的施設が存在したと考えられる。

2. 伊奈波神社の旧跡としての稲葉山

稲葉山は伊奈波神社の旧社地であったとされる。『伊奈波神社略志』によると、当初の伊奈波神社は現在の地ではなく、稲葉山中腹の椿原（現在の丸山）にあり、峯本宮は稲葉山頂にあったとされる。また伊奈波神社では麓に神主館等の施設があったと伝わっている。稲葉(因幡)および椿原という地名は、延文4年(1359)調進の伊奈波神社の縁起『美濃国第三宮因幡社本縁起』に見られる。縁起には、祭神の因幡大菩薩である五十瓊敷入彦命いにしきいりひこのみことの一族を祀るため、景行天皇の命により武内宿禰が「椿原金山」のふもとに社殿を構えたことが伊奈波神社の創祀であるとされている。この「椿原金山」という地名は、鏡を破る金石が奥州より美濃に運ばれ、一夜にして原が山となったという同縁起内の記述に基づくもので、「因幡(稲葉)山」「椿原」という名称の所以

はここに語られている。

事実として稲葉山および丸山の地は長良川周辺の水運にすぐれた場所であり、この地方で有数の高さを誇る山であり、丸山に存在する烏帽子岩も含めて、人々の信仰の対象（聖地）となる要素を含んでいる。また、千畳敷の第3次調査等で多数の宗教施設の痕跡が確認されたことは一部伝承を裏付けるもので、それらを総合的に勘案すると、稲葉山は伊奈波神社の旧跡として十分あり得る場所であるといえる。

伊奈波神社に関する中央の記録としては、『続日本後記』および『日本三代実録』に官社として神位を授かる記録があり（承和12年・貞観11年・元慶4年）、縁起成立以前より古くから存在したことが分かる。また、一条兼良の紀行『藤河の記』には、名所として稲葉山の麓を通ったことが書かれており、縁起を引用している。おそらくは美濃在住の兼良の家族や、斎藤妙椿などの地元の者より縁起を伝え聞いたものと考えられる。参考として、軍記物の編纂物『船田後記』には、明応5年（1495）土岐政房・斎藤利国と土岐元頼・石丸利光の争乱（船田合戦）に際して、因幡山の「因幡神祠」で政房方が戦勝祈願をしたとある（ただし、後世の編纂物のためにこの祠が移転前の伊奈波神社を指すのか、移転後のものを指すのかは不明である）。

ところでこの時期、旧伊奈波神社は一時期廃れたようで、『梅花無尽蔵』の「濃州第三宮因幡大菩薩の祭礼再興の題辞」という文からは明応5年（1495）当時に祭礼が衰えていることと、今後は昔どおり盛んに祭礼を行うということが読み取れる。これに関連して、千畳敷の発掘においてもこのころの遺物は極端に少なくなっており、この場所に存在した宗教施設の活動も衰微していたと推測される。

3. 伊奈波神社移転後の稲葉山の信仰

天文8年（1539）、斎藤道三によって伊奈波神社が丸山から現在地へ移されたと伝えられ、この時までには稲葉山に築城が行われたと考えられるが、天文4年（1535）に流失した川北の守護所・枝広館との関係を考えれば、道三がこの地域の整備に着手したのは、これより年代が遡る可能性がある。道三がこの山に城を建てた理由としては、急峻な崖で防御性に優れている、周辺で有数の高地で遠くまで見渡せる、長良川に隣接して水運のすぐれた土地である、といった理由があるのは間違いない。しかし他方で、戦国大名が城域を設定する際、広域的支配を進めるにあたって以前より神社域として信仰の対象であった場所や周囲を見渡せる場所に城を築城し、視覚的にも精神的にもその権威を誇示した可能性が考えられる。道三の築城にあたって、美濃の地一円を見渡すことができ、古代よりの由緒のある神社が存在していたこの地は、権威誇示のための絶好の場所であったと言える。

道三の築城により、伊奈波神社は現在の地へと移された。神社が移った丸山には、当時のものとみられる石垣遺構が一部残っており、砦が築かれたと思われる。山上には城が築かれ、以前あった旧峯本宮は現在の地である権現山に移転した。しかし、稲葉山上の神社の痕跡は完全になくなったわけではなかった。『言継卿記』永禄12年（1569）8月条には、言継が信長に岐阜城を案内された折に、「上之権現」を案内されたと記している。この「上之権現」の実態がどのようなものであったかは不明であるが、山上に宗教的な施設が存在したことは明らかである。信長の時代に至っても城郭としての性格とは別に、聖地としての性格が確かに残っていたことが分かる。

4. 近世稲葉山の信仰

関ヶ原合戦後、岐阜の町は徳川蔵入地（直轄領）となり後に尾張藩領となった。岐阜城は廃され、櫓・館の礎石・石垣などはこの時とり壊されて、稲葉山は「御山」として一般の立ち入りが禁止となった。しかし、立ち入り禁止のはずのこの山でも例外があった。『伊奈波神社略誌』に所載の「明治十二年神社明細帳控」には、天保12年（1841）、尾張藩主徳川慶臧^{よしづぐ}巡視の折、愛知郡須佐之神社別当天王坊住職の建議により、官許の上で丸山に社殿を創建し、鳥居二基が建てられ、始めて丸山神社と呼ばれるようになった、とある。これについて裏づける資料はなく、慶臧が藩主になったのは弘化2年（1845）のことで、天保12年時点の藩主は先代の徳川斉荘の代であることなど、信憑性が薄い記事ではあるが、伊奈波神社ではこのように伝わっていることが分かる。丸山は「唯一の奇石を存し遺跡を表するに過ぎさりし」とあるように、神社としての利用はされていなかったが、明治初期の文献などから、近世のどこかの時点で、伊奈波神社の摂社として丸山神社が誕生し、再び神社域として認められるようになったのは確実である。伊奈波神社が入山規制のある「御山」に土地の所有・管理を認められ、社殿を造営できたのは、伊奈波神社が近世に至ってもこの山に対して影響力と所有の意識を持っていたからであろう。

その様子は『稲葉城趾之図』からも見ることができる。この図には、城と対比して伊奈波神社も大きな存在として描かれており、旧跡で築城のために明け渡したとは言っても、未だに伊奈波神社の山である、という意識が感じられる。近世でも稲葉山は伊奈波神社の旧跡の地として、変わらず信仰の対象であったことが分かる。

5. 近現代の金華山の信仰

金華山周辺の近現代の信仰を考えるためには、明治以降の国の宗教政策は切っても切り離せない関係である。慶応4年（1868）の太政官布告により、祭政一致と、古代以来の神祇官の再興が布告された。また同年の太政官および神祇官の達により、中古以来の神仏の判然が命じられた。これによって社僧の還俗、神社内の仏像的要素の排除が定められた。これを機に全国的に廃仏毀釈の運動が起こった。近世に復興した丸山神社もこの影響を受けている。『神社略誌』には次のようにある。

丸山神社は、再興の建議をした天王坊が管理していたが、神仏分離の影響で社務に関わらなくなり、祭祀が廃絶した。その後明治8年（1875）に市民が再興を申請し、許可を得て社殿を修理した。しかし明治24年（1891）の濃尾震災によって社殿は倒壊し、祠一つが残った。

神仏分離により、丸山神社の管理をしていた天王坊が社務に関わらなくなり、明治以降の丸山神社の荒廃の様子が見て取れる。

その他に国の政策としては、明治5年（1872）3月に神祇省を廃し教部省が設けられ、国民教化を具体的に実施する為、教導職制度が設けられたことが挙げられる。全国統括機関である大教院が東京に設置され、各府県単位の統括を行なう中教院が全国各地に設置された。岐阜においても現在の岐阜公園内に、板垣退助遭難の現場として有名な岐阜中教院が明治10年（1877）に開院した。岐阜公園内の北寄りで行われた第3次調査で、「中教院」と記された染付坏が出土している。教導職制度は同年の明治10年（1877）で廃止されるが、岐阜中教院はその後も存続した。しかし、当時の新聞記事や昭和初期に刊行された旧岐阜市史などを見ると、院には設立当初より一

定の収入がなく負債の返済に苦慮していたことが分かる。

岐阜公園は明治26年(1893)より市が管理していたが、大正期に市の公園整備が本格化すると、市と中教院の間で土地に関する問題が起こった。詳細ないきさつは不明だが、当時の新聞記事により断片的に窺い知ることができる。市の主張としては公園内の土地は市所有のものなので明け渡すべきというもので、中教院としては公園開設以前に民有地を購入したもので、元々中教院の土地であるという主張である。この問題は、大正6年(1917)に解決し、市が中教院側に対して4千円で土地と建物を購入することが合意された。当初、市は建物を修繕して神前結婚を行う場所として計画していたが、結局建物は、大宮町二丁目に移された。移転の折、院内にあった金毘羅神社と御嶽神社はそれぞれ丸山と金華山山頂に移された。大正14年(1925)の絵図を見ると丸山に「丸山金毘羅神社」、山頂に「御嶽神社」とあり、その存在が確認できる。この2社のうち、御嶽神社は現在も金華山山頂に現存する。一方金毘羅神社については旧市史が刊行された昭和3年(1928)頃まで丸山に存在したことが分かるが、現在は社の土台が2基と拝殿の礎石が残っているのみで、昭和期に撤去されたと思われる。しかし、現在も丸山には伊奈波大神が祀られており、毎年4月25日には例祭が執り行われ、その信仰は今も続いている。

以上のように、細かく見てみると金華山やその周辺には宗教的・信仰的要素が数多く残っている。現在は城が存在した山としての認識が一般に浸透しているが、道三が築城する以前は伊奈波神社という神社の聖域であり、寺院らしき宗教施設跡も確認できる信仰の山であったと言える。また築城以降も伊奈波神社が山に影響力を有していたことを考えると、この山の信仰的要素は脈々と受け継がれ、信仰の山としての価値は決して無視することができないことが分かる。

【注】

山の表記について、伊奈波神社の旧跡であった中世までは「稲葉山」とし、一般に「金華山」と呼ばれるようになった近代以降については「金華山」と表記することとする。

【参考文献】

- 飯村均 1994 「山城と聖地のスケッチ」 帝京大学山梨文化研究所研究報告第5集
 市原武雄 1994 「梅花無尽蔵注釈 第四巻」 続群書類聚完成会
 岐阜市教育委員会 1991 『千畳敷Ⅱ』
 (財)岐阜市教育文化振興事業団 2000 『千畳敷Ⅲ』
 岐阜市役所 1928 『岐阜市史』
 岐阜市 1976 『岐阜市史 史料編 古代・中世』
 岐阜市 1980 『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』
 大衆書房 1944 『尾濃葉栗見聞集・岐阜志略』
 黒板勝美編 1953 『新訂増補国史大系 続日本後紀』 吉川弘文館
 黒板勝美編 1966 『新訂増補国史大系 日本三代実録』 吉川弘文館
 岩波書店 1990 『新日本古典文学大系 中世日記紀行集』
 続群書類聚完成会 1998 『言継卿記四』
 国幣小社伊奈波神社 1941 『伊奈波神社略誌』
 伊奈波神社 1949 『伊奈波神社 境内地譲與據證文献』
 伊奈波神社 2006 『伊奈波神社 縁起巻物』

第4節 景観の調査

岐阜市では金華山を含む長良川中流域一帯を「長良川中流域における岐阜の文化的景観」として、国の重要文化的景観地区の選定を目指して詳細調査を行い、平成25年度に選定を受けた。本節では調査成果に基づいた文化的景観の認識を『重要文化的景観 長良川中流域における岐阜の文化的景観 整備基本構想』から抜粋し、まとめておきたい。

1. 文化的景観の構造

(1) 長良川を主軸とした流通・往来の構造

岐阜市域における長良川には、芥見湊・中河原湊・長良湊・鏡島湊等が存在した。これら川湊は水運と陸運の結節点であり、川湊には京街道・高富街道・郡上街道等の諸街道が繋がっていた。

川湊のうち、特に中河原湊と鏡島湊は、水運の難所であった長良川扇状地において比較的流路が安定した扇頂部と扇端部に置かれた。両湊は、この間において長良川が少なくとも3本に分流していたことから、長良川水運を掌握する上での重要な湊地であった。扇頂部の中河原湊には近世尾張藩の川役所が置かれ、対岸の鶉飼屋に居住する鶉匠に抜け荷の取締りを行わせる等して、長良川上流からの流通を掌握した。また、中河原湊は、北方の山県郡や越前国を繋ぐ高富街道の渡河点であり、岐阜町の飛騨や美濃北方からの流通・往来の窓口となった。一方扇端部の鏡島湊は、古くから京に繋がる京街道の渡河点であり、中世末から近世には、加納藩の外湊として位置づけられるとともに、下流方面の物資が京街道を経由して岐阜町にも送られた。

このように川湊や街道の基点には、岐阜町・川原町・鏡島等の町場や集落が成立し、長良川中流域に広く流通・往来のネットワークが形成されていった。中でも都市・岐阜町には、東西南北の周辺地域や諸国へと至る主要街道の基点が重なり、全国各地の物資が集積・流通する一大拠点として、長良川流域全体の地域経済を牽引した。

昭和時代に至り、流通・往来の主役は水運から陸上交通に転換した。湊は姿を消し、渡しについても「お紅の渡し」以外は橋梁に変えられた。しかし、長良川水運を主軸として発達した都市や集落、街道等からなる地域構造は今日も継承され、当文化的景観の基本構造を規定している。

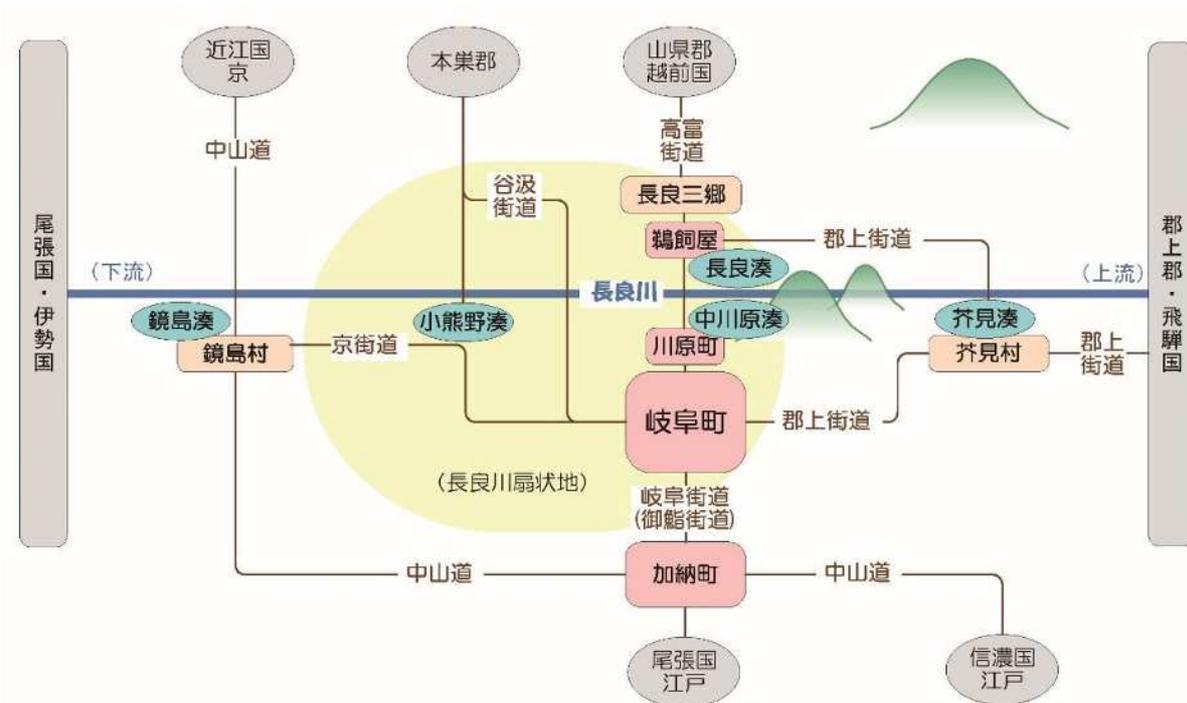


図 3-11 近世から近代における長良川流域の流通・往來の構造模式図

(2) 金華山麓に栄えた都市

美濃山地の西端に位置して濃尾平野に聳え立つ金華山は、平野との比高 300m 以上に及び、近接する長良川が北側の堀として機能する防衛に適した天然の要害であった。加えて、金華山西麓の中河原湊付近は、もともと長良川扇状地の扇頂部に位置する水運と陸運の結節点として、経済活動への利点を備えていた。中世末期、斎藤道三や織田信長は、長良川を主軸とした流通・往來の構造の中心となる川湊に隣接し、かつ防衛機能に優れた金華山とその山麓に着目し、美濃国における政治と経済活動の一元化を図り、領国経営の拠点として城と都市を形成し、体制を整えたのである。

町場における道路について、城下町が形成される以前は、長良川へのアクセスを主眼に置いた、今町筋・材木町筋等の南北方向の道路網が主であったと考えられる。中世末期、城下町が形成される段階では、七曲通り・百曲通り・新町通り等の金華山へ向かう東西方向の道路網が整備された。斎藤道三や織田信長は、城下町内に武家地、寺社地、町人地等を配置し、それらを一体的に堀と土塁で囲むという、総構えを備えた原初的な都市づくりを行った。また、総構えの土塁は、長良川の洪水から城下町を守る堤防としての機能も有し、生活空間としての安定性をもたらした。

近世に至り、岐阜城は関ヶ原合戦の前哨戦により落城した。以後、金華山には、尾張藩による入山規制によって地域固有の良好な自然環境が形成されるとともに、岐阜城跡や信長公居館跡としての地形や遺構が良好に保存された。また、旧城下町は川湊や街道からもたらされる各地の物資が集積・流通することから、尾張藩は、中河原湊付近に長良川役所を設置し、商業地としての機能を存続させた。こうして旧城下町は地域の経済を牽引する商業都市「岐阜町」へと変貌し、発展し続けた。

材木や竹、美濃和紙等が産出される美濃山地に近いという地理的な利点から、岐阜町には、材木・和紙・糸等をはじめ様々なものを扱う問屋業が発達した。提灯・団扇等の伝統産業につい

第3章 岐阜城跡の調査

て、竹及び和紙を利用する提灯は、材料の和紙はもちろんのこと、骨の原料となる竹についても、当初は美濃産を使用する等、長良川を介した物資集散地としての地の利を生かし発達した。そのような生業を支えた町屋について、主屋は道路に接し、「うなぎの寝床」状の敷地の奥には土蔵を配置するのが一般的であった。蔵は、家財のための蔵のほか、生業に関わる蔵（木蔵、紙蔵等）もあることから、主屋内に設けられた広めの土間は、ミセと蔵の間での物資の頻繁な運搬に利用された。

近代に至り、金華山は入山規制が解かれ、御料林（戦後は国有林）として管理される。また、山麓において明治初期に岐阜公園、大正時代には三重塔が造られ、山上には明治末期に岐阜城復興天守が造られる。このように、金華山は自然と歴史を一体的に体感できる憩いの空間と認識され利用されるようになる。さらに、岐阜町に住む人々が、金華山もしくは岐阜城復興天守が見える位置に本座敷や茶室を置く等、眺望を楽しむ山として再認識された。

金華山は上述のような管理の歴史を経て、現代においても豊かな植生と生態系が維持されているため、多くの利用者に親しまれている。また、今日の川原町地区、旧城下町地区には、城下町に由来する総構えの土塁、水路、道路、町割り等多様な要素が存在し、基本的な骨格として今日まで深く土地利用に影響を与えている。

中世末期以前—中世末期—近世—近代という時間の流れの中で、人々の生活・生業や意識において、長良川と金華山という主軸が交互になることも、川原町地区、旧城下町地区の都市形成を考える上で興味深い点である。また、遅くとも近世までに、両側町の形態をとる町割りが形成され、それを基盤とした自治組織がつくられ、自治活動が行われたと考えられる。さらに住民は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗うため、白木の格子の町並みという独特の景観が生み出された。以上のような住民による無形の活動は、現在まで継承されている。

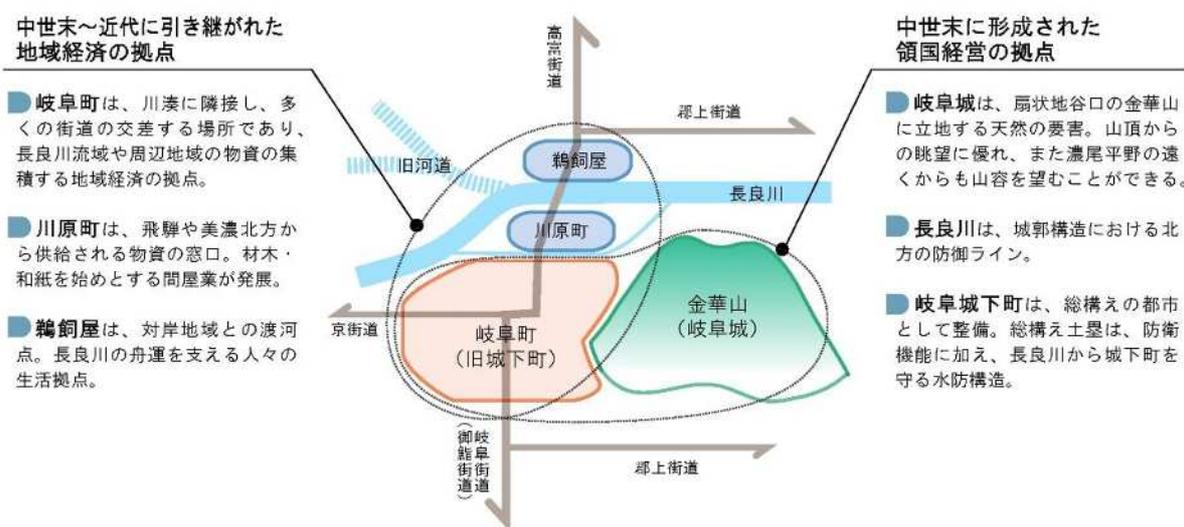


図 3-12 金華山周辺における領国経営と地域経済の拠点としての構造模式図

(3) 長良川鶺鴒を支える諸空間

水量と水質に恵まれた長良川は、現在でも多様な魚類の宝庫であり、特に鮎の生息に適し、岐阜市民の生活や生業に欠くことのできない河川である。長良川の豊かな漁業資源は、夜川網や瀬

張網等多様な漁撈技術を育み、鵜飼のみならず、その多くは今日もなお継承されるとともに、地域の食文化を形成してきた。

鵜飼は美濃国において、1300年来行われてきた漁法である。鵜飼は、中世末頃から鑑賞及び献上鮎鮓の対象として為政者の保護を受け、その高度な技術や伝統的な習俗と同時に、鵜飼を支え、鵜飼に支えられた地域の歴史や文化をも継承する。

長良川鵜飼は、遅くとも中世末頃から小瀬鵜飼と長良鵜飼の2つのグループがあり、上流側を小瀬鵜飼、下流側を長良鵜飼の漁場に分け、長良の鵜飼集団は、川湊でもあった鵜飼屋に居住した。近世には、幕府や尾張藩の庇護を受けた長良川鵜飼の「献上鮎鮓」を支える仕組みが岐阜町をはじめとする地域に構築された。明治時代には宮内省への鮎献上が始まるとともに、鵜匠家が鮎鮓を製造するようになる。以上のような鵜飼の権力による保護は、結果的に周辺の山や川の環境や景観を維持させ、多様な伝統的漁業の継承にも寄与している。

近世には長良川や旧岐阜町が尾張藩支配となり、献上鮎鮓製造や生鮎御用のための役鮎が課された。献上鮎鮓は、岐阜町に置かれた御鮎所（正法寺（岐阜大仏）の西側付近）で製造され、岐阜街道（御鮎街道）を經由して江戸へ陸送された。公儀の御用を預かる長良川鵜飼は、幕府や尾張藩により優遇・保護され、長良川において特権的な地位を確立し、近代以降は、宮内庁式部職として、鮎の献上の伝統を継承している。昭和40年代からは、大縄場大橋の下流等、鮎の主要な産卵場の保護をはじめとする漁業資源の保護が行われ、長良川鵜飼は、多様な漁撈技術の中にあつて特別な地位を保ち続け、長良川における漁撈文化の象徴にもなっている。

また鵜飼観覧は中世以来の歴史をもつ。金華山をはじめとする美濃山地の山々は、近世以降、漁場の借景として認知され、多くの絵図に描かれている。鵜飼観覧は、近代以降に船頭や旅館業者をはじめとする多くの地域住民が携わる重要な観光事業として発展するとともに、長良川特有の観覧船造船技術や操船技術の中に伝統的な川文化が伝承された。鵜匠の居住地である鵜飼屋と鵜飼観覧に関係する施設が集中する川原町は、長良川を挟んでひとまとまりの観光拠点として機能している。これらの集落は、長良川及び周囲の山々からなる優れた自然景勝地と一体となつて、現在の長良川鵜飼を支えている。

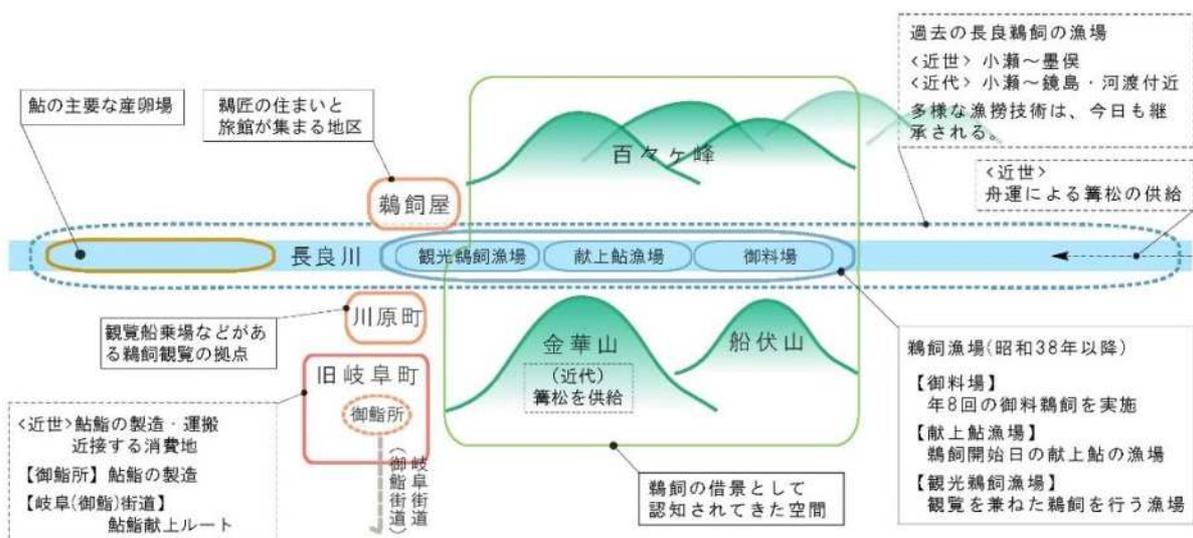


図 3-13 長良川鵜飼を支える諸空間の配置模式図

2. 文化的景観の普遍的な価値

岐阜市の中央部には、多様な生態系や植生を維持する長良川・金華山があり、またそれらの周囲に展開する都市部には、斎藤道三や織田信長によって形成された城下町の基盤が、ほぼ形を変えることなく継承されている。

長良川の水運や都市の基盤の中で、材木・和紙・糸等の問屋業、竹・和紙を材料とする提灯・団扇等の伝統的な手工業は昭和初期まで発展し続けた。以後、長良川の水運はなくなり、また、現在は商業地としての機能は縮小傾向にあるが、紙の問屋業や団扇等の伝統的な手工業は今もなお営まれている。さらに、遅くとも江戸時代までには形成された自治組織及び自治活動が、両側町の形態をとる町の中で現在も継承されている。

また長良川では、鵜飼をはじめとした様々な伝統漁法が現在も行われている。鵜飼に携わる6名の鵜匠が暮らし、「観光鵜飼」により発展した旅館等の観光施設が建ち並ぶ鵜飼屋地区、及び長良川の水運により発展した川原町地区は、長良川の恵みに依拠する生業・生活によって形成された堤外地の集落であり、人々と長良川との距離の近さをよく示している。

長良川の堤外地の集落及び中世から近世に整備された都市構造が残存する都市部において、現代の人々は、長良川や金華山と一体となり、また常にそれらを意識しながら、問屋業、伝統的手工業、自治活動及び祭りといった生業・生活を継承していることこそが、当文化的景観の価値である。

【出典】

岐阜市教育委員会 2019『重要文化的景観 長良川中流域における岐阜の文化的景観 整備基本構想』

第5節 公園の調査

本節では『史跡岐阜城跡保存管理計画書』第3章第5節「岐阜公園の調査」を抜粋し掲載する。

1. 第I期(明治15年～明治時代末まで)

明治10年(1877)頃になると全国で公園を求める機運が高まり、各地で公園が開設された。

岐阜公園は明治15年(1882)6月に請願、同年8月18日に認可されたが、しばらくそのままに打ち捨ててあったようで、本格的な整備は明治19年(1886)からの小川汲三郎と消防組によるものであった。開園式は明治21年(1888)11月1日に行われた。

当初の公園面積は5万坪余りとされる。市役所に残る公園台帳や図面等を照合すると、その範囲は現在の財務省所管国有地に相当すると考えられる。明治22年(1889)の「岐阜市街新全図」には槻谷に位置する千畳敷の平坦地を中心に滝や橋が強調して描かれているほか、開園当初には円山公園、金華山公園と呼ばれていたこともこれを裏付けている。なお、この図には現在の板垣退助像のそばから登る階段も描かれており、これが当初の整備であったことが分かる。このように開園当初の岐阜公園はかつて歴代城主の館があったと伝えられている千畳敷を中心とした山麓部一帯であり、名所旧跡とともに槻谷の滝や奇岩、樹木等、金華山の自然景観を楽しむための場所であったといえるだろう。

なお明治23年(1890)の『岐阜美や計(みやげ)』には、以下のように記されている。

「公園は大仏閣と境域を接し、稲葉山の麓に沿ひ長良川に臨みて開造せり。園内には、物品陳列場を建てて、本州の産物を蒐集し以って、博く人民の観覧に供へ、又、倶楽部を設け之を萬松館と名けて、官民の宴会に供ふ。庭前には假山、噴水を作り、数万の松樹を栽ゑて、之を環らせり。山に沿ひては、天然の奇岩角列し、樹老ひ泉清く、亭をその上に構へ、棧橋をその下に懸く。風致最も幽邃なり。園内甚清麗にして、東照公の祠あり。神道中教院は其の下にありて、皇太神宮を奉祀す。神前より南方一帯には老梅稚櫻、数千株を交植して、一段の美を添へたれば、他に双びなき絶景の公園となれり。云々」

やや誇張が入っていると思われるが、開園間もないころの公園の様子が伺える。明治10年(1877)に建設された中教院の敷地には梅や桜が植えられ、その西側には明治21年(1888)に迎賓館兼倶楽部(萬松館)及び物品陳列場が建設される。その景観は公園と一体のものとして写真や絵図に描かれているが、中教院の敷地は柵で明確に区画されているなど、平地部分は公園範囲外であった。

金華山全体をみると、明治時代に至り官林を経て御料林に編入され、鶉飼の篝松に供する森林として利用される。これは、長良川鮎御猟場設置に伴い、鶉匠篝火用松枯損木を払い下げたもので、戦後の林政統一によって国有林となるまで続いたと考えられる。その一方、明治20年(1887)の岐阜日日新聞には「金華山に茸狩りに行く者多くして、松茸の数よりも採手の数が多き程なり・・・洋杖を振りシガレットを薫らせ野外に秋芳を尋ぬる紳士・・・」と紹介されるなど、文明開化の中で散歩遊歩が盛んになってくる中、金華山は一般に解放され、人々が訪れるようになった。明治26年(1893)の記事では昔を偲ぶ標札や道の改修を望む声が紹介されるなど、金華山活用の機運の高まりがみられる。

2. 第Ⅱ期(明治時代末～昭和10年代)

金華山活用の動きは明治43年(1910)の岐阜保勝会による模擬天守建設により具現化される。岐阜日日新聞明治45年(1912)5月22日付の記事に以下のように記されている。

「岐阜市の発展策として一昨年名古屋市に關西府県連合共進会の開催を機として金華山頂に模擬天守閣を築造し、次で昨年金華山全部を御料局より借り下げ金華山より権現山、瑞龍寺山一帯を市の公園となすべく計画し、本多林学博士を招じて之が設計を為すべく実地調査を請いたるが・・・

本年度の公園整備費は約2万円に上り居れるを以て愈々公園改良に着手する事となり之が設計方を在東京の長岡保平(漢字誤り)に依頼したれば同氏は本月20日後に来県設計に着手するはずなり・・・」

このように山頂整備に連動して荒廃した岐阜公園も再度整備が実施されることとなる。明治44年(1911)には本多静六に現地調査を依頼し、その翌年には実質的な設計を長岡安平に委託することとなり大正2年には設計案が示されるが、広大な計画であったため、実現したのはその一部であったと考えられる。計画と同時に明治44年には公園拡張の申請が行われ、この段階で平地にあった萬松館、名和昆虫館(明治37年)、武徳殿(明治41年)等も公園範囲に正式に組

第3章 岐阜城跡の調査

み込まれたとみられる。また大正6年（1917）に至って中教院敷地が岐阜市に提供され、現在の内苑全域が公園となる。

敷地の拡大に伴って、大規模な公園整備が行われた。三重塔（大正6年）、板垣退助像（大正7年）、遭難記念碑（昭和2年）の建立のほか、大正7年（1918）には南谷勇助をはじめとする公園整理員が任命され、中教院跡地等において池やグラウンド等の整備が実施された。平地部分の整備は大正9年（1920）に多額の予算が付いており、このときが整備のピークとみられる。大正13年（1924）の『岐阜県の概要と史蹟名勝』によれば、

「無数の梅、松、楓を植栽し、池泉あり、溪谷あり、雅橋あり、いわゆる都市衛生の最大要件たる緑樹に豊かで・・・園内には三重塔、東照宮、武徳殿、名和昆虫館・・・水禽舎、禽類室、花卉の栽培、運動具に至るまで完備している」

とある。このように大正期の公園整備では、千畳敷のほかに新たな名所を造り出し観光拠点とするとともに、市民のニーズに応じて運動施設や動物舎を備えるなど家族で楽しめる総合公園として大きく生まれ変わった。

また山頂の復興天守や三重塔に伴って登山道の整備も行われた。この一連の整備は金華山一帯を公園化する構想に沿って行われたものであり、今日における金華山利用の構造が完成した時期と捉えることができるだろう。その様子は大正14年（1925）の『岐阜名所絵図』に見ることができる。

大正時代から昭和初期の金華山・岐阜公園は、観光冊子も多く作られ博覧会の会場にもなるなど、最も華やいだ時代であった。岐阜市で開かれた博覧会には、御大典記念共進会（大正4年）、市制30周年記念内国勸業博覧会（大正8年）、大正天皇銀婚式奉祝国産共進会（大正14年）、躍進日本大博覧会（昭和11年）がある。他の都市公園の例をみても、博覧会開催が公園整備を促進した側面は大きいと思われる。なお、女神の噴水も昭和11年（1936）の躍進日本大博覧会の際に造られており、博覧会が終わった後の昭和11年度から15年度にかけて公園整備が行われ、外苑部の敷地拡大も行われていったとみられる。

3. 第Ⅲ期(戦後～昭和時代末)

昭和30年（1955）、最初の索道計画から45年を経てようやくロープウェーが開業した。復興天守は戦争中の昭和18年（1943）、失火により焼失したままであったが、昭和31年（1956）に再建された。昭和30年代には、岐阜公園に多数の動物舎が作られ、山頂にもリス村が誕生するなど自然と動物に親しむ要素が濃くなった。また公園内には水族館、科学館、図書館、美術館、博物館、音楽堂などの文化施設が造られた。それに反比例するように、かつての故地である千畳敷の名は徐々に見られなくなっていく。

山頂には昭和18年（1943）建設の岐阜気象観測所を改修して昭和26年（1951）に天文台が開設される。この天文台は昭和34年（1959）に再び気象台観測所となる。また南側の山地もドライブウェーやプラネタリウム等が作られるなど観光開発が行われた。

昭和48年（1973）に放映されたNHK大河ドラマ「国盗り物語」のブームにより、岐阜城の観光客が一時的に増加し、その後資料館や土塀等観光施設の拡充が行われている。

4. 第IV期(平成時代)

昭和 59 年 (1984)、ロープウェー乗り場南側において初めて本格的な発掘調査 (1 次調査) が実施された。その結果戦国時代の遺構が確認され、一部整備されている。この発掘調査を機に岐阜公園を歴史公園として整備する機運が広がってきた結果、平成 8 年度の岐阜市第 4 次総合計画において、「信長をテーマに整備拡充を推進する」として歴史公園の位置付けが初めてなされた。その方針は平成 18 年度のまちなか歩き構想の中の公園整備方針―「信長の時代を語る岐阜公園」に引き継がれている。

上記の方針のもと、昭和中頃に造られた平地部分の多くの施設は、老朽化に伴い昭和末ごろから平成 9 年までに順次解体・移転されることとなる。図書館、動物園、水族館、遊具等人気のあった施設のほとんどが公園から撤去された。また残念ながら昭和～平成期における各種施設の設置撤去工事、上下水道工事の結果、平地部分に存在したとみられる地下遺構の大部分が攪乱される結果となった。新たな施設としては昭和 60 年 (1985) に岐阜市歴史博物館、平成 3 年 (1991) に加藤栄三・東一記念美術館、平成 13 年 (2001) に「信長の池」が造られ、平成 21 年 (2009) には新たに公園開設区域となった大宮町 1 丁目に武家屋敷の意匠を取り入れた岐阜公園総合案内所が完成している。

このような中、平成 4 年 (1992) には岐阜公園周辺が「都市景観 100 選」に、平成 18 年 (2006) には「日本の歴史公園 100 選」に選ばれるなど、歴史公園としての価値を評価されるようになってきた。

【参考文献】

岐阜市 1996 『岐阜市第 4 次総合計画前期基本計画』

岐阜市 2006 『岐阜町発祥の地・まちなか歩き構想』

大塚清史 2009 「ぎふ金華山ロープウェイ」前史・三つの金華山登山者輸送計画・ 『研究紀要 19』 岐阜市歴史博物館

表 3-12 関係資料一覧

種別	和暦	西暦	題名	編著者
絵図	明治7年	1874	岐阜市全景	岐阜県図書館蔵
地図	明治22年	1889	岐阜市街新全図	個人蔵
書籍	明治23年	1890	岐阜美や計	長瀬寛二
地図	明治24年	1891	岐阜市近傍図	岐阜県図書館蔵
地図	明治26年	1893	濃飛新精地図	
書籍	明治28年	1895	岐阜県地誌 全	岐阜県教育会
書籍	明治34年	1901	増補 岐阜県案内 全	岐阜県農会
地図	明治40年	1907	実測岐阜市全図	個人蔵
書籍	明治40年	1907	岐阜県名所旧蹟案内 上編	美濃新聞第976号付録
書籍	明治41年	1908	岐阜市案内 附長良川鵜飼記	岐阜市教育会
絵図	大正元年	1912	岐阜名所絵図	
地図	大正2年	1913	郡別明細地図	濃飛日報第7359号付録
書籍	大正4年	1915	美濃名所案内 附鵜飼の記	宮部銀次郎(校閲土岐琴川)
書籍	大正4年	1915	岐阜名勝案内 金華山と長良川の鵜飼	岐阜市役所内 御大典記念勸業共進会協賛会
書籍	大正9年	1920	岐阜金華山史	河田貞次郎
書籍	大正10年	1921	岐阜市案内	岐阜市役所内 岐阜保勝会
書籍	大正11年	1922	岐阜県名所旧跡	岐阜県郷土資料研究協議会
地図	大正13年	1924	最近岐阜市街図	岐阜商工会議所
絵図	大正14年	1925	岐阜名所絵図	
書籍	大正14年	1925	岐阜市案内	岐阜市役所内 銀婚式奉祝国産共進会 協賛会
書籍	昭和2年	1927	名勝の岐阜	岐阜商業会議所
書籍	昭和3年	1928	岐阜市史	岐阜市役所
地図	昭和4年	1929	岐阜市全図	
絵図	昭和4年	1929	岐阜名所絵図	
書籍	昭和5年	1930	岐阜市案内	岐阜市役所
書籍	昭和11年	1936	岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書	渡邊佐太郎著
書籍	昭和11年	1936	躍進大岐阜の観光と産業	藤井順太郎
書籍	昭和13年	1938	岐阜県の概要と史蹟名勝	岐阜県庁内 岐阜県山林会
書籍	昭和16年	1941	岐阜県観光誌	岐阜県観光協会
地図	昭和16年	1941	大岐阜市全図	
絵図	昭和10年代		岐阜俯瞰図	
書籍	昭和30年	1955	観光岐阜の新名所 金華山ロープウェイ	岐阜観光索道株式会社
書籍	昭和31年	1956	金華山物語	岐阜タイムス社
書籍	昭和31年	1956	岐阜の観光	日野誠
書籍	昭和42年	1967	岐阜市の観光ガイドブック	岐阜市・岐阜市観光協会
書籍	昭和48年	1973	ガイドブック"国盗り物語"特集編	岐阜市・岐阜市観光協会
書籍	昭和55年	1980	岐阜県史 通史編 近代上	岐阜県
書籍	昭和56年	1981	岐阜市史 通史編 近代	岐阜市
書籍	昭和56年	1981	岐阜市史 通史編 現代	岐阜市
書籍	昭和61年	1986	岐阜県史 通史編 近代下	岐阜県
書籍	平成12年	2000	大宮町一丁目史誌	岐阜市大宮町一丁目自治会

表 3-13 明治・大正時代の岐阜公園整備関係者

小川汲三郎	<p>天保7年(1836) - 明治23年(1890) 岐阜の3紳士の一人。 小熊村副戸長、今泉村戸長等を勤め、教育や水災救助等に多額の寄付をなし、公共の事業に尽力、常に官民の周旋役を以て任じ、鹿鳴館時代には度々官民懇親会を開いたが、これには小崎知以下県官や地域名望家が出席している。</p>
本多静六	<p>慶応2年(1866) - 昭和27年(1952) 東京帝国大学農科大学(現在の東京大学農学部)教授 明治36年(1903)の日比谷公園の設計を最初に、全国各地の公園の設計を手がけた。県内では養老公園が知られる。 (岐阜県・養老公園、愛知県・鶴舞公園、中村公園、和歌山県・和歌山公園、大阪府・住吉公園 等)</p>
長岡安平	<p>天保13年(1842) - 大正14年(1925) 東京市嘱託 明治初期から大正にかけて都内の公園設計や維持管理を実施するとともに、全国の公園設計にも関わる。 (秋田市・千秋公園、広島市・厳島公園、東京都・浅草公園 他、岐阜県・小倉公園、高知市・高知公園 等)</p>
南谷勇助	<p>安政3年(1856) - 昭和5年(1930) 明治22年から43年の間に岐阜市議会議員を計4期つとめた後、大正7年より公園整理員として岐阜公園整備に尽力する。 大正7年(1918) 市制功労者表彰 大正12年(1923) 岐阜市自治功労者表彰</p>

時期区分	山頂部の構成要素					山麓部の構成要素					(万松館) 迎賓館	公園の範囲		
	無線施設	動物	ウエー ロープ	休憩施設 食事・	登山道	模擬天守	名所旧跡	樹木	文化施設	新名所			遊具	動物
(明治15年～明治末) 第Ⅰ期					----					(三重塔、板垣退助像)				
(明治末～昭和10年代) 第Ⅱ期			計画	計画	計画									
(戦後～昭和時代末) 第Ⅲ期														
(昭和時代末～平成時代) 第Ⅳ期														

図 3-14 明治時代以降の金華山・岐阜公園における構成要素の変遷

第4章 岐阜城復興天守の経緯と展望

第1節 復興天守の経緯に関する調査

1. 目的

岐阜城は慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の前哨戦で落城する。その後山上の城郭施設は失われ、江戸時代から明治時代末までは天守台石垣等の遺構のみが残されていたが、明治43年

（1910）に初代復興天守（模擬城）が建設された。天守は昭和18年（1943）に一度消失するも昭和31年（1956）に二代目復興天守（岐阜城天守閣）が再建され、現在に至るまで山上部に存在し岐阜市のシンボルとなっている。ここでは近代以降の復興天守建設の目的や経緯、意義を検討する。

なお、一般的に「復興天守」はかつて天守があったと考えられている城で推定を含めて再建されたもの、「模擬天守」は天守の存在が確認できない城に建てられたものを指して呼ばれている。岐阜城で明治43年に建設された天守は「模擬城」「模擬天守閣」、昭和31年に再建された天守は「岐阜城天守閣」と呼称されているが、どちらも本来存在した天守を復興した意味合いが大きいと考えられる。本計画では、建物の性格を示す用語として「復興天守」として統一を図る。なお、施設名称としての「岐阜城天守閣」も合わせて使用する。

2. 初代復興天守建設

岐阜城の初代復興天守は日本でも最も古いものといわれているが、その建設は岐阜保勝會が中心となって行われた。明治43年（1910）1月12～14日付け岐阜日日新聞の「寒中の金華山登り」と題した連載記事では、岐阜保勝會の幹事及び委員12名が金華山上に記念碑及び模造天守閣の建設場所の实地調査を行った様子が記されている。記事からは、当時市議会議員であった南谷勇助や記者の石上生も委員であったこと、天守だけでなく見学ルートとなる登山道の改修も検討していることが分かる。また、1月19日付の記事には建設の趣旨として「山道を修理して遺跡を保存し、山頂に一小天守閣を築いてとこしなへに地下の古英雄を慰むるの擧あり」とある。

実際の工事は3月に始まったとみられ、落城式は明治43年（1910）5月15日に行われた。当日は10万人以上の登山者でにぎわい、市内では芸妓連の花車や呉服組合の仮装行列、花火、凧大会、自転車競走会等が催されている。また、明治45年（1912）には「金華山古城趾建設満三年記念祭」が行われており、定期的にイベントが開催されていたことが分かる。

初代復興天守は木造トタン葺の3層3階で、その外観は大正時代から昭和初期にかけて作られた絵葉書等にみることができる。設計にあたってどのような検討がされたかは現在のところ分かっていない。内部の写真は知られていないが、吹き抜けになっており、ハリボテ状の構造であったといわれている。昭和11年（1936）の『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』（岐阜県1936）によれば、天守の工事にあたって「石垣を改築し規模を小にして原形に改むる」と

あり、天守台石垣の改変が行われたようである。

3. 城戸久の天守復原論

昭和12年(1937)、当時名古屋高等工業学校助教授であった城戸久は、「美濃岐阜城建築論」の中で天守復原の検討を行っている(城戸1937)。検討に当たっては文献資料(「日本耶蘇會年報」、「日本西教史」)、絵図資料(「稲葉城趾之図」、「岐阜城図」、「御三階之図」)をもとに、他の城郭(犬山城天守、名古屋城西北三重櫓、丸岡城天守、広島城天守、岡山城天守)との比較が行われた。その中でも城戸氏は加納城二の丸御三階櫓の図について、以下のように評価している。

- ・御三階之図の構造が丸岡城に酷似しており、天正以前のものと考えられること。
- ・平面の大きさが稲葉城趾之図と一致し蓋然性があること。
- ・岐阜城を加納城に移した伝承があること。

論考では、「移築の際に外観は変化している可能性があるが、構造や規模の点から「御三階之図」が岐阜城天守を復元する上で重要な参考資料である」として、平面、断面、外観の復原考察を行い、図面を作成している。

4. 初代復興天守の焼失と再建の道のり

昭和18年(1943)2月17日、初代復興天守は浮浪者のたき火で焼失したといわれている。天守を失った衝撃は市民にとっても大きかったようで、その直後から再建の動きがみられる。

焼失から3日後の2月20日付岐阜合同新聞では、早くも金華警防団員から金一千円の再建資金が寄付されたほか、再建を促す嘆願や寄付、または労働奉仕の申し出が多く出ていると報じている。また、市議会議長の呼びかけにより、市議会、商工会議所、連隊司令部、新聞等の代表者により岐阜城再建期成同盟会が組織される。同盟会は軍部と折衝し、その指導を得ながら築城する方針であったが、社会情勢もありこの時の再建はならなかった。

現実的に動き出すのは昭和30年(1955)のことで、桑原善吉氏の呼びかけのもと、2月3日に準備会会合が開かれ、6月8日には第1回岐阜城再建期成同盟会が開催された。この際に名古屋工業大学教授となった城戸氏を招いて、講演会が行われている。岐阜県図書館に残る『岐阜城天守再建設計図』(城戸事務所1955)は昭和30年6月の日付が記されており、この同盟会での講演時、もしくは前後には基本的な図面が出来上がっていたようである。設計図は昭和12年の天守復原図がベースに作られたとみられる。

同年8月には「岐阜城再建目論見書」が出され、経費総額2千万円として募金を開始している(再建期成同盟会1955)。その趣意書には「灰塵と化した岐阜も足掛け十年にして漸く殷賑を取り戻しつつありますこの頃、中世の英雄織田信長が居城とした岐阜城天守閣を当時さながらに再建し・・・懐古に華を咲かせます事は・・・」と記されており、戦後復興のシンボルとしての意義が強調されている。

二代目復興天守(岐阜城天守閣)の工事着工は10月7日、落成式は昭和31年(1956)7月25日で、式典の中で岐阜城再建期成同盟会から岐阜市に寄付された。建物は鉄筋コンクリート造りの3層4階のもので、大日本土木が施工を行った。施工時に石垣内部の補強が行われて遺構

に影響を与えてしまったことは、当時は他の城郭でも行われていた工法とはいえ残念である。内部は3階までは史料展示室、4階は展望台となっており、長良川や岐阜市街を一望することが出来る。

5. 平成の大改修

再建の翌年には天守を照らす照明が設置され、夜間にも見る事が出来るようになった。また平成9年（1997）には、平成の大改修として瓦の葺き替えや外壁の修理等が行われており、瓦を山上に運ぶ市民参加型のイベントも行われた。現在二代目復興天守（岐阜城天守閣）の入場者数は年間約20万人で、再建以来令和2年度末までに1500万人を超える入場者が訪れている。

6. おわりに

復興天守はいずれも郷土の英雄を偲ぶ目的で作られ、再建の際には戦後復興のシンボルとしての側面も強いことがうかがえる。そして建設以来、復興天守は金華山と一体で街のシンボルになっており、現在に至るまで多くの人々に親しまれてきた経緯がある。

現在の研究水準からみると建物の外観には問題点もあるが、いずれの復興天守も現地調査や分析を行い、当時の研究水準で検討がなされたうえで建設されている点は無視できない。

【引用文献】

高橋方紀 2012 「模擬天守の調査」『史跡岐阜城跡保存管理計画書』岐阜市・岐阜市教育委員会

【参考文献】

城戸 久 1937 「美濃岐阜城建築論」『名古屋高等工業学校学術報告第3号』

城戸武男建築事務所 1955 『岐阜城天守再建設計図』

岐阜城再建期成同盟会 1955 『岐阜城再建目論見書』

第2節 復興天守の眺望に関する調査

復興天守の眺望に関しては、長良川中流域における岐阜の文化的景観の調査において、京都工芸繊維大学清水重敦氏によって行われた調査がある。本節では「長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書」掲載の論文を一部抜粋して引用する。

1. 座敷の増改築と復興天守への眺望

濃尾震災後再建の町家の主座敷は、1階奥に置かれることが一般的であった。この傾向は明治末年以降に町家が本2階化していくとともに変化し、2階に本座敷が置かれる事例が目立ってくる。本2階建てとして新築された町家だけでなく、離れを増築した例、あるいは2階を改造し棟高を上げて本2階建とした町家でも同様の傾向がうかがえる。

この2階座敷は、家によって表、奥、離れと、置かれる位置が異なっており、一見、ルールなく各家が好きな位置に座敷を構えただけのように見える。しかし、ここには共通した特性が見られる。座敷からの眺望である。いずれの座敷からも、ほぼ決まって、金華山が、さらに言えば山頂の復興天守（模擬城）が望めるのである。

川原町では、通りの南側の家屋からは、主屋裏手2階から金華山を望むことができる。北側の家ではそれが適わず、敷地奥に離れを増築し、その2階に「応接間」を設けて金華山の眺望を確保した家もある。旧城下町地区では、敷地の広い家屋では金華山の眺望の得られる位置を選んで離れ座敷が構えられている。南北の通りに面する町家では、通りの東側の家では主屋裏手に、西側の家では主屋表側に座敷が構えられる。明らかに、金華山の眺望を、座敷の景として取り込もうとした意図が感じられる。

これらの2階座敷、離れ座敷は、建設時期にも一定の共通性がみられる。大正から昭和初期にかけて、新築、増築、改築されたものがほとんどである。この時期に、金華山への眺望を座敷に取り込むことが岐阜町中で流行したことが、調査の結果浮かび上がったことになる。この時期に金華山への眺望が欲された理由とは何であろうか。それは、復興天守の建設である。明治43年、市民の寄付により、現在の天守の一代前の復興天守（模擬城）が木造で建設された。

内部が作り込まれない、外観だけの天守であったが、実は、この天守は明治時代以降に数々建てられた模擬天守・復興天守のうち、最も早い時期に建てられたものであった。この復興を成し遂げた岐阜町民の誇りが並一通りのものでなかったことは言うまでもない。岐阜町の町家で大正期以降に座敷が増改築されていったのは、この誇るべき天守への畏敬の念ゆえにほかならない。

金華山に復興天守が建設されたことにより、都市に視覚上の焦点が生まれ、そこに向けて家屋の形態が一つ一つ変化していった。都市の外観上はそれほど目立たない変化ではあっても、住民の認識の中で、都市に一つの新たな軸が生まれたということができよう。復興天守の建設は、岐阜町の都市景観を認識レベルで刷新したものとして高く評価されるべきものといえる。

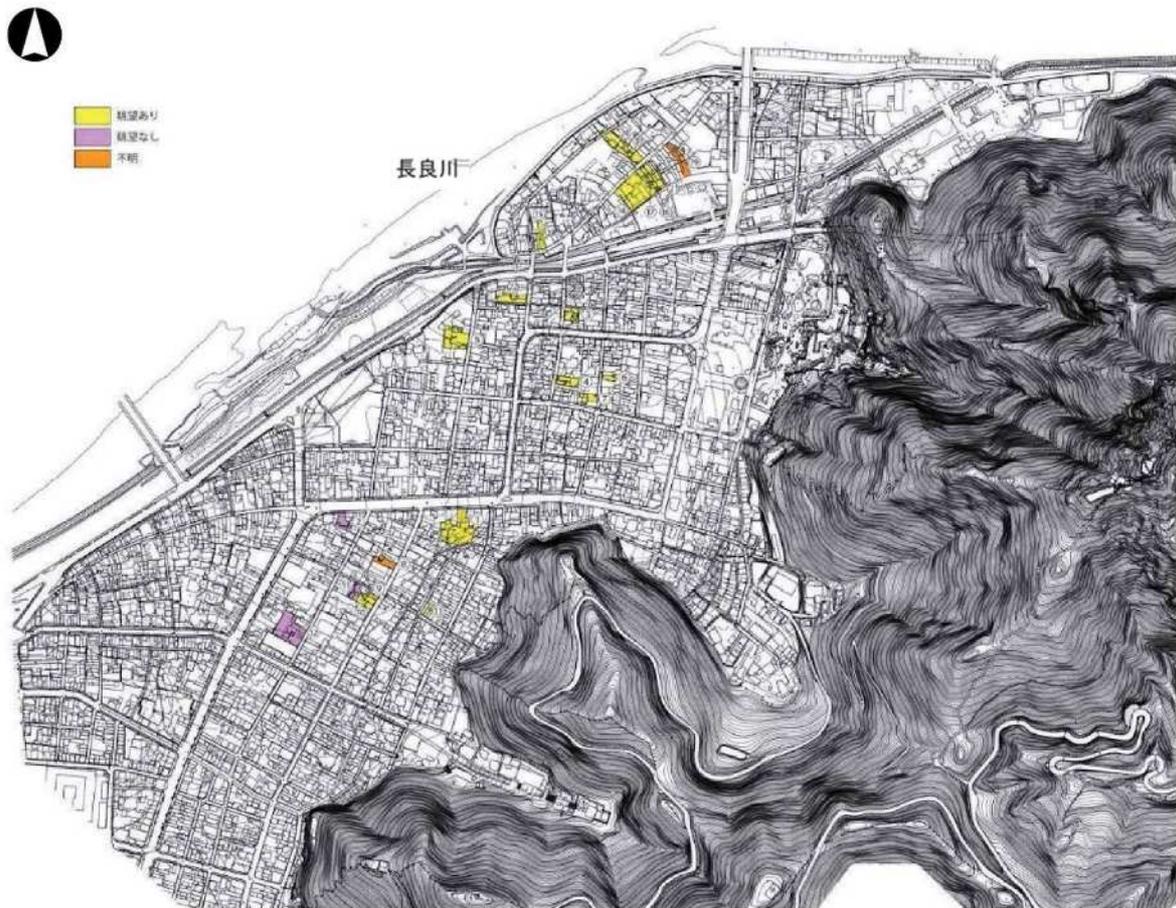


図 4-1 岐阜町の町屋から金華山への眺望

2. 金華山の眺望への強い意識：金華山と岐阜町

金華山への眺望は、岐阜町においては常に意識されてきたことだったのであろう。今回の調査により、明治43年の復興天守建設を契機に、眺望への意識が全町を通じて高められたことが浮かび上がった。

現在の復興天守は2代目のものであるが、初代は日本で初めて、しかも市民の寄付によって建てられたものであり、歴史的価値も地域的価値も小さからぬものがある。岐阜町を文化的景観としてとらえたとき、復興天守は象徴的存在として極めて大きな意味を持つ。そして、そこへの眺望を得るということは、現在においても岐阜町のアイデンティティの一角をなすものであるように思われる。

大正から昭和初期にかけて、長良川を挟んで両岸に旅館が建ち並んだ。これは長良川が物流の動脈であった役割を減じ、眺められる対象となっていくことを示すものである。この変化も、金華山における復興天守の建設と連動するものであり、近代における岐阜の都市的特性をよく示している。

3. 岐阜町の伝統的家屋と都市構造

岐阜町は縦町と横町が複雑に組み合わせられてできあがっている町である。一般的な近世城下町であれば、縦町ないし横町のいずれかが主となり、都市軸を明瞭に規定している。しかし、

第4章 岐阜城復興天守の経緯と展望

岐阜町では、等に、西材木町 - 久屋町の通りと東西筋が交わる一帯は、南北町と東西町とがヒエラルキーなく拮抗している。結果、京都の両側町のごとき町場が形成されており、城下町起源の町としては特異な空間構造を生んでいる。

岐阜における縦町と横町は、すなわち金華山と長良川に置き換えることができる。横町(南北筋)は、長良川を利用した流通との関係、あるいは加納、江戸への交通。縦町(東西筋)は、斎藤道三、織田信長による稲葉山(金華山)という権力の中心を視覚的焦点とした町づくりとの関係において存在する。

岐阜町は、この横町と縦町、すなわち金華山と長良川への意識が、交互に主従を入れ替えながら発展してきた町、ととらえることができる。縦糸、横糸が各時代に交互に編み込まれて、今の岐阜町が形成されている。この視点から岐阜城下町の歴史を以下のように再読することを提案したい。

- ・ 中世井口 : 長良川水運を主とした水上・陸上交通の結節点(横町)。
- ・ 斎藤家、織田家城下町 : 稲葉山城 - 岐阜城へのヴィスタを効かせた縦町の開削。
- ・ 近世城下町 : 金華山から長良川への町の主軸の再転換。長良川水運を活かした問屋業の発達。再び横町へ。
- ・ 濃尾震災(明治24年) : 壊滅的打撃。復興建築に埋め尽くされ、逆に新たな発展の素地となる。
- ・ 大正～昭和初期 : 岐阜公園の開園、岐阜城復興天守完成(明治43年)以降、市民の目が再び金華山に向く。復興町屋の2階高さを上げ、金華山を望む座敷をつくる。
- ・ 一方で鉄道敷設により交通が水運から陸運に転換。意識が川から離れていく。
- ・ 紡績工場の進出により、繭糸屑物商が隆盛。これも長良川離れを加速。
- ・ 長良川は、鶺鴒観覧を目的とした観光地へ転換。市民との関係が変貌。
- ・ 戦後 : 岐阜町の産業の他地区への移転。旧城下町地区の住宅地化。
- ・ 現在 : 信長居館跡の整備による、金華山への意識の再生。

金華山と長良川への意識を交互に繰り返した結果としての現在の岐阜町は、いわば円熟期を迎えている。しかし、この視点を再び意識化することで、岐阜町の将来展望が開けるように思われる。すなわち、一つは、金華山への眺望の確保を再び意識化することである。景観コントロールの上で、伝統的家屋からの金華山への眺望を確保することをシステムに込んでいくことなどが考えられよう。また、復興天守の価値についても再評価が必要である。岐阜町では、復興天守の建設後、町の意識が金華山に向き、家屋の姿にも反映していった。現在の天守は2代目であるが、岐阜町にとって本質的な価値を持ち続けている。

もう一つは、長良川と市民の直接的な関係を再生することである。水運が陸運に取って代わってから、長良川は岐阜町に寄り添う川ではあっても、市民との関係は間接的なものとなった。長良川との関係をまちづくりの中に一層取り込んでいく試みがなされるべきであろう。

【引用文献】

清水重敦 2015 「伝統的家屋から見た岐阜町の文化的景観」『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書』岐阜市教育委員会

第3節 復興天守の役割と今後の在り方について

1. 復興天守の概要

慶長5年(1600)の落城後、江戸時代を通じて岐阜城に城郭施設が造られることは無かったが、明治43年(1910)、岐阜保勝会により初代復興天守(模擬城)が築城される。それに伴い、濃尾震災後再建された旧岐阜町の町屋において、天守を望むことができる2階に本座敷が置かれる事例が増加するなど、住民の認識の中で都市に一つの新たな軸が生まれた(清水2015)。

この初代復興天守(模擬城)は明治時代以降に建てられた模擬天守・復興天守のうち最も早い時期のものといわれている。清水重敦氏は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が実施した調査を基に、町屋からの眺望に関する価値や、伝統的家屋から見た岐阜町の文化的景観の特質をまとめた(清水2015)。またその成果を踏まえ「復興天守」の呼称を提言、以降、使用されるようになった(岐阜市教委2013)。だが、建物そのものについては、絵葉書等の写真資料が知られているのみで(岐阜市博1999、岐阜市2012)、本格的な調査・研究は行われていない。

昭和18年(1943)、初代復興天守は失火により焼失する。天守を失った衝撃は市民にとっても大きく、当時の新聞からは直後から多数の嘆願や寄付、労働奉仕の申し出など、各所で再建に向けた動きがうかがえるが、戦時中でもあり断念された(高橋2012a)。

戦後には街の復興と重ね合わせるように、コンクリート製の天守が各地で建設されるが、岐阜市でも、街のシンボルを再建しようと昭和30年(1955)に岐阜城再建期成同盟会が組織され、市民の浄財により昭和31年(1956)に2代目復興天守(岐阜城天守閣)が建設された。

なお、岐阜城天守の研究については、城戸久氏(当時名古屋高等工業学校助教授、のちに名古屋工業大学名誉教授)が昭和12年(1937)に発表した「美濃岐阜城建築論」が唯一のものである(城戸1937)。城戸氏は、岐阜城から移築されたと伝えられる加納城二の丸御三階櫓の図面をはじめとした絵図類や文献、遺構、他の城郭との比較により、推定復原図を提示した。2代目復興天守の設計は、この研究をベースに城戸氏自身が行っており、当時の研究水準で検討がなされたうえで建設されていることは注目される(城戸事務所1955)。しかし現在から見ると、復元の質を確保する上で十分な史資料に基づいているとはいえず、戦国時代当時の外観を忠実に示しているとは言い難い。

2代目復興天守の内部は展示施設になっており、最上階からは四方の眺めを楽しむことができる。平成9年(1997)には、平成の大改修として瓦の葺き替えや外壁の修理等が行われており、その際には瓦を山上に運ぶ市民参加型のイベントも行われた。金華山や天守は、学校の校歌等にも歌われるなど、建物を含んだ景観が金華山の景観として市民に認知されている。また再建以来、令和2年度末の段階で1,500万人を超える入場者が訪れていることからわかるように、市を代表する観光施設、地域のシンボルとして親しまれている。

以上、岐阜城復興天守の歴史的経緯を概観した。全国の城郭の現存天守や復興天守が、城の認知や市民のアイデンティティに深くつながっていることは言うまでもないが、復興天守が日本の都市史、思想史、近現代史の中で果たした役割等についての研究はまだまだ見られない。また、城郭が機能していた時期に天守が建て替えられた事例は少なくないが、その延長上の建て替え施設という観点からの復興天守の評価についても検討の余地がある。いずれにせよ、復興天守の本格的な研究はこれからであるといえるだろう。

2. 史跡の上に建つ建築物としての役割

初代及び2代目復興天守が築かれた地点は、江戸時代の絵図等に一貫して「天守」、もしくは「天守臺」と記載されている場所である。

近年の発掘調査では、復興天守西側において、信長期とみられる軒丸・軒平瓦と2段の石垣が確認されており、信長在城時に天守に相当する建物が存在したと考えられる。また江戸時代の地誌『美濃明細記』では池田輝政により天守が造られたと伝えられており、実際に池田期とみられる軒平瓦が見つまっていることから、このころに改修が行われた可能性が高い。さらに、その前段階の後斎藤期にも山上部の中心となる建物が造られた可能性がある(岐阜市 2021)。慶長5年(1600)の落城後、建物等は移築されたと伝わるが、「稲葉城趾之図」には石垣が高さの寸法とともに描かれており、天守台石垣は残存していたとみられる。だが、初代復興天守建設時に石垣の大部分が改修されており、この時に遺構に大きな影響を与えたことが判明している。その後も何度か部分的な改修が行われ現在に至るが、岐阜城の中心として天守台が認知され、受け継がれてきたことは重要であると考えられる(森村 2021)。

現在の鉄筋コンクリート造の2代目復興天守は、このような場所の上、そして変遷の延長上に造られた建物である。文化庁文化審議会が示す『史跡等における歴史的建造物の復元基準』が定義する「復元」に合致する建物とは言えないが(文化審議会 2020)、城戸氏の研究により意匠や形態等の検討がなされたうえで、「織田信長が居城とした岐阜城天守閣を当時さながらに再建」することを目的に建設されており(再建期成同盟会 1955)、当時の水準で復元的整備が行われた建物と評価できる。

建設以降、復興天守はその存在を視覚的に示すことで、城跡としての岐阜城の存在を伝えてきた。延床面積 383.42 m²を測る建物内部は、1階から3階が岐阜城の歴史を紹介する展示、最上階の4階が周囲を360度見渡すことができる展望台となっており、年間約25万人が訪れる岐阜市観光の中核施設となっている。

復興天守は、岐阜城跡の「城としての認知」のほか、「資料館」、「展望施設」、「観光施設」、そして「金華山と一体の景観」、「地域のシンボル」としての機能・役割も担い、史跡の理解に一定の役割を果たしてきたと捉えることができる。

3. 文化的景観の重要な構成要素としての役割

文化的景観の調査では、岐阜町の家屋調査から、大正から昭和初期に初代復興天守を望むことができる2階に本座敷が置かれる事例が増加することを明らかにし、象徴的存在、岐阜町のアイデンティティとしての「町から天守への眺望」が価値付けされた(清水 2015)。調査結果を受けて、現在の鉄筋コンクリート造の2代目復興天守が文化的景観の重要な構成要素と位置付けられたが、これは初代復興天守が果たした役割を、2代目復興天守が引き継いでいると評価されたからである。

『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存計画書』(岐阜市教委 2013)では、保存すべき事項として「建築物の外観」、「建築物の位置」、「資料館としての機能」を挙げているが、このように文化的景観の価値は町から見える復興天守の姿を重視するものであり、その意味において、仮に建物が建て替えられたとしても、遠方からの景観が大きく変わらなければ、その本質的価値

は継承されると捉えることができる。

なお、初代復興天守建設の翌年以降、本田静六氏、長岡安平氏が関わって岐阜公園再整備が行われるが、「金華山より権現山、瑞龍寺山一帯を市の公園となすべく計画(岐阜日日新聞明治 45 年 5 月 22 日)」とあるように、その対象は金華山全体に及んでいる(高橋 2012b)。全体計画がどのようなものであったか、どこまで実施されたのか明確ではないが、大正期に行われた金華山の整備・観光地化も、復興天守と合わせて景観認知や市民意識に大きな影響を与えた可能性が高い。今後もこのような調査の進展によって、新たな価値が明らかになっていくものと考えられる。

4. 史跡及び文化的景観におけるこれからの役割と位置付け

2 代目復興天守は、岐阜城の歴史や場所性、景観、設置の経緯、市民意識等、様々な意味で特別な建物として市民に認知されており、展示・展望施設として史跡の理解にも貢献してきた。平成 27 年度には日本遺産「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜の構成文化財としても認定されている。一方、外観の復元検討が十分でないことや遺構に与えた影響から、前回の保存管理計画策定の際には、復興天守を「その他の要素」に位置付けた(岐阜市 2012)。

しかし、その後の文化的景観の調査成果や、本章で示した史跡の上に立つ建物として果たしてきた役割の整理、令和 2 年 6 月に取りまとめられた『鉄筋コンクリート造天守等の老朽化への対応について』(史跡ワーキンググループ 2020)を踏まえると、復興天守は史跡の活用にも有効と評価することが妥当であると考えられる。なお、復興天守が史跡の本質的価値に与える影響については、今後も調査を進める必要がある。

上記のことを踏まえ、復興天守は、文化的景観保存計画で保存すべき事項として示している建築物の外観、建築物の位置、資料館としての機能を維持しつつ、他のガイダンス施設との役割分担を整理した上で、展示・展望台施設として位置付ける。また、現在の鉄筋コンクリート造天守の長寿命化を行うこととし、安全性の確保、適切な維持管理・更新によって、史跡を理解する施設としての機能向上を図る。

5. 保存・活用の手法

(1) 建物の安全性・維持管理

平成 30 年度に行った 2 代目復興天守の耐震診断の結果、耐震性を満たしていない階層があることが判明した。これを受け、令和 2 年度から令和 3 年度にかけ、岐阜城天守閣耐震化検討委員会において具体的な整備方針の検討を行うこととしている。検討を行うにあたっては、文化庁の『鉄筋コンクリート造天守等の老朽化への対応について』(史跡ワーキンググループ 2020)の考えを踏まえ、かつ、以下の点に配慮しながら整備方法等を検討するものとする。

① 石垣等遺構の保護

建物基礎となる天守台石垣の一部には戦国時代の石垣が確認されている。これらの石垣や周辺の岩盤等自然地形に影響を与えないものとする。

② 外観の保全

築城から 60 年余り経過した復興天守が町のシンボルと認知されていることや、文化的景観の価値である町から見える復興天守の姿に十分配慮し、極力外観を維持するものとする。

③眺望の保全

山上部施設からの眺望に関する文献記録や、望楼として山上から周囲を俯瞰できる現在の機能を踏まえ、この眺望を活かしたものとする。

(2) 史跡を理解する施設としての機能向上

岐阜城復興天守とその展示機能を補完する岐阜城資料館、山麓に建設が計画されているガイダンス施設、歴史博物館等の史跡内外の施設の役割を明確化し、連携することによって、回遊性を向上させ、全国に誇る歴史遺産・観光資源の魅力の発信を目指す。復興天守は、その眺望を活かして全体を俯瞰した解説を中心とした施設として位置づける。

6. 今後の課題

史跡における鉄筋コンクリート造天守の評価は時代により大きく変遷しており、いまだ定まっていない。その在り方についても、令和3年6月に初めて国が老朽化への対応について取りまとめるなど、ようやく本格的な議論が始まったところである(史跡ワーキンググループ2020)。

岐阜城跡の2代目復興天守の将来の在り方についても、上記の議論の他、日本の都市史、思想史、近現代史の中で果たした役割や城郭復元の歴史の中で果たした役割についての評価、復元的整備建物としての評価、史跡内に建つ建物の在り方に関する議論、コンクリート建物の評価方法、史跡との整合性の在り方など、整理する課題が多くある。当面の間実施する長寿命化対策にあたっては、外観等の保全を図ることで、上記のような課題にも一定の配慮を行うものとする。

また、復興天守の長寿命化を図ったとしてもさらなる劣化や災害等によって、将来、維持できなくなる場合も考えられる。コンクリート造天守に関する議論の進展や建物の価値の検討、新たな建物長寿命化技術の開発状況、社会情勢等を見据えながら、建て替え等の是非も含めたあらゆる選択肢についての情報収集・調査研究を今後も継続していくことが肝要である。

【参考文献】

- 城戸 久 1937 「美濃岐阜城建築論」『名古屋高等工業学校学術報告第3号』
- 城戸武男建築事務所 1955 『岐阜城天守再建設計図』
- 岐阜城再建期成同盟会 1955 『岐阜城再建目論見書』
- 岐阜市歴史博物館 1999 『館蔵品図録「絵はがき」』
- 岐阜市・岐阜市教育委員会 2012 『史跡岐阜城跡保存管理計画書』
- 高橋方紀 2012a 「模擬天守の調査」『史跡岐阜城跡保存管理計画書』岐阜市・岐阜市教育委員会
(本書第4章第1節に掲載)
- 高橋方紀 2012b 「岐阜公園の調査」『史跡岐阜城跡保存管理計画書』岐阜市・岐阜市教育委員会
(本書第3章第5節に掲載)
- 岐阜市教育委員会 2013 『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存計画書』
- 清水重敦 2015 「伝統的家屋から見た岐阜町の文化的景観」『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書』岐阜市教育委員会 (本書第4章第2節に一部抜粋して掲載)
- 文化審議会文化財分科会 2020 『史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準』
- 史跡等における歴史的建造物の復元の在り方に関するワーキンググループ 2020
『鉄筋コンクリート造天守等の老朽化への対応について(取りまとめ)』
- 岐阜市 2021 『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』
- 森村知幸 2021 「天守台石垣の調査」『史跡岐阜城跡保存活用計画書』岐阜市 (本書第3章第1節8に掲載)

第5章 岐阜城跡の本質的価値

第1節 岐阜城跡の価値

第3章において岐阜城跡に関する各種調査成果の概要をまとめたが、そこから岐阜城跡の価値を以下のように整理した。

1. 岐阜城跡の本質的価値

岐阜城跡は織田信長が天下統一の拠点とした城として特に知られている。さらに、近年の発掘調査や分布調査により後斎藤氏の稲葉山城を踏襲しながら信長期以降に大改修を行ったことや本能寺の変以降も池田輝政や豊臣秀勝、織田秀信によって改修されながらも受け継がれてきたことが明らかになりつつある。また、文献史料や絵図の調査によって岐阜城に関する政治史や、当時の岐阜城や城下町の整備・変遷の一端が明らかになってきた。また、文化的景観の調査では16世紀に整備された城下町は長良川水運による物資流通などにより近世、近代を通じて発展し、現代の岐阜市の礎となっていることも明らかにされており、今後の調査でさらに価値が高まるものと考えられる。

そこで第3章で整理したこれまでの調査成果をもとに、天守、石垣などの特徴ごとに16世紀の岐阜城の変遷を表5-1に整理すると、岐阜城跡の特性は16世紀の城郭遺構や記録が重層している点にあることが分かってきた。

以上を踏まえ、岐阜城跡の本質的価値を以下のとおり示した。

岐阜城跡の本質的価値

- 織田信長が天下統一の拠点とし、金箔瓦や天守などの新たな要素が取り入れられた中世の城郭から近世の城郭への転換点にあたる城郭
- 16世紀の城郭遺構が重層しており、守護・戦国大名クラスの山城の変遷や構造を考える上で重要な位置にある城郭
- 巨石の多用、岩盤や谷川の加工・修景など、複数の異なる意匠を融合し造られた巨大な庭園空間を有し、その後の城郭庭園にも影響を与えた城郭
- 当時の様子が詳細に記された複数の文献記録が残り、発掘調査成果と合わせることで、より鮮明に当時の姿を顕在化できる城郭

表 5-1 16世紀岐阜城の変遷

	天守	石垣	瓦	庭園	城下町	全体
<p>後斎藤期 (1539頃～1567)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・山上に御殿のような建物を築いたとされる 	<ul style="list-style-type: none"> ・金華山各所に石垣を築く ・山上の門に巨石石垣が築かれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・山麓部で棟瓦が出土している 	<ul style="list-style-type: none"> ・山麓居館に庭園が整備される 	<ul style="list-style-type: none"> ・総構を持つ井口城下町を整備する 	<ul style="list-style-type: none"> ・信仰の地であった金華山や山麓部を城郭に利用する ・千畳敷の山麓居館と山上部の城郭施設
<p>信長・信忠期 (1567～1582)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・天守に相当する建物が建てられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・山麓居館の出入り口や庭園の背景に石垣や巨石石垣が築かれる ・山上部の中枢部を大改修し、石垣を築く 	<ul style="list-style-type: none"> ・山麓居館の建物に金箔棟板瓦が使用される ・天守に相当する建物に瓦が使用される 	<ul style="list-style-type: none"> ・後斎藤氏の庭園を受け継ぎながら、現在の地形に改修される ・谷川や岩盤を加工、修景して庭園に取り入れ、巨大な庭園空間を造り出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・名称を「岐阜」に改め、城下町を拡張する ・経済特区である材木町を造る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルイス・フロイス、山科言繼などの来訪者の記録が残る ・千畳敷・赤ヶ洞の山麓居館 ・中腹部・山上部の城郭施設
<p>本能寺の変以降 (1582～1600)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・池田輝政により天守が改修される 	<ul style="list-style-type: none"> ・池田輝政により天守台石垣の一部が改修される ・天守の東側に石垣を築き平坦地を造る 	<ul style="list-style-type: none"> ・池田輝政により天守の瓦が改修される ・豊臣秀勝、織田秀信により山麓居館の瓦が改修される 	<ul style="list-style-type: none"> ・山麓居館が改修される 	<ul style="list-style-type: none"> ・城下町の一部が改修される 	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉政権による城郭整備 ・関ヶ原合戦の前哨戦の舞台となる

2. 岐阜城跡と密接に関わる価値

岐阜城跡には城郭の価値以外にも、史跡指定地内外において密接に関わる価値が内包されている。

斎藤道三による築城以前の金華山は景勝地や信仰の山として知られており、この地に城が築かれる素地となったとみられる。つまり、豊かな自然をベースに形成された古来よりの景勝地や信仰対象等特別な山であったからこそ、戦国時代に至って城郭に利用されたと考えられる。さらに金華山と長良川、町と人々が一体となって文化的景観を形成している。

また廃城後も尾張藩主の御成や鹿狩等の場として、さらに近代以降には岐阜公園と一体でレクリエーションを楽しむ憩いの山となるなど、城跡である金華山はさまざまな利用がされてきた。

このように金華山の歴史の変遷にはさまざまな背景があり、城郭以外にも様々な観点の価値がある。これらをこれまでに実施した調査成果を踏まえてまとめると「自然の価値」・「信仰の価値」・「景観の価値」・「公園の価値」に集約できる。史跡岐阜城跡の特性は、城郭をはじめとした5つの価値が重層している点にあるといえる。

岐阜城跡と密接に関わる価値

自然の価値

- ・ 海底で堆積した硬質なチャートが露出し、景観を作り出している山。
- ・ 森林資源の山。木材や燃料を得るため、人が関わり利用してきた山。
- ・ 都市の中の極相林、ツブラジイの山(明治以降)。

信仰の価値

- ・ 山自体が信仰の対象。
- ・ 原始から中世にかけての墓域。
- ・ 寺院に関する宗教施設の存在。
- ・ 伊奈波神社旧社地。斎藤道三による移転の伝承。
- ・ 移転後も信仰の対象であり続けた。

景観の価値

- ・ 中世以降、現在に至るまで景勝地として認知された山。
- ・ 各時代を通じて仰ぎ見られた山。ランドマーク。
- ・ 四方を見渡せる金華山上からの眺望。
- ・ 金華山と長良川、町と人々が一体となった文化的景観。
- ・ 江戸時代以降、城跡として守られ街のシンボルとなる。

公園の価値

- ・ 中世の城主居館跡を核として成立した岐阜市のセントラルパーク。
- ・ 大正期の公園設計に著名な造園家関わる。
- ・ 様々な機能を付加・削除しながら維持されてきた公園。

時期区分	史跡岐阜城跡の本質的価値、密接にかかわる価値					土地利用
	自然	信仰	景観	城郭	公園	
時期区分	森動地 林物形 ・ 資植地 源物質	信 仰 の 山	景 勝 地 の 山	岐 稲 葉 阜 山 城 城	憩 い の 山	
古墳時代		墓域				・瑞龍寺山頂遺跡 ・千疊敷古墳 ・上加納山古墳群等
奈良・平安時代						・岐阜城千疊敷遺跡
鎌倉・室町時代		神社域	和歌			・伊奈波神社に関する宗教施設 ・日野不動洞遺跡 ・歌に詠まれる山
戦国時代	アカマツ林 石材			城郭		・稲葉山城、岐阜城
江戸時代	狩り		俳句 絵画 鶺鴒の借景	城跡		・尾張藩の御山（立入禁止） ・絵画に描かれる山 ・鶺鴒の借景
明治・大正時代	シイ・カシ林		天守が見える 景観	復興初代 天守	散策・ハイキング等 岐阜公園と一体化	・散策・眺望を楽しむ山 ・天守が見えるよう町屋を改築 ・鶺鴒の篝火松供給
昭和・平成時代			校歌	復興二代目 天守		・都市における極相林 ・ツブラジイの山

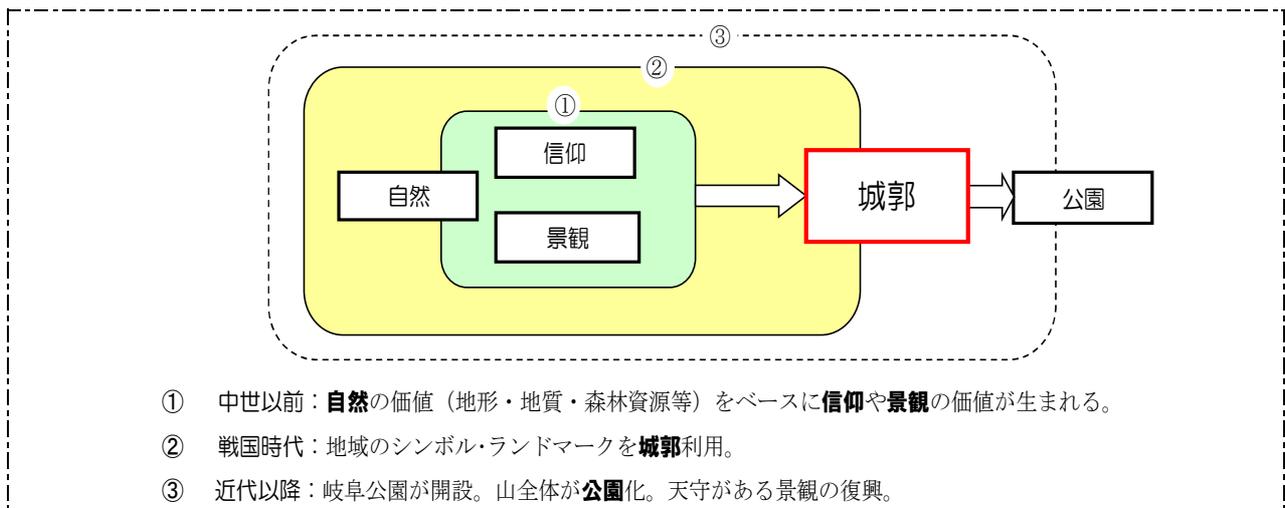


図 5-1 岐阜城跡に関わる価値の時代的変遷

第2節 史跡を構成する要素の分類

保存活用を適切に行うためには、史跡の構成要素を抽出し、分類・整理する必要がある。史跡の構成要素を以下の4つに分類し、その詳細を以下の通り示した。

A：地上に露出あるいは地下に埋蔵されている遺跡

戦国時代の石垣・巨石石垣、庭園関係遺構、堀切、豎堀などの岐阜城跡の本質的価値を構成する枢要の諸要素

B：絵図に描かれ、現在も受け継がれているAと一体をなす地形及び地物

チャートの岩盤、谷、洞、尾根など、遺構と一体で本質的価値を構成する枢要の諸要素

C：史跡の保存・活用に有効な要素

治山施設等の保存に関する施設、また登山道、復興天守、岐阜城資料館、説明板など史跡の活用に関する施設

D：その他の要素

コンクリート塀、三重塔、歌碑・記念碑など、史跡の保存・活用に直接関係しない施設

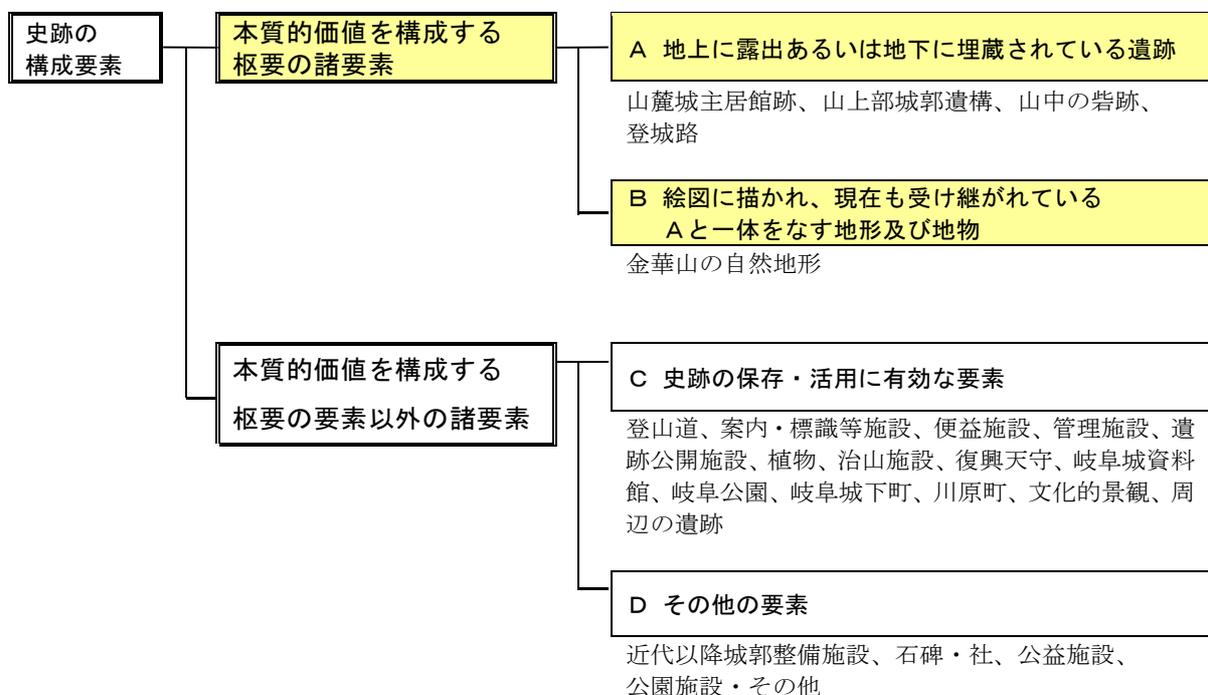


図 5-2 岐阜城跡における史跡の構成要素

表 5-2 A. 地上に露出あるいは地下に埋蔵されている遺跡（1）

区 分	概 要
山麓部城主居館跡	<p>山麓部には道三・信長をはじめとした城主の居館跡があったと伝えられており、発掘調査によりその全体像の解明が進んでいる。当該地は槻谷（けやきだに）をはさんで段々地形となっており、その平坦地に居館と付属施設が展開していたと考えられる。永禄10年（1567）以降慶長5年（1600）までと考えられる遺構としては、建物や門の基礎、庭園遺構、通路、水路等がある。各平坦地は石垣や巨石石垣により区画されている。全体的に「見せる」ことが意識されており、地下の遺構だけでなく谷川や周囲の自然地形を含んだ全体の景観やこの場所からの眺望が重要な要素となっている。下層では斎藤段階と考えられる遺構を部分的に確認しているが、当該期の居館構造は把握できていない。そのほか、城郭以前の宗教施設に関連する遺構や古墳が確認されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・巨石石垣—幅1～3mの大型の板状の石を立て並べた構造物であり、山麓の城主居館跡に多用されている。信長入城後に構築されたとみられ、信長段階の岐阜城を特徴付ける遺構と評価されている。被熱してもろくなっているものもあるため、保存の対策が必要である。 ・石垣—石垣石材はチャートで、裏込石にはチャートと円礫を使い分けている。破城のため上部が崩落しているものが大半で、全体が残存している箇所は少ない。被熱してもろくなっているものについては、保存の対策が必要である。 ・庭園関係遺構—石敷き（州浜を含む）や石列、水路、水溜め、景石の痕跡、石組みなどからなる池泉遺構等である。発掘調査により複数確認されている他、居館跡の中央を流れる谷川の水路も、大きな流れであった可能性がある。
山上部城郭遺構	<p>山上の平坦地は明治以降の改変や斜面の崩落が見られるが、その形状をおおむねとどめており、絵図との対比が可能である。平坦地は基本的に岩盤を成形して作り出している。遺構としては石垣、井戸跡、堀切（切通し）、塹堀等がある。平成30年度から発掘調査を実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・巨石石垣—一ノ門跡部分に倒れた状態で残存している。 ・石垣—天守台にいたる通路に見られる石垣は谷部を埋める形で、両側から石垣を積むことにより作られており、その延長は約50m、最大高さ3.5mを測る。また、分布調査や発掘調査によって山上部各所で後斎藤期や信長期以降の石垣が確認された。樹木の影響により孕みや崩落が見られる箇所もある。 ・井戸—岩盤を割り貫いて作られた貯水施設で、上台所跡の北西側に3基、南東側に1基存在する。そのうち1基は“軍用井戸”として公開されている。南東側の1基はコンクリートの井戸枠が作られており、状況を確認することができない。 ・堀切—近世絵図では「切通」となっている場所が良く知られている。岩盤を削って造られており、現在は鉄骨製の橋が架けられている。 ・塹堀—山上部を中心にいくつか存在するとみられるが、詳細な調査は行われていないため、実態は不明である。

表 5-3 A. 地上に露出あるいは地下に埋蔵されている遺跡（2）

区 分	概 要
山中の砦跡	<p>分布調査では平坦地や石垣、石垣石材の散布等が見られる箇所が確認されており、その多くが「稲葉城趾之図」に描かれる砦跡と対応する。</p> <p>大半の石垣は崩落してその形状を留めておらず、残存状況は悪い。また、調査は登山道沿いに限定して行われているため、今後さらなる遺構が見つかる可能性が高い。</p>
登城路	<p>現在の登山道のうち5本は「稲葉城趾之図」等に描かれる登城路と対応する。ただし、同様の位置を通っていても道の付け替え等で変更されている場所もあり、今までの分布調査では確実な登城路は確認ができていない。また絵図に描かれていないが、遺構が密に分布しているルート（馬の背登山道）もあり、今後の調査により明らかにしていく必要がある。</p> <p>七曲登山道や水手道は大正時代初期の公園整備の際に修理やルート変更が行われており、大正4年の観光冊子には七曲、百曲、水ノ手、達目の4本の登山道が描かれている。最も多く使われるのもこの4本である。山上部を含めた上記の道は大正9年（1920）に市道認定されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・七曲登山道－市道七曲支線。かつての七曲道に相当する。中間地点にあたる「七曲峠」より下は大正時代初期に新しい道に付け替えられている。これより上はおおむね変わっていないとみられるが、現在はコンクリートで覆われており、その様相をうかがうことができない。 ・百曲登山道－市道百曲支線。かつての百曲道に相当する。入口部分はルートが変わっている可能性が高い。 ・水手道（めい想の小径）－市道水ノ手支線北側。かつての水手道に相当する。今は丸山から登るルートとなっているが、これは大正時代初期の改変によるもので、本来は、長良川沿い（現在の鏡岩水源地）から登っていたようである。 ・鼻高ハイキングコース－『稲葉城趾之図』にも赤線で描かれているルートである。道沿いには平坦地や石垣等の遺構が分布している。 ・達目ハイキングコース－市道達目線。同様のルートが、複数の絵図に描かれている。西側には一部ドライブウェイと共用になっている箇所もあり、改変がみられる。

表 5-4 B. 絵図に描かれ、現在も受け継がれているAと一体をなす地形及び地物

区 分	概 要
金華山の自然地形	<p>岐阜城跡は自然地形を含めた全体が天然の要害として機能しており、特徴的な地形は絵図にも描かれている。</p> <p>Bの要素は金華山の地形そのものであるが、特に城主居館跡と一体を成している谷、洞、尾根、滝、岩盤や長良川の岩壁のほか、固有名詞の付いた地形（屏風岩、鏡岩、鼻高岩、等）が挙げられる。</p>

表 5-5 C. 史跡の保存・活用に有効な要素（1）

区 分	概 要
<p>登山道 保存・活用</p>	<p>明治時代以降、山全体を公園化する構想の中で登山道、ハイキングコースが設けられた。その大半は戦後に新たに設けられた道と考えられるが、遺構が密に分布している馬の背登山道については、登城路もしくは砦間の主要な動線であった可能性もある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 馬の背登山道ルート沿いには石垣や平坦地等の遺構が多く見られるが、絵図等では登城路と認識されていない。山頂への近道として認識されていたようであるが、戦前の地図には掲載されておらず、登山道として正式に認知されるのは戦後のことと思われる。急傾斜であることに加え、木の根が露出するなど最も荒れている登山道である。 東坂ハイキングコース、唐釜ハイキングコース、大参道ハイキングコース、大釜登山道－戦後、一般に使われるようになった登山道。道沿いには未確認の遺構が残存する可能性が高い。
<p>案内・標識等施設 活用</p>	<p>金華山には膨大な種類、数の説明板、案内板、標識等が挙げられる。設置者も多岐にわたり、老朽化が進んでいるものがあるなど、全体で統一がされていない状況である。平成 26 年にサイン計画を策定し、看板の整理を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明板－史跡範囲内には、大小合わせて 200 以上の説明板が設置されている。1 箇所にくつもの説明板が乱立しており、景観上問題がある。また、史実に合致しない内容のものもあり、特に郭等の名称については、軍記物の影響や創作によるものもみられ、順次撤去や修繕を行っている。山中の事故などに迅速な対応ができるよう、既存の看板に「緊急通報位置情報プレート」を設置し、安全管理体制を強化することも検討されている。 石標－大正期の道標や境界標等が挙げられる。国有林境界標の一部には、宮内省のマークが残るものもある。
<p>便益施設 活用</p>	<p>便益施設として、ベンチ、四阿等の休憩施設やトイレ、水のみ場が挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 四阿－一ノ門跡横に建てられていたもので、令和元年度に上屋の解体が行われた。令和 2 年度には発掘調査を実施し、遺構の確認を行った。 トイレ・水のみ場－山上部にそれぞれ 3 箇所設置されている。 ロープウェー施設－昭和 30 年に開設された施設である。明治時代末からの 3 度の計画を経て建設された。年間で片道延べ 50 万人が利用しており、登山の負担を軽減する施設としての役割や、山麓部や周辺を俯瞰できる展望施設としての役割がある。また、登山者の踏圧による登山道荒廃を軽減する効果もある。

表 5-6 C. 史跡の保存・活用に有効な要素 (2)

区 分	概 要
管理施設 活用	<p>来訪者の安全性を確保する目的で設置される施設で、登山道沿いに設置されている転落防止柵や照明設備が挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手すり・柵－山上部の通路に設置されている。デザインは擬木のものが主体である。山上部は転落の危険性の高い場所であるため、安全対策上必要な施設として設置されてきた。 ・照明設備－山上部や山麓部の通路に設置されている。夜間時の安全確保の用途の他、岐阜城天守閣のライトアップ照明もある。 ・水道ポンプ小屋・タンク－山上部の上水道設備として、現在の上台所跡に所在する。山麓から馬の背登山道沿いにパイプを配してくみ上げている。 ・倉庫－山上部の清掃資材を保管する倉庫。下台所跡（二の丸跡）とリス村東側の2箇所にある。 ・電柱－山上部への電気、電話線供給のために、三重塔付近から馬の背登山道脇を通して配線されている。 ・橋－山麓部のA地区とC地区にかかる橋は石製で、後に改修を受けている。明治22年の地図に描かれていることから、岐阜公園の初期からかかっていた可能性が高い。槻谷奥にかかる橋は堰堤を見学するために昭和34年ごろに造られたものである。山上部の橋は鉄骨製で、昭和63年に造られた。 ・階段－山麓部の板垣退助像横からC地区へ至る階段。現在コンクリートで整備されているが、明治22年の地図に描かれていることから、初期の岐阜公園整備によって造られたとみられる。
遺跡公開施設 活用	<p>山麓城主居館跡の1次調査後に文化財を公開するために整備された施設。整備された遺構のうち、実際に発掘された遺構以外のもの（礎石のレプリカ、新たに足した石材、掘立柱建物や土塁等の平面表示、盛土された通路等）がこれにあたる。</p>
植物 保存	<p>金華山の植生・植物等。山全体がツブラジイ・アラカシを主とした照葉樹で覆われている。近世までは絵図等に多く描かれていたアカマツ林は現在ではほとんど見られなくなっている。また北側斜面には立ち枯れしたヒノキが多く見られる。</p>
治山施設 保存	<p>災害や山地の荒廃の防止、復旧のために設置される施設である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・治山施設－金華山北斜面3箇所、西斜面1箇所、南斜面3箇所に堰堤等が設置されている。他に斜面崩落防止施設が北・西側斜面を中心に設置されている。 ・防火水槽－七曲り登山道の七曲峠付近に防火水槽が埋設されている。また、可動式の水槽が登山道沿いに45基設置されている。

表 5-7 C. 史跡の保存・活用に有効な要素 (3)

区 分	概 要
<p>復興天守 活用</p>	<p>現在の岐阜城を印象付けている施設。岐阜城では廃城後に城郭施設が造られることは無かったが、明治43年(1910)に岐阜保勝会により復興天守が築城され、以降まちのシンボルとして親しまれてきた。この復興天守は日本最初の模擬天守といわれているが、昭和18年、失火により消失している。</p> <p>戦後には街の復興と重ね合わせるように、復興天守が各地で建設される。岐阜市でも、街のシンボルを再建しようと、市民の浄財により昭和31年(1956)に二代目復興天守が建設された。</p> <p>再建復興天守の設計は、岐阜城から移築されたと伝えられる加納城御隅三階櫓の図面や古文書を参考に城戸久(名古屋工業大学教授)が行っており、当時の研究水準で検討がなされたうえで建設されていることは注目される。内部は展示施設になっており、最上階からは四方の眺めを楽しむことができる。</p> <p>岐阜市の多くの場所から仰ぎ見ることができる復興天守は、観光の拠点であると同時に地域のシンボルとなっており、復興天守を含んだ景観が金華山の景観として市民に認知されている。そしてこのような経緯をもつ復興天守は、岐阜城の認知や市民のアイデンティティーに深くつながっている。再建にあたっては土台部分の石垣内部に大掛かりな補強が行われており、遺構に影響を与えたとみられる。</p>
<p>岐阜城資料館 活用</p>	<p>昭和50年(1975)に民間企業が建設し、岐阜市へ寄付した施設。内部は展示施設となっている。初代復興天守が立っていたころには、この場所に「岐阜古城址之碑」という鉄塔が建っていた。周囲は調査を行っておらず、平坦地本来の用途は不明である。</p>
<p>岐阜公園 活用</p>	<p>明治15年(1882)6月に請願、同年8月18日に認可される。明治19年(1886)から本格的な整備が行われ、明治21年(1888)に開園式が行われた。山麓居館の発掘調査を機に、平成8年度の岐阜市第4次総合計画において「信長をテーマに整備拡充を推進する」として歴史公園の位置づけが初めてなされた。平成18年(2006)には「日本の歴史公園100選」に選ばれ、平成30年度には年間約104万人が訪れている。</p>
<p>岐阜城下町 活用</p>	<p>戦国時代に歴代城主により整備・改修が行われ、領国経営の拠点となった。城下町内において道路網、武家地、寺社地、町人地などが計画的に配置され、それらを堀と土塁で囲むという総構えによる都市構造は、現代においても色濃く継承されている。</p>
<p>川原町 活用</p>	<p>旧城下町地区と堤防を隔てた扇状地谷口の堤外地に位置する。信長は本地区の舟木座に特権を認め、近世には尾張藩の川役所が置かれ、長良川上流からの流通を掌握した。また、北方の山県郡や越前国を繋ぐ高富街道の渡河点でもあり、飛騨や美濃北方からの流通・往来の窓口となった。現在も往時の繁栄を伝える伝統的家屋の町並みが継承されている。</p>

表 5-8 C. 史跡の保存・活用に有効な要素（4）

区 分	概 要
文化的景観 活用	「長良川中流域における岐阜の文化的景観」が国重要文化的景観に選定され、長良川、金華山、旧城下町、川原町、鶉飼屋の5地区、331.9haが対象地域となっている。重要な構成要素は104件あり、そのうち62件は御鯨街道や旧城下町などの街路となっている。
周辺の遺跡 活用	史跡指定地周辺の遺跡では埋蔵文化財包蔵地としての「岐阜城跡」や古墳群などがある。開発に伴う試掘調査や立会いを行い、遺跡の内容確認を行っている。また、岐阜公園、岐阜城下町、川原町も周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。

表 5-9 D. その他の要素（1）

区 分	概 要
近代以降 城郭整備施設	<p>明治以降に整備された施設で、山上部には門、塀等が、山麓部には冠木門が整備されている。岐阜城資料館や塀、二の丸門は昭和48年（1973）に放映されたNHK大河ドラマ「国盗り物語」の影響を受け新たに造られたもので、より観光施設としての色彩が強い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・門—山上部の二の丸門はコンクリート製で、「国盗り物語」後に造られた。山麓部と山上部の冠木門は木製で、史跡整備が行われた昭和63年（1988）に合わせ、観光目的で設置された。いずれも設置にあたって歴史的な調査や検証を経ていない。山上部の冠木門は令和2年度に補修が行われリニューアルされた。 ・塀—コンクリート製のもので、目隠し及び転落防止の役割として設置されている。白壁の土塀をイメージしたデザインとなっている。
石碑・社	<p>記念碑、歌碑等、多数の石碑が史跡内に設置されている。その他、山麓部には三重塔、山上部には御嶽神社、閻魔堂等の施設が点在している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三重塔—大正6年（1917）に大正天皇の御大典記念として作られた塔。画家の川合玉堂が場所を選定し、長良橋の古材を用いて造られた。設計は伊藤忠太で、岐阜公園の名所として親しまれている。現在は国登録有形文化財。 ・金華山御嶽神社—もとは山麓の中教院にあったといわれており、中教院が移転する大正7年（1918）に山頂に移転した。七曲登山道入口には御嶽神社参道を示す石碑が設置されている。中教院移転時には金比羅神社も丸山山頂に移転したが、現在は建物基礎が残るのみである。 ・閻魔坐像収蔵庫（閻魔堂）—もともと川手にあった木造閻魔王坐像を安置する収蔵庫。収蔵庫は昭和51年（1976）に下台所跡（二の丸跡）に建設、岐阜市に寄付された。坐像は市重要文化財となっている。金華山福閻魔奉賛会が維持管理しており、年2回例大祭を実施している。 ・社・石造物—題目塚は大正期の可能性があるが、それ以外の社や地蔵等はいずれも戦後に造られたものとみられる。

表 5-10 D. その他の要素（2）

区 分	概 要
石碑・社	<ul style="list-style-type: none"> ・歌碑・記念碑－山麓に 12 基、山頂に 3 基ある。大きく明治～大正期と戦後の 2 時期に分けられる。
公益施設	<p>金華山は遠くまで見通しの利く位置に立地するため、山上部には無線中継所や鉄塔など、公益上必要な施設が建てられている。金華山ドライブウェイ等の道路もここに位置づけている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無線中継所－防災や治安維持、放送等、さまざまな目的で無線中継所が複数設置されている。それぞれ下呂や揖斐、名古屋方面へと電波を中継しているが、周辺の山では代替が利かない状況にある。狼煙など城が持つ情報伝達機能を継承している施設ともいえる。 ・金華山ドライブウェイ－七曲り登山道入口付近から瑞龍寺山頂を経て岩戸公園へ至る無料のドライブウェイで、昭和 38 年（1963）に開通した。一部が史跡範囲で、工事により地形の改変を受けている。 ・県道上白金真砂線－史跡の北端を通る一般道である。昭和 63 年（1988）には金華山トンネルが開通している。道の上部は急傾斜地であるため、ロックネット等による安全対策が施されている。工事によって岸壁の地形が改変を受けている。
その他の施設	<p>明治時代以降、山全体を公園化する中で設置された施設。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展望レストラン－昭和 30 年（1955）にロープウェイとともにできた施設。太鼓櫓跡と伝えられる場所に立地している。山上部で唯一食事が提供できる施設で、屋上は展望台になっている。櫓からの眺望を体験できる反面、地下遺構は影響を受けている可能性が高い。 ・リス村－昭和 40 年（1965）に開園した日本で初めてのリス村。煙硝蔵跡であったと伝えられている場所である。リス（タイワンリス）は昭和 11 年（1936）に岐阜公園を中心に行われた躍進日本大博覧会において、見世物として持ち込まれたもので、このとき山中に逃げ込み野生化したリスを調教している。かつて岐阜公園にあった動物園の延長上の施設であり、市内で動物と触れ合うことのできる数少ない施設でもあるが、城郭遺構との関係は希薄である。 ・鵜飼観覧所－戦前にあった納涼台を受け継いで昭和 28 年（1953）と昭和 36 年（1961）に造られた、長良川沿いの岸壁にある鉄筋コンクリート製の施設。現在は立ち入り禁止となっている。

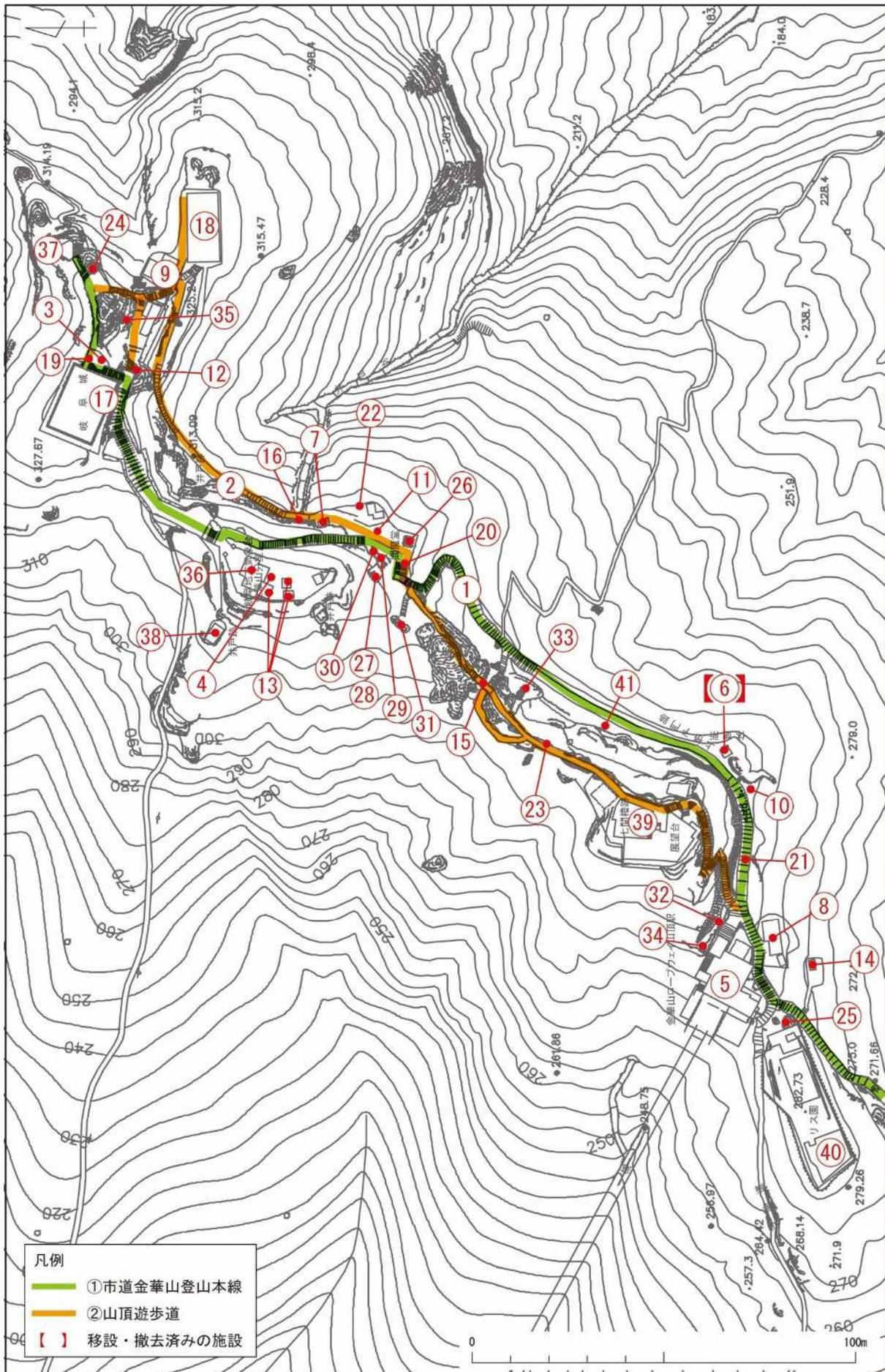


図 5-3 史跡を構成する要素位置図 (史跡範囲内 山上部)

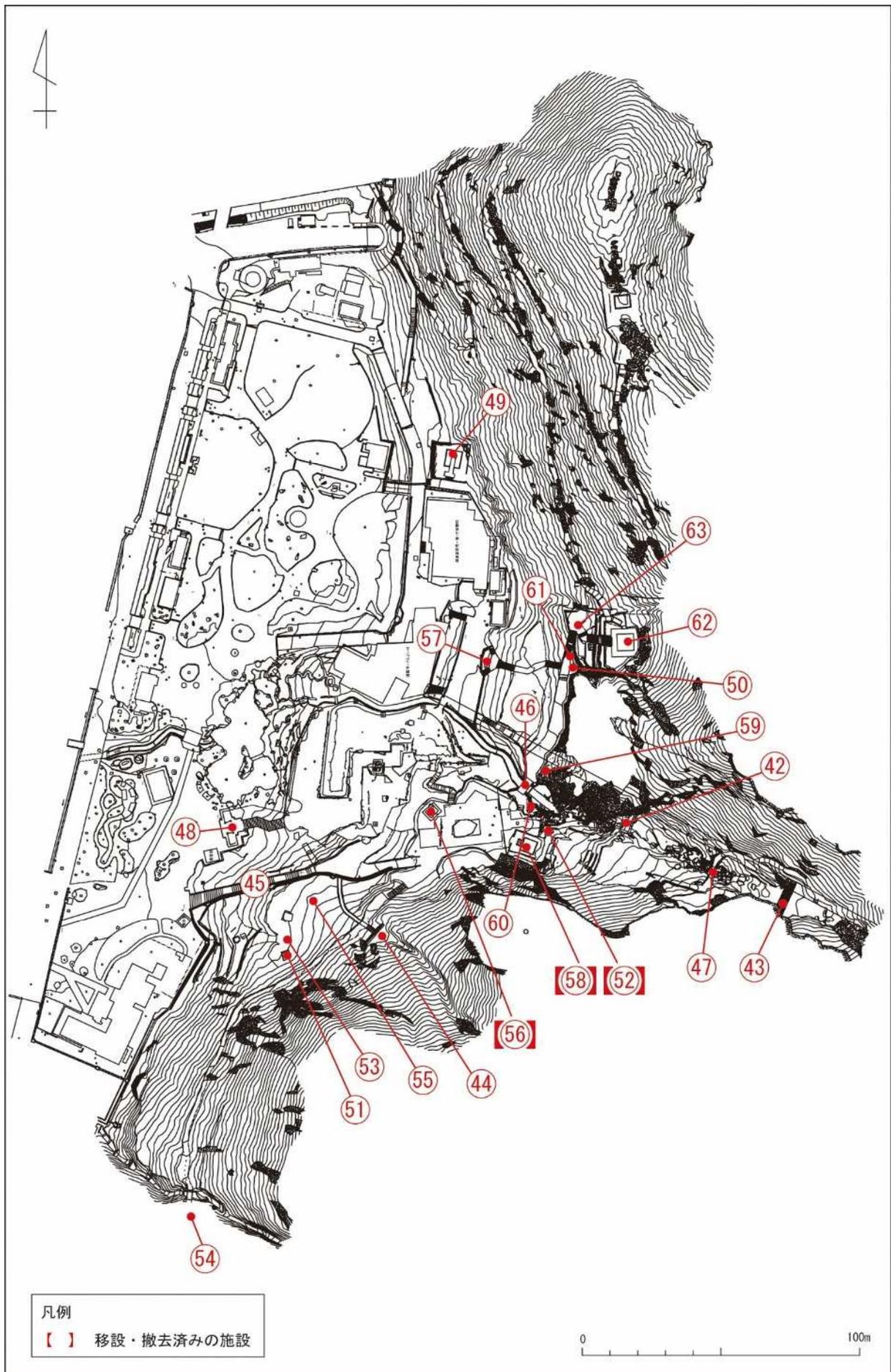


図 5-4 史跡を構成する要素位置図（史跡範囲内 山麓部）

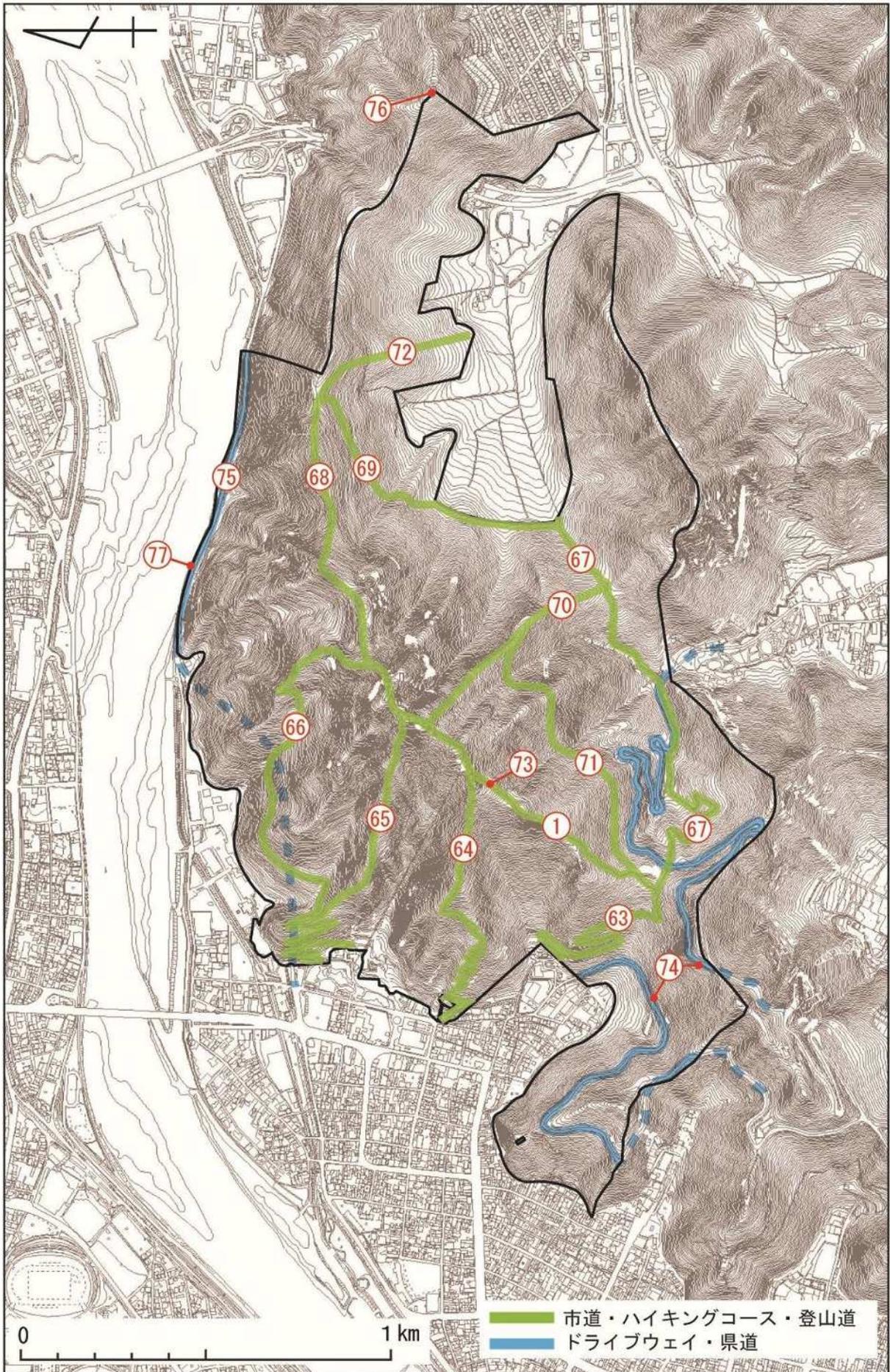


図 5-5 史跡を構成する要素位置図（史跡範囲内 山林部）

写真 5-1 A 地上に露出あるいは地下に埋蔵されている遺跡



山麓部 城主居館跡 (巨石列、南東から)



山麓部 城主居館跡 (石垣、北から)



山麓部 城主居館跡 (池泉遺構、北西から)



山上部 城郭遺構 (石垣、北東から)



山上部 城郭遺構 (井戸、南から)



山上部 城郭遺構 (堀切、東から)

写真 5-2 B 絵図に描かれ、現在も受け継がれているAと一体をなす地形及び地物



金華山全景 (西から)



自然地形 (タテカベ、北から)

写真 5-3 C 史跡の保存・活用に有効な要素 (1)



17. 山上部 復興天守 (南から)



18. 山上部 岐阜城資料館 (西から)



山上部 案内・標識等施設 (東から)



5. 山上部 便益施設 (ロープウェー駅、南から)



9. 山上部 便益施設 (資料館横トイレ、東から)



山上部 管理施設 (擬木柵、東から)



15. 山上部 管理施設 (松風橋、南から)



山麓部 遺跡公開施設 (西から)

※頭の番号は、図 5-3、5-4、5-5 に対応

写真 5-4 C 史跡の保存・活用に有効な要素 (2)



42. 山麓部 治山施設 (堰堤、西から)



文化的景観 (西から撮影)



川原町 (北から)

写真 5-5 D その他の要素



23. 山上部 近代以降城郭整備施設 (北から)



26. 山上部 石碑・社 (閻魔堂、北から)



36. 山上部 公益施設 (無線中継所、北東から)



74. 山林部 公益施設 (金華山ドライブウエー、西から)



39. 山上部 公園施設・その他（レストラン、南から）



40. 山上部 公園施設・その他（リス村、西から）



57. 山麓部 文学碑（西から）

表 5-11 保存活用に有効な要素及びその他の要素の変遷（史跡範囲内 山上部）

種別	要素	明治時代					大正時代		昭和時代						平成時代				令和時代													
		5	10	15	20	25	30	35	40	45	5	10	15	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	5	10	15	20	25	30	5
登山道	1 市道金華山登山本線	_____																														
	2 山頂遊歩道	_____																														
調査・研究・記録	3 方向標(天守横)	_____																														
	4 三角点(金花山) <small>(茶店・売店)</small>	_____																														
便益施設	5 ロープウェイ山頂駅・売店	_____																														
	6 [一ノ門跡横の四阿]	_____																														
	7 二の丸トイレ	_____																														
	8 山頂駅横トイレ	_____																														
	9 資料館横トイレ	_____																														
	10 一ノ門水のみ場	_____																														
	11 二の丸水のみ場	_____																														
	12 天守下水のみ場	_____																														
	管理施設	13 水道ポンプ小屋・タンク	_____																													
		14 倉庫(二の丸裏・リス村東側)	_____																													
		15 復興天守照明	_____																													
		16 松風橋	_____																													
16 二の丸橋		_____																														
街灯・擬木柵 電柱		_____																														
天守館・資料館	17 復興天守	_____																														
	18 岐阜城資料館 <small>(岐阜古城址之碑)</small>	_____																														
近代以降城郭整備施設	19 お城時計	_____																														
	20 二の丸門	_____																														
	21 天下第一の門	_____																														
	22 二の丸塀	_____																														
	23 レストラン～松風橋間土塀	_____																														
	石碑・社	24 金華山御嶽神社	中教院より移転 → _____																													
25 リス村前地藏菩薩		_____																														
26 閻魔堂		_____																														
27 題目塚		_____																														
28 石塔(題目塚横)		_____																														
29 灯籠(題目塚横)		_____																														
30 縁結神社(題目塚横)		_____																														
31 天狗岩横の社		_____																														
32 大金龍明神社		_____																														
33 馬場跡の松尾芭蕉歌碑		_____																														
34 石碑「敬勇霊神」		_____																														
35 大野万木歌碑	_____																															
公益施設	36 旧气象台、警察庁無線中継所・鉄塔	_____																														
	37 国交省無線中継所	_____																														
	38 岐阜放送無線中継所	_____																														
その他	39 山頂レストラン	_____																														
	40 リス村	_____																														
	41 山道ギャラリー	_____																														

表 5-12 保存活用に有効な要素及びその他の要素の変遷（史跡範囲内 山麓部）

種別	要素	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代	令和時代
治山施設	42 堰堤1					
	43 堰堤2					
	44 治山施設(D地区)					
管理施設	45 階段					
	46 橋1(平成の滝)					
	47 橋2(B地区奥)					
石碑・社	電柱					
	48 冠木門					
	(伊勢神祠)					
	49 母は尊し像					
	50 松尾芭蕉句碑					
	51 前島吉徳翁碑					
	52 [高橋慶三郎氏記念碑]					
	53 加納正雄碑					
	54 警友慰霊碑					
	55 堀口孤山君碑					
	56 [満蒙開拓碑]					
	57 文学碑					
	58 [明治大帝像]					
	59 小木曾旭晃歌碑					
	60 「平成の滝」碑					
	61 歌碑(松尾芭蕉句碑横)					
	62 三重塔					
63 三重塔下歌碑2						
	(千疊敷茶店)					

表 5-13 保存活用に有効な要素及びその他の要素の変遷（史跡範囲内 山林部）

種別	要素	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代	令和時代
登山道	64 市道七曲支線					
	65 市道百曲支線					
	66 市道水ノ手支線(馬の背登山道)					
	67 市道水ノ手支線(瞑想の小径)					
	68 市道達目線					
	69 鼻高ハイキングコース					
	70 大参道ハイキングコース					
	71 東坂ハイキングコース					
	72 唐釜ハイキングコース					
	73 大釜登山道					
施設	堰堤					
	七曲登山道防火水槽					
管理	石製道標(城〇丁)					
	国有林境界標(含宮内省時代)					
石	74 七曲石碑「中教院真覚堂神」					
公益施設	75 金華山ドライブウェイ					
	76 県道上白金真砂線					
	77 鉄塔					
その他	78 輪飼観覧所					
	(丸山神社)					
	(金比羅神社)					

表 5-14 保存活用に有効な要素及びその他の要素の変遷（史跡範囲外）

種別	要素	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代	令和時代
その他	[神道中教院]	—	—	—	—	—
	修景池(大正池)	—	—	—	—	—
	[動物舎]	—	—	—	—	—
	[グラウンド]	—	—	—	—	—
	[水族館]	—	—	—	—	—
	[図書館]	—	—	—	—	—
	[子供の広場]	—	—	—	—	—
	トイレ	—	—	—	—	—
	[木製遊具]	—	—	—	—	—
	修景池「信長の庭」	—	—	—	—	—
	公園資材置場	—	—	—	—	—
	物販建物(発掘案内所)	—	—	—	—	—
	[武徳殿]	—	—	—	—	—
	[科学館]	—	—	—	—	—
	[警察公舎]	—	—	—	—	—
	[白華庵]	—	—	—	—	—
	禪林寺	—	—	—	—	—
	事務所・無料休憩所・茶室	—	—	—	動物舎	—
	売店「榎木屋」	—	—	—	—	—
	売店「むらせ」	—	—	—	—	—
	売店「金華茶屋」	—	—	—	—	—
	輪飼収蔵庫	—	—	—	—	—
	失業対策詰所	—	—	—	—	—
	板垣退助像	—	—	—	—	—
	警察消防忠魂碑	—	—	—	—	—
	[物品陳列場]	—	—	—	—	—
	記念昆虫館	—	—	—	—	—
	名和昆虫博物館	—	—	—	—	—
	岐阜市歴史博物館	—	—	—	—	—
	女神像・噴水	—	—	—	—	—
	萬松館	—	—	—	—	—
	[伊勢神拝殿]	—	—	—	—	—
[野外音楽堂]	—	—	—	—	—	
加藤栄三・東一記念美術館	—	—	—	—	—	
ロープウェイ山麓駅	—	—	—	—	—	
山麓駅東側トイレ	—	—	—	—	—	
ポンプ室	—	—	—	—	—	

- C. 史跡の保存・活用に有効な要素
- 登山道
 - 案内・標識等施設
 - 便益施設
 - 治山施設
 - 管理施設
- D. その他の要素
- 近代以降城郭整備施設
 - 石碑・社
 - 公益施設
 - その他
 - 推定

※すでに撤去された施設は〔 〕で表記

※表 5-11～14 には、その要素区分と施設機能に応じて色分けし、各施設の存続期間を示した。そのうち、機能や場所を継承するものについては、赤矢印で関連を示している。また、施設名に付した通し番号は、施設位置図（図 5-3～5）、施設写真（写真 5-1～5）に対応する。ただし、史跡範囲外の施設、撤去された施設、複数個所の施設の番号は空欄としている。

第3節 地区区分

1. 計画における地区設定

(1) 地区の設定

史跡岐阜城跡は山上の城郭と山麓の居館を中心に、山全体を天然の要害とした山城である。複数あったとされる登城路は現在の登山道となっており、道沿いや尾根上には多くの砦跡が点在している。史跡の範囲は、分布調査や絵図資料、文献資料の検討から、直接の城域であったと考えられる現在の国有林を中心とした部分となっている。だが、砦跡は史跡境界の尾根をまたいで築かれたとみられるほか、南の山塊にも広がって分布している。また西側には総構に囲まれた城下町が築かれており、広義の岐阜城跡はこれらが一体で機能していたとみられる（図5-7）。

平成23年度の保存管理計画では、土地管理の実情と活用、整備の観点から、財務省所管地で岐阜公園開設区域を中心とした範囲を山麓部、山上城郭部分を山上部、それ以外を山林部と設定した。本計画では、基本的にこの区分を踏襲しつつ、近年の調査による成果を踏まえて、山麓部に新たに確認された赤ヶ洞周辺を追加、山上部に復興天守～裏門を追加することとする。

岐阜城跡は岐阜市観光の中核となる史跡であり、その活用・整備にあたっては、史跡範囲内だけでなく、岐阜城下町や長良川水辺空間等の周辺地区を含めた広域の中で位置付けて、一体で事業を推進していく必要がある。「岐阜公園再整備の考え方及び方針」、「長良川中流域における岐阜の文化的景観整備計画」、「ぎふ長良川鵜飼かわまちづくり計画」等の関連計画の地区区分を踏まえ、史跡岐阜城跡地区以外にも、岐阜公園地区、旧城下町地区、周辺砦群地区、川原町地区を設定した（図5-8）。

(2) 事業エリアの設定

設定した地区内において、今後、事業を検討する個所について、事業エリアを設定した。なお山上部については、全域が事業エリアに相当するものとする。事業エリアは、以下の観点を基準に設定を行った。史跡範囲内においては、2つ以上の項目が当てはまる区域、範囲外においては、特に③の観点から将来の追加指定検討のため重要な区域としている。図5-9に各エリアの設定理由を示す。

- ① 遺構の残存状況が比較的良好で、今後の保存・整備事業等が想定される範囲
- ② 登山道等の動線に近く、比較的安全に公開が可能な範囲
- ③ 岐阜城跡の構造解明のため、調査が必要な範囲

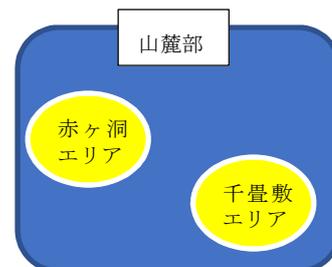


図5-6 部とエリアの関係模式図

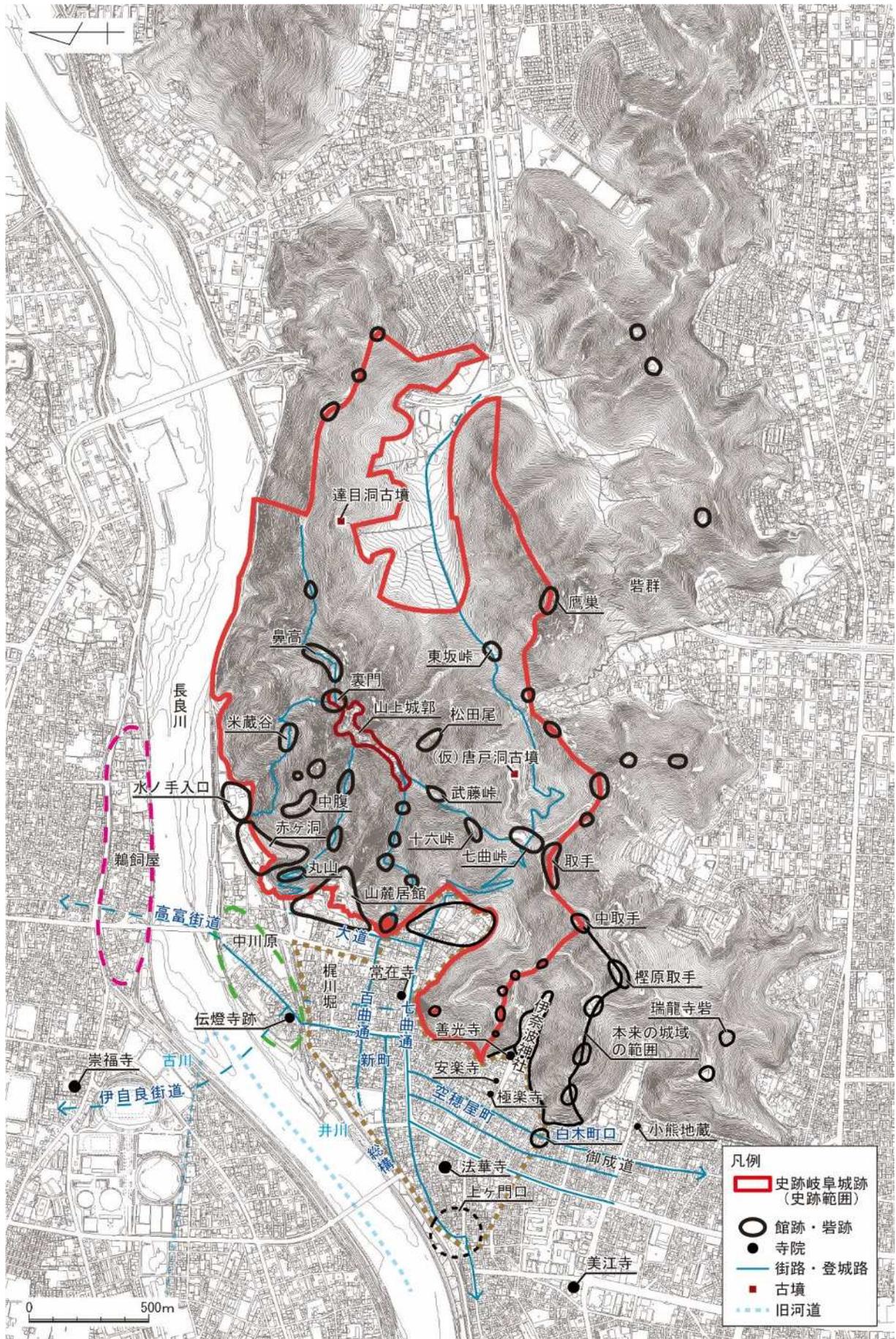


图 5-7 岐阜城跡全体構造图

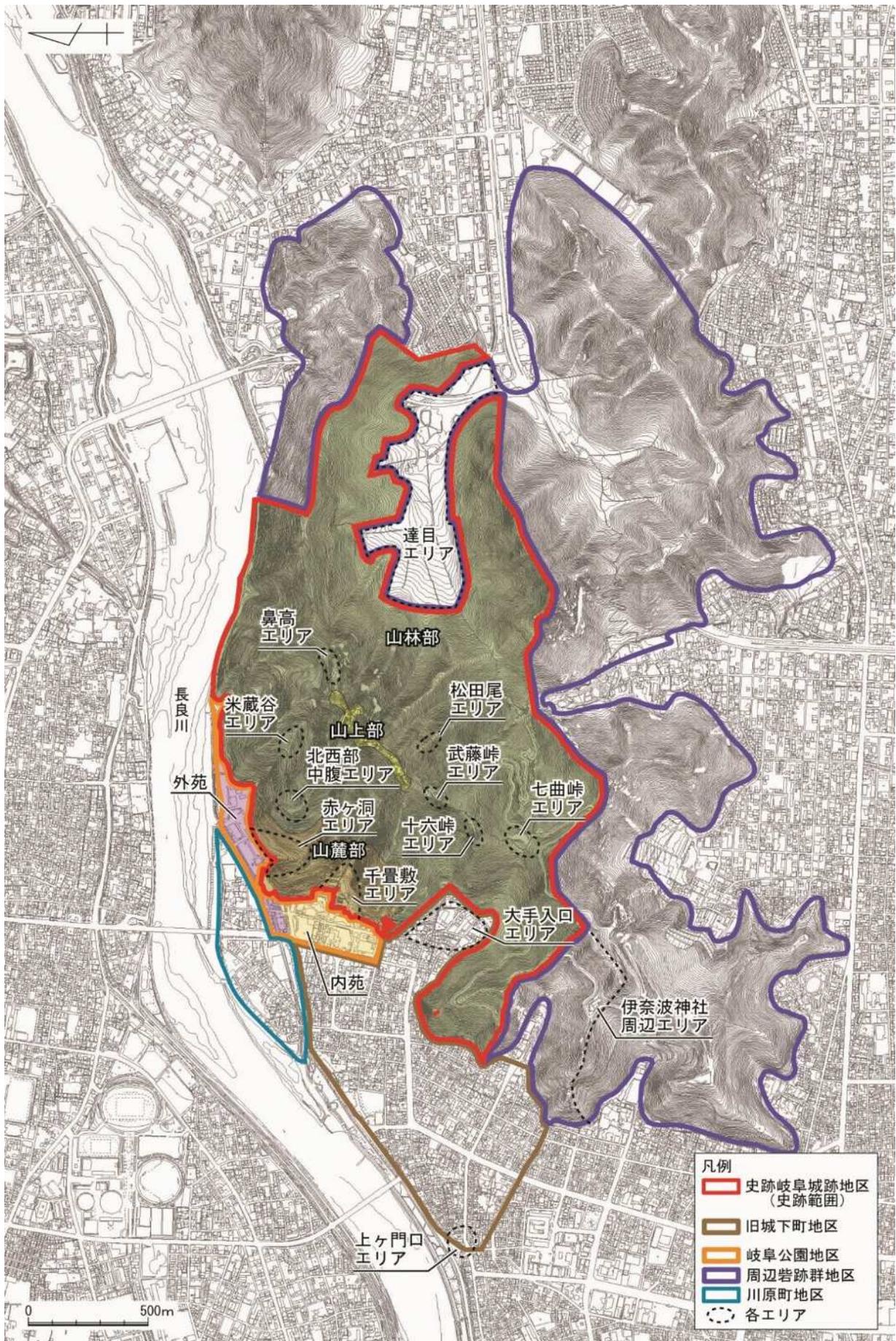


図 5-8 岐阜城跡地区区分図

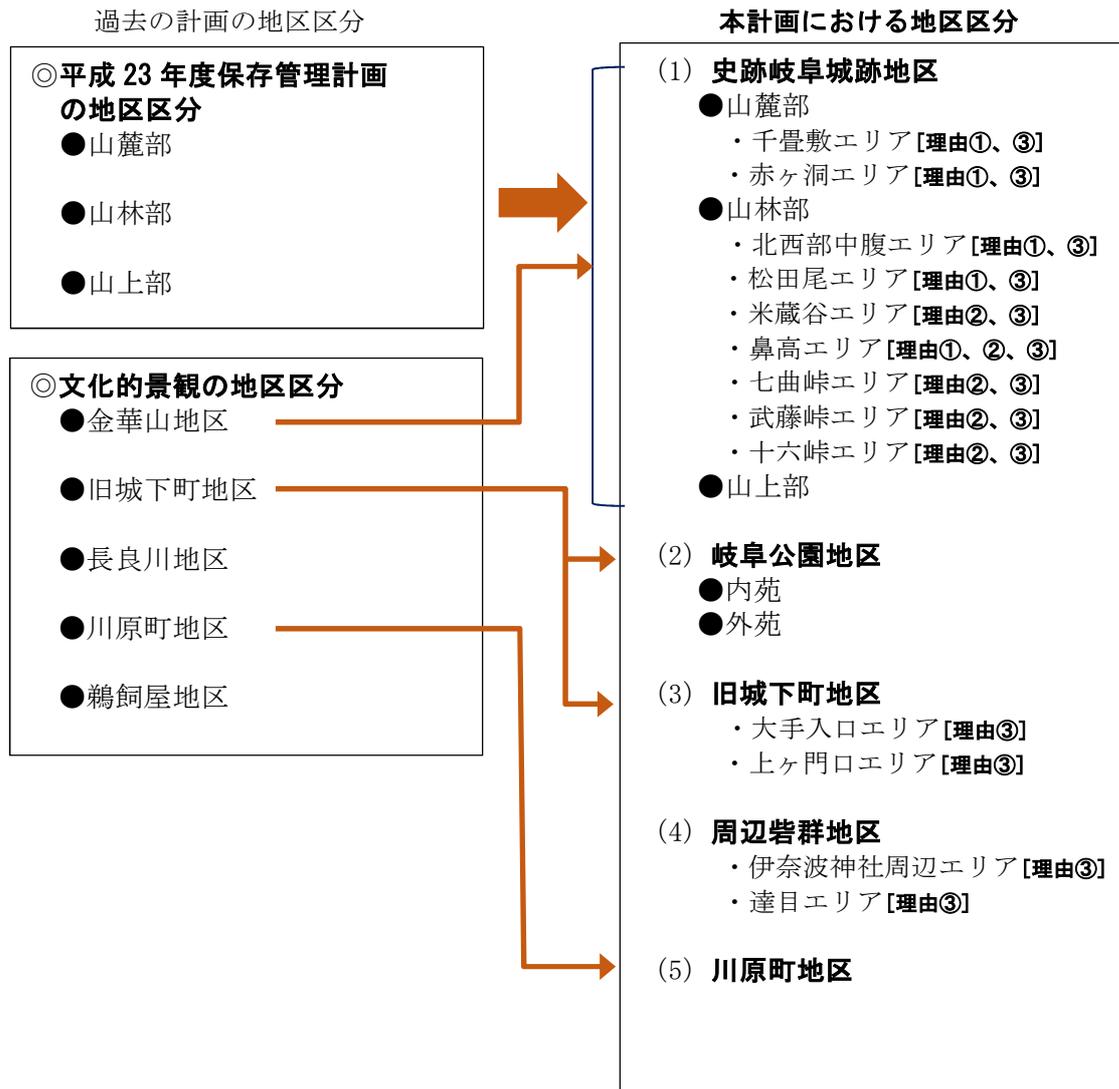


図 5-9 本計画における地区区分と対応関係

2. 各地区の概要

(1) 史跡岐阜城跡地区

●山麓部 — 史跡岐阜城跡地区のうち、岐阜公園開設区域を中心とした地域。事業エリアとして、歴代城主の居館跡である千畳敷エリアと織田秀信の別荘があったと伝えられる赤ヶ洞エリアを設定した。土地所有者は主に財務省だが、赤ヶ洞エリアは谷を境に林野庁と財務省に所管が分かれている。

●山林部 — 史跡岐阜城跡地区のうち山上・山麓部を除いた地域で、土地所有者は林野庁。全域が保安林となっている。事業エリアとして石垣や曲輪がまとまって確認された北西部中腹エリア、米蔵谷エリア、鼻高エリア、七曲峠エリア、武藤峠エリア、十六峠エリアを設定した。その他砦・登城路等の遺構が点在しており、将来的にエリアの追加が見込まれる。

●山上部 — 史跡岐阜城跡地区のうち、リス村がある煙硝蔵周辺から裏門までの間の、来訪者が集中する地域。土地所有者は林野庁で、復興天守～ロープウェー山頂駅間周辺は保安林除外地となっている。全域を事業エリアとして、取り組みを推進する。

(2) 岐阜公園地区

●内苑 — 岐阜公園のうち金華山トンネルより南側の地域。本来は千畳敷エリアも含むが、本計画では史跡範囲を除外した。「岐阜公園再整備の考え方及び方針」では、発掘調査・研究による成果を活かした整備を行う「戦国歴史ゾーン」として位置付けられている。

●外苑 — 岐阜公園のうち、金華山トンネルより北側の区域で、金華山・長良川などの豊かな自然環境を活かした「歴史的風致維持ゾーン」として位置付けられている。

(3) 旧城下町地区

かつての井口・岐阜城下町地域で、往時は総構の土塁と堀が巡っていた。南側の総構は削平、暗渠となっており、北側は現在の堤防と一体になっているとみられる。地区内には往時の名残を残す地区割りや寺社が点在している。長良川中流域における岐阜の文化的景観の選定範囲のうち、旧城下町地区にあたる。七曲道に続く大手入口エリアと、西側の出入り口となる上ヶ門口エリアを事業エリアとして設定した。

(4) 周辺砦群地区

史跡岐阜城跡地区の南側及び東側に広がる山林で、分布調査や絵図資料により砦跡の存在が明らかになっている。史跡の範囲が直接支配地である狭義の城域におおむね該当するのに対して、砦跡群地区は村や寺院を通じた間接支配地であったと考えられており、両者は一体で機能していたとみられる。伊奈波神社周辺エリアと達目エリアは、本来、狭義の城域に含まれるが、史跡範囲外であることから、周辺砦跡群の事業エリアとして設定した。

(5) 川原町地区

長良川を中心とした水辺空間地域。鶺鴒が開催される地区であるとともに、堤外地である川原町・鶺鴒屋には旅館・ホテル、観光施設が集積している。

